

國と申す國の者なり。此國は佛の世に出させ給ひし國よりは東に當りて二十萬餘里の外遙なる海中の小島なり。而に佛御入滅ありては既に二千二百二十七年なり。月氏漢土の人の此國の人人を見候へば此國の人の伊豆の大島奥州の東のわづ(夷)なんどを見るやうにころ候らめ。而に日蓮は日本國安房國と申す國に生れて候しが。民の家より出でて頭をりり袈裟をきたり。此度いかにもして佛種をもち(植)へ生死を離るる身とならんと思て候し程に。皆人の願せ給ふ事なれば阿彌陀佛をたのみ奉り幼少より名號を唱へ候し程に。いさゝかの事ありて。此事を疑ひし故に一の願をれこす。日本國に渡れる處の佛經並に菩薩の論と人師の釋を習ひ見候はばや。又俱舍宗成實宗律宗法相宗三論宗華嚴宗真言宗法華天台宗と申す宗どもあまた有りとさく上に。禪宗淨土宗と申す宗も候なり。此等の宗宗枝葉をばこまかに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思し故に。隨分にはしりまはり二十六年の年より三十二に至るまで二十餘年が間。鎌倉京叡山園城寺高野天王寺等の國國寺寺あらあら習ひ回り候し程に。一の不思議あり。我等がはかなき心に推するに佛法は唯一味なるべし。いづれもいづれも心に入して習ひ願はば生死を離るべ

しどころ思て候に。佛法の中に入りて惡く習ひ候ぬれば謗法と申す大なる穴に墮ち入つて。十惡五逆と申して日日夜夜に殺生偷盜邪淫妄語等をわかつ人よりも五逆罪と申して父母等を殺す惡人よりも。比丘比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく持ち心には八萬法藏をうかべて候やうなる。智者聖人の一生が間に一惡をもつくらず人には佛のやうにをもはれ。我身も又さながらに惡道にはよも墮ちじと思し程に。十惡五逆の罪人よりもつよく地獄に墮ちて阿鼻大城を栖として永く地獄をいでぬ事の候ける。譬ば人ありて世にあらんがために國主につかへ奉る程に。させるあやまちはなければ。我心のたらぬ土身にあやしきふるまひかさなるを。猶我身にも失ありともしらす。又傍輩も不思議どもをばざるに。后等の御事によりてあやまつ事はなければ。自然にふるまひあしく王なんどに不思議に見へまいらせぬれば。謀反の者よりも其失重し。此身どがにかけぬれば父母兄弟所從なんども又かるからざる失はにをこなはるる事あり。謗法と申す罪をば我もしらす人も失とも思はず。但佛法をならへば貴しとのみ思て候程に。此人も又此人にしたがふ弟子檀那等も無間地獄に墮るる事あり。所謂勝意比丘苦岸比丘なんど申せし僧は二百

五十戒をかたく持ち三千の威儀を一切かけずありし人なれども。無間大城に墮ちて出づる期見へず。又彼比丘に近づきて弟子となり檀那となる人入存の外に大地微塵の數よりも多く地獄に墮して師とともに苦を受くしつかし。此人後世のために衆善を修せしより外は。又心なかりしかどもかゝる不祥にあひて候しつかし。かゝる事を見候しゆへにあらあら經論を勘へ候へば。日本國の當世より其に似て候へ。代末になり候へば世間のまつり事のあらき(想)につけても世の中あやうかるべき上。此日本國は佗國にもにず佛法弘まりて國をさますべきかと思て候へば。中中佛法弘りて世もいたく衰へ人も多く惡道に墮つべしと見えて候。其故は日本國は月氏漢土よりも堂塔等の多き中に大體は阿彌陀堂なり。其上家ごとくは阿彌陀佛を木像に造り畫像に書き人毎に六萬八萬等の念佛を申す。又佗方を抛て西方を願ふ愚者の眼にも貴しと見候上。一切の智人も皆いみじき事なりとほめさせ給ふ。又人王五十代桓武天皇の御宇に弘法大師と申す聖人此國に生じて。漢土より眞言宗と申すめずらしき法を習て傳へ。平城嵯峨淳和等の王の御師となりて東寺高野と申す寺を建立し。又慈覺大師智證大師と申す聖人同く此宗を習て傳て叡山園城寺に弘通せしかば。日本國

の山寺一同に此法を傳へ。今に眞言を行ひ鈴をふりて公家武家の御祈をし候。所謂二階堂大御堂若宮等の別當等は也。是は古も御たのみある上當世の國主等家には柱天には日月河には橋海には船の如く御たのみあり。禪宗と申すは又當世の持齋等を建長寺等にあがめさせ給て父母よりも重し神よりも御たのみあり。されば一切の諸人頭をかたづけ手をあさふ。かゝる世にいかなればにや候らん。天變と申して彗星長く東西に渡り地天と申して大地をくつがへすこと大海の船を大風の時大波のくつがへすに似たり。大風吹て草木をからし飢饉も年年にゆき疫病月月にねこり大旱魃ゆきて河池田畠皆かはさぬ。如く此三災七難數十年起りて民半分に減じ殘りは或は父母或は兄弟或は妻子にわかれて歎く聲秋の蟲にことならず。家家のちりうする事冬の草木の雪にせめられたるに似たり。是はいかなる事かと經論を引見候へば佛の言く法華經と申す經を謗し我を用ざる國あらばかゝる事あるべしと。佛の記しをかせ給て候御言にすこしもたがひ候はず。日蓮疑云々日本には誰か法華經と釋迦佛をば謗すべきと疑ふ。又たまさか謗する者は少少ありとも信する者こそ多しあるらめと存候。爰に此日本の國人ごとに阿彌陀堂をつくり念

佛を申す。其根本を尋れば道綽禪師善導和尚法然上人と申三人の言より出でて候。是淨土宗の根本今の諸人の御師なり。此三人の念佛を弘めさせ給し時にのたまはく未有一人得者千中無一捨閑閑抛等云云。いふこゝろは阿彌陀佛をたのみ奉らん人は一切の經一切の佛一切の神をすてて但阿彌陀佛南無阿彌陀佛と申すべし。其上ことに法華經と釋迦佛を捨てまいらせよとすめしかばやすきまゝに案もなくばらばらと付候ぬ。一人付始しかば萬人皆付候ぬ。萬人付しかば上は國主中は大臣下は萬民一人も殘事なし。さる程に此國存の外に釋迦佛法華經の御敵人となりぬ。其故は今此三界皆是我有其中、衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護と説て。此日本國の一切衆生のためには釋迦佛は主なり師なり親なり。天神七代地神五代人王九十代の神と王とすら猶釋迦佛の所從なり。何況や其神と王との眷屬等をや。今日本國の大地山河大海草木等は皆釋尊の御財かかし。全一分も藥師佛阿彌陀佛等の佗佛の物にはあらず。又日本國の天神地神九十餘代の國主並に萬民牛馬生と生る生ある者は皆教主釋尊の一子なり。又日本國の天神地神諸王萬民等の天地水火父母主君男女妻子黑白等を辨給は皆教主釋

尊御教の師也。全藥師阿彌陀等の御教にはあらず。されば此佛は我等がためには大地よりも厚く虚空よりも廣く天よりも高さ御恩まします佛かかし。かゝる佛なれば王臣萬民俱に人ごとに父母よりも重んじ神よりもあが(崇)め奉るべし。かくだにも候はば何なる大科有とも天も守護してよもすて給はじ地もいかり給つべからず。然に上一人より下萬人に至るまで阿彌陀堂を立阿彌陀佛を本尊ともてなす故に天地の御いかりあるかと見候。嘗ば此國の者漢土高麗等の諸國の王に心よせたりとも。此國の王に背き候なば其身はたもちがたかるべし。今日本國の一切衆生如是、西方の國主阿彌陀佛には心よせなれども。我國主釋迦佛に背奉る故に此國の守護神いかり給つかど愚案に勘へ候。而を此國の人人阿彌陀佛を或は金或は銀或は銅或は木畫等に志を盡し財を盡し佛事をなし。法華經と釋迦佛をば或は墨畫或は木像にはくをひかず或は草堂に造りなんどす。例せば佗人をば志を重ね妻子をばもてなして父母にれるかなるが如し。又眞言宗と申す宗は上一人より下萬民に至るまで此を仰事日月の如し。此を重んずる事珍寶の如し。此宗の義云、大日經には法華經は二重三重の劣なり。釋迦佛は大日如來の眷屬なりなんど

申る此事は弘法慈覺智證の仰られし故に今四百餘年に叡山東寺園城日本國の智人一同の義也。又禪宗と申す宗は眞實の正法は教外別傳也法華經等の經は教内也。譬ば月をさす指 渡りの後の船 彼岸に到りてなにかせん月を見ては指は用事ならず等云云。彼人人謗法ともをもはず習傳たるまゝに存の外に申すなり。然ども此言は釋迦佛をあなづり法華經を失ひ奉る因縁となりて。此國の人人皆一同に五逆罪にすぎたる大罪を犯しながら而も罪ともしらず。此大科次第につもりて人王八十二代隱岐、法皇と申せし王並に佐渡、院等は我が相傳の家人にも及ざりし。相州鎌倉の義時と申せし人に代を取られさせ給ひしのみならず島島にはなたれて歎かせ給ひしが。終には彼島島にむせ隠れさせ給ひぬ。神ひは惡靈となりて地獄に墮候ぬ。其召仕はれし大臣已下は或は頭をはねられ或は水火に入り。其妻子等は或は思ひ死に死に或は民の妻となりて今五十餘年。其外の子孫は民のごとし。是偏に眞言と念佛等をもてなして法華經釋迦佛の大怨敵となりし故に。天照太神正八幡等の天神地祇十方の三寶にすてられ奉りて。現身には我所從等にせめられ後生には地獄に墮候ぬ。而に又代東にうつりて年をふるまゝに彼國主を失ひし。眞言宗等の

人人鎌倉に下り相州の足下にぐり入りてやうやうにたばかりの故に。本は上臆なればとてすかさされて鎌倉、諸堂の別當となせり。又念佛者をば善知識とたのみて大佛 長樂寺 極樂寺等とあがめ。禪宗をば壽福寺 建長寺等とあがめく。隱岐、法皇の果報の盡給し失より百千萬億倍すぎたる大科 鎌倉に出來せり。かゝる大科ある故に天照太神正八幡等の天神地祇釋迦多寶十方の諸佛一同に大にどがめさせ給ひ故に。鄰國に聖人有りて萬國の兵をあつめたる大王に仰付て。日本國の王臣萬民を一同に罰せんとたくませ給ひを。日蓮かねて經論を以て勘へ候し程に。此を有りのまゝに申さば國主もいかり萬民も用ひざる上。念佛者禪宗律僧眞言師等定て忿りをなしてあだを存じ。王臣等に讒奏して我身に大難れこりて。弟子乃至檀那までも少しも日蓮に心よせなる人あらば科になし。我身もあやうく命にも及んずらん。いかが案もなく申し出すべきとやすらひし程に。外典の賢人の中にも世のほるふべき事を知らなから申さぬは諛臣とてへつらへる者不知恩の人なり。されば賢なりし龍逢比干なんぞ申せし賢人は。頸をさられ胸をさかれしかども國の大事なる事をばはばからず申し候き。佛法の中には佛いまして云、法華經のかたきを見て世

をはばかり恐して申さずば。釋迦佛の御敵いかなる智人善人なりとも必無間地獄に墮つべし。譬へば父母を人の殺さんとせんを子の身として父母にしらせず。王をあやまち奉らんとする人のあらむを。臣下の身として知ながら代をわられて申さざらんがごとしなんど禁られて候。されば佛の御使たりし提婆菩薩は外道に殺され。師子尊者は檀彌羅王に頭をはねられ。竺の道生は蘇山へ流され。法道は面にかなやきをわてられき。此等は皆佛法を重し王法を恐れざりし故ぞかし。されば賢王の時は佛法をつよく立れば王兩方を聞あきらめて勝れ給。智者を師とせしかば國も安穩なり。所謂陳隋の大王桓武嵯峨等は天台智者大師を南北の學者に召合。最澄和尚を南都の十四人に對論せさせて論じかち給。しかば寺をたてて正法を弘通しき。天族王優陀延王武宗欽宗欽明用明或は鬼神外道を崇重し或は道士を歸依し或は神を崇めし故に。釋迦佛の大怨敵となりて身を亡し世も安穩ならず。其時は聖人たりし僧侶大難にあへり。今日本國すでに大謗法の國となりて佗國にやぶらるべしと見たり。此を知りながら申さずば縦ひ現在は安穩なりとも後生には無間大城に墮つべし。後生を恐して申ならば流罪死罪は一定なりと思。

定て。去文應の比故最明寺入道殿に申上ぬ。されども用給事なかりしかば。念佛者等此由を聞て上下の諸人をかたらひ打殺さんとせし程にかなはざりしかば。長時武藏守殿は極樂寺殿の御子なりし故に親の御心を知りて理不盡に伊豆國へ流し給ぬ。されば極樂寺殿と長時と彼一門皆ほろぶるを各御覽あるべし。其後何程もなくして召返されて後又經文の如く彌申つよる。又去文永八年九月十二日に佐渡國へ流さる。日蓮御勘氣の時申せしが如くどしうち(同士打)はじまりぬ。それを恐るるかの故に又召返されて候。しかれども用ユる事なければ萬民も彌彌惡心盛なり。縦ひ命を期として申たりとも國主用はずば國やぶれん事疑なし。つみしらせて後用はずば我失にはあらずと思て。去文永十一年五月十二日相州鎌倉を出て六月十七日より此深山に居住して門一町を出ず既に五箇年をへたり。本は房州の者にて候しが。地頭東條左衛門尉景信と申せしもの極樂寺殿藤次左衛門入道一切の念佛者にかたらはれて度度の問註ありて。結局合戦起りて候上極樂寺殿の御方人理をまげられしかば東條の郡ふせ(塞)がれて入事なし。父母の墓を見ずして數年なり。又國主より御勘氣二度なり第二度は外には遠流と聞へしかども内には

頸を切へしとて。鎌倉龍ノ口と申す處に九月十二日の丑の時に頸の座に引すへられて候き。いかがして候けん月の如くにをばせし物江ノ島より飛出でて使の頭へかかり候しかば。使れられてきらす。とからせし程に子細どもあまたありて其夜の頸はのがれぬ。又佐渡ノ國にてきらんとせし程に。日蓮が申せしが如く鎌倉にぞしうち始りぬ。使はしり下りて頸をさらす結句はゆるされぬ。今は此山に獨りすみ候。佐渡ノ國にありし時は里より遙にへだたれる野と山との中間につかはら(塚原)と申す御三昧所あり。彼處に一間四面の堂あり。ろらはいたま(板間)あわず四壁はやぶれたり雨はると(外)の如し雪は内に積る。佛はればせず筵疊は一枚もなし。然ども我根本より持まいらせて候教主釋尊を立たまいらせ。法華經を手ににぎり裳を笠をさして居たりしかども。人もみへず食もあたへずして四箇年なり。彼蘇武が胡國にとめられて十九年が間裳を雪を食としてありしが如し。今又此山に五箇年あり。北は身延山と申して天にはしだて南はたかとりと申して雞足山の如し。西はな、いたがれと申して鐵門に似たり東は天子がたけと申して富士の御山にたいし(太子)たり。四の山は屏風の如し。北に大河あり早河と名く早き事箭といるが

如し。南に河あり波木井河と名く大石を木の葉の如く流す。東には富士河北より南へ流たりせんのはこ(千餘)をつくが如し。内に瀧あり身延の瀧と申す白布を天より引が如し。此内に狭小の地あり日蓮が庵室なり。深山なれば晝も日を見奉らず夜も月を詠る事なし。峯にははから(巴峽)の猿かまびすしく谷には波の下る音鼓を打つがごとし。地にはしか(敷)ざれども大石多く山には瓦礫より外には物もなし。國主はにくみ給ふ萬民はとぶらはず。冬は雪道を塞ぎ夏は草をひしげり鹿の遠音うらめしく蟬の鳴聲かまびすし。訪人なければ命もつぎがたしはたへをかす衣も候はざりつるに。かゝる衣ををくらせ給ころいかにも申すばかりなく候へ。見し人聞し人だにもあはれとも申さず。年比なれし弟子つかへし下人だにも皆にげ失とぶらはざるに。聞かもせず見もせぬ人の御志哀なり。偏に是別れし我が父母の生れかはらせ給けるか。十羅刹の人の身に入りかはりて思よらせ給ふ歎。唐の代宗皇帝の代に蓬子將軍と申せし人の御子李如暹將軍と申せし人。敕定を蒙りて北の胡地を責し程に。我勢數十萬騎は打取られ胡國に生取られて四十年漸くへし程に。妻をかたらひ子をまうけたり。胡地の習生取をば皮の衣を服せ毛帯を

かけさせて候が。只正月一日計り唐の衣冠をゆるす。一年ごとに漢土を懸て肝をさり涙をながす。而程に唐の軍れこりて唐の兵胡地をせめし時ひまをわて胡地の妻子をふりすててにげ(逃)しかば。唐の兵は胡地のわびすとて捕へて頸をさらんとせし程に。とかうして徳宗皇帝にまいらせてありしかば。李いかにも申せども聞もほどこかせ給はずして南の國吳越と申方へ流されぬ。李如暹歎云進不得見涼原之本郷退不得逢胡地妻子云云。此心は胡地の妻子をもすて又唐の古き栖をも見ずあらぬ國に流されたりと歎く也。我身には大忠ありしかどもかゝる歎あり。日蓮も又如此此日本國を助げばやと思ふ心に依りて申出す程に。我生し國をもせかれ又流されし國をも離れぬ。すでに此深山にこもりて候が彼李如暹に似て候也。但し本郷にも流されし處にも妻子なければ歎事はよもあらじ。唯父母のはか(善)となれ(馴)し人のいかなるらんをばつかなしとも申計なし。但うれしき事は武士の習ひ君の御爲に宇治勢多を渡し前をかけなんとしてありし人は。たとひ身は死すれども名を後代に擧候がし。日蓮は法華經のゆへに度度所をれば戦を身し手を取れ(負)ひ弟子等を殺され兩度まで遠流せられ既に頸に及べ

り。是偏に法華經の御爲なり。法華經の中に佛説せ給はく。我滅度後後、五百歳二千二百餘年過ぎて此經閻浮提に流布せん時。天魔人の身に入りかはりて此經を弘めさせしとて。たまたま信する者をば或はのり打所をうつし或はころしなんどすべし。其時先さきをしてあらん者は三世十方の佛を供養する功德を得べし。我又因位の難行苦行の功德を讓べしと説せ給う取意。されば過去の不輕菩薩は法華經を弘通し給はし。比丘比丘尼等の智慧かしこく二百五十戒を持てる大僧ども集りて優婆塞優婆夷をかたらひて不輕菩薩をのり打せしかども。退轉の心なく弘させ給はしかば終には佛となり給ふ。昔の不輕菩薩は今の釋迦佛なり。それをろねみ打なんどせし大僧どもは千劫阿鼻地獄に墮ぬ。彼人人は觀經阿彌陀經等の數千の經一切の佛名彌陀念佛を申し法華經を晝夜に讀しかども。實の法華經の行者をあだみしかば。法華經念佛戒等も助け給はず千劫阿鼻地獄に墮ぬ。彼比丘等は始には不輕菩薩をあだみしかども後には心をひるがへして。身を不輕菩薩に任る事やつて(奴僕)の主に従がごとく有りしかども無間地獄をまぬかれず。今又日蓮にあだをせさせ給う日本國の人人も如此。此は彼には似るべくもなし。彼は罵

打うしかども國主の流罪はなし杖木瓦石はありしかども疵きずをかほり頸くびまでには及およばず。是は惡口杖木は二十餘年が間ひまなし疵をかほり流罪 頸に及ぶ。弟子等は或は所領を召され或はろう(牢)に入れ或は遠流し或は其内を出だし或は田島を奪ひなんどする事 夜打 強盜 海賊 山賊 謀叛等の者よりもはげしく行はる。此又偏に眞言念佛者禪宗等の大僧等の訴うなり。されば彼人人の御失うは大地よりも厚ければ此大地は大風は大海に船を浮うるが如く動轉どうてんす。天は八萬四千の星 暎うをなし晝夜に天變ひまなし。其上う日月大に變多し佛滅後既に二千二百二十七年になり候に。大族王が五天の寺をやき十六の大國の僧の頸を切り。武宗皇帝の漢土の寺を失ひ佛像をくだき。日本國の守屋もりやが釋迦佛の金銅の像を炭火すみびを以てやき僧尼を打うせめては還俗せさせし時も。是程の彗星大地震はいまだなし。彼には百千萬倍過すり候大惡にてころ候ぬれ。彼は王一人の惡心大臣以下は心より起る事なし。又權佛と權經との敵也僧も法華經の行者にはあらず。是は一向に法華經の敵王一人のみならず一國の智人並に萬民等の心より起れる大惡心なり。譬ば女人物をねたれば胸の内は大火もゆる故に。身變じて赤く身の毛さかさまにたち五體ごたいふるひ面に炎ほのほあが

りかほは朱をさしたるが如し。眼まろになりてねこ(貓)の眼のねづみをみるが如し。手わななきてかしわ(柏)の葉を風の吹ふに似たり。かたはら(傍)の人是を見れば大鬼神に異ならず。日本國の國主諸僧比丘比丘尼等も又如ごとし。是のむどころの彌陀念佛をば日蓮が無間地獄の業と云いつを聞き。眞言は亡國の法と云いつを聞き。持齋は天魔の所爲ところと云いつを聞いて。念珠をくりながら齒はをくひちがへ鈴かねをふるにくび(頸)をどりたり戒かいを持もつながら惡心をいだく極樂寺の生佛いきふつの良觀聖人。折紙をささげて上かみへ訴うへ建長寺の道隆聖人は興こに乗のりて奉行人にひざまづく。諸の五百戒の尼御前等ははく(帛)をつかひてでんろう(傳券)をなす。是偏に法華經を讀よみてよます聞きてよかかず。善導法然が千中無一と弘法慈覺達磨等の皆是戲論 教外別傳のあまきふる酒にぬはせ給たまてさかくるひ(酒莊)にてればするなり。法華最第一の經文を見ながら大日經は法華經に勝まさりたり禪宗は最上の法也律宗ころ貴けれ念佛ころ我等が分にはかなひたれと申まは。酒に酔よる人にあらずや。星を見て月にすぐれたり石を見て金にまされり東を見て西と云いふ天を地と申ま物ぐるひを本として。月と金かねは星と石とには勝まさりたり東は東 天は天なんと有りあるまゝに申ま者ものをばあたませ給たまはば。

勢の多きに付べきか只物ぐるひの多く集れるなり。されば此等を本とせし
云フにかひなき男女の皆地獄に墮ちん事ころあはれに候へ。涅槃經には佛説
給はく末法に入つて法華經を謗して地獄に墮る者は大地微塵よりも多く信じ
て佛になる者は爪ノ上の土よりも少しと説れたり。以此計らせ給フべし。日
本國の諸人は爪ノ上の土日蓮一人は十方の微塵にて候べき歟。然に何なる宿
習にてをはずれば御衣をば送らせ給フ。爪ノ上の土の數に入らんとをばすか。
又涅槃經云、大地の上に針を立てて大風の吹かん時大梵天より絲を下さんに
絲のはし(端)すぐに下つて針の穴に入る事はありとも。末代に法華經の行者に
はあひがたし。法華經云、大海の底に龜あり三千年に一度海上にあがる梅檀
の浮木の穴にゆきあひてやすむべし。而に此龜一目なるが而も僻目にて西
の物を東と見東の物を西と見也。末代惡世に生じて法華經並に南無妙法蓮
華經の穴に身を入るる男女にたとへ給へり。何なる過去の縁にてをはずれば
此人をとふらんと思食す御心はつかせ給けるやらん。法華經を見まいらせ
候へば釋迦佛の其人の御身に入らせ給てかゝる心はつくべしと説れて候。譬
へばなにとも思はぬ人の酒をのみてわいぬればあらぬ心出來り。人に物をと

らせばやなんと思つ心出來る。此は一生慳貪にして餓鬼道に墮すべきを其人の
酒の縁に菩薩の入、かはらせ給なり。濁水に珠を入ぬれば水すみ月に向ま
いらせぬれば人の心あこがる。畫にかける鬼には心なけれどもれろ(蛇)し。
とわり(後妻)を畫にかけば我夫をばとらぬどもうぬまし。錦のしとねに蛇を
れ(織)るは服せんとも思はず。身のあつき(熱)にあたゝか(温)なる風いとほし。
人の心も如此。法華經の方へ御心をよせさせ給は女人の御身なれども龍女
が御身に入らせ給。さては又尾張、次郎兵衛尉殿の御事見參に入つて候し
人なり。日蓮は此法門を申候へば佗人にはにす多くの人に見て候へとも。い
とをしと申、人は千人に一人もありがたし彼人はよも心よせには思はれたら
しなれども。自體人がらにくげ(憎氣)なるふりなくよろづの人になさけあら
んと思し人なれば。心の中はうけすころをばしつらめども。見參の時はい
つはりをろかにて有し人なり。又女房の信じたるよしありしかば實とは思
候はざりしかども。又いたう法華經に背く事はよもをばせじなればたのもし
さへんも候。されども法華經を失ふ念佛並に念佛者を信じ我身も多分は念佛
者にてをばせしかば後生はいかがとをばつかなし。譬は國主はみやづかへ

(仕宣)のねんごろなるには思のあるもあり又なきもあり。少しもをろか(疎)なる事候へばとがになる事疑(な)し。法華經も又如(レ)此。いかに信ずるやうなれども法華經の御かたきにも知れ知(レ)ざれ。まじはりぬれば無間地獄(疑)なし。是はさてをき候ぬ。彼女房の御歎(き)いかかをしはかるにあはれなり。たとへばふぢのはな(藤花)のさかんなるが松にかかりて思(事)もなきに松のにはかにかふれ。つた(蕪)のかき(垣)にかかれるがかきの破(た)るが如(レ)くにをばすらん。内へ入(レ)ば主(な)しやふれたる家の柱(はしら)なきが如(レ)し。客人(きやくびと)來れども外(と)に出でてあひしらうべき人もなし。夜のくらきにはねや(圃)すさまじくはか(墓)をみればしるしはあれども聲もきこへず。又思(や)る死出(し)の山三途の河をば誰とか越(へ)給らん只獨り歎(な)給らん。とどめをきし御前(みまへ)たちいかに我をばひとりやる(獨遣)らん。さはちぎらざりとや歎(な)せ給(ら)ん。かたがた秋の夜のふけゆくまゝに冬の嵐をとづるる聲につけても彌彌御歎(な)き重(おも)り候らん。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

弘安元年戊寅九月六日

日

蓮花押

妙法尼御前 御かたへ

○四條金吾殿御返事

啓二七八〇

抄一七三五

註一八一

拾四一九

扶一〇三

首下三三

錢一貫文給(て)頼基がまいらせ候(と)て法華經の御寶前に申(上)て候。定(て)遠(は)は教主釋尊並に多寶十方の諸佛近(は)日月の宮殿にわたらせ給(も)御照覽候ぬらん。さては人のよにすぐれんとするをば賢人聖人(と)をばしき人人も皆りねみねたむ事に候。いわうや常の人をや。漢皇の王昭君をば三千の(きさき)后(是)をりねみ帝釋の九十九億那由佗の(きさき)は橋戸迦(を)ねたむ。前(まへ)中書王(を)ばをの(小野)の宮の大臣(を)ねたむ。北野の天神をば時平(を)とど(大臣)是(を)ざんろう(譏奏)して流し奉る。此等(を)もてをばしめせ。入道殿の御内は廣かりし内なれどもせばくならせ給(ま)うたち(公達)は多くわたらせ給(ら)ん。内のとしごろ(年來)の人人あまたわたらせ給(へ)ば。池の水すくなくなれば魚さわがしく秋風立(ば)鳥こずぬ(槍)をあらう(う)様に候事に候へば。いくろばく(御内)の人人りねみ候らん。度度の仰(を)をかへしよりよりの御心にたがはせ給(へ)ば。いくろばくのざんげん(譏言)ころ候らん。度度の御所領をかへして今又所領給(は)らせ給(と)云云。此(程)の不思議は候はず此偏に陰徳あれば陽(あら)れたる報ありとは此(也)。我主に法華經を信(と)させまいらせんとをばしめす御心の

ふかき故か。阿闍世王は佛の御怨あだなりしが耆婆きば大臣の御すゝめにて。法華經を御信じありて代よを持テ給フ。妙莊嚴王は二子ふたりのみこの御すゝめにて邪見をひるがへし給フ。此又しかるべし貴邊の御すゝめにて今は御心もやわらげせ給ヒてや候らん。此偏に貴邊の法華經の御信心のふかき故也。根ふかければ枝さかへ源遠ければ流長しと申シて。一切の經は根あさく流ちかく法華經は根ふかく源とをし末代惡世までもつさずさかうべしと天台大師ありはし給ヘり。此法門につきし人あまた候しかどもをほやけわたくし(公私)の大難度度重かさなり候しかば。一年二年ころつさ候しが後後には皆或はをち或はかへり矢をいる。或はきはをちねども心をち或は心はをちねども身みをちぬ。釋迦佛は淨飯王の嫡子一閻浮提を知行する事八萬四千二百一十の大王なり。一閻浮提の諸王頭をかたふけん上うへ。御内に召シつかいし人十萬億人なりしかども。十九の御年淨飯王宮を出デさせ給ヒて檀特山に入リて十二年。其間御とも(伴)の五人なり所謂拘鄰くりんと頽躰あひと跋提ばつたいと十力迦葉じゆりきやう、拘利太子くりとなり。此五人も六年と申せしに二人は去リぬ殘りの三人も後の六年にすて奉リて去リぬ。但一人殘リ給ヒてころ佛にはならせ給ヒしが。法華經は又此にもすぎて人信じがたかるべし難信難解此也。又佛、在世よりも末法は大難かさなるべし。此をこらへん行者は我が功德にはすぐれたる事一劫とて説れて候へ。佛滅度後二千二百三十餘年になり候に。月氏一千餘年が間佛法を弘通せる人傳記にのせてかくれなし。漢土一千年日本七百年又目錄にのせて候しかども佛のごとく大難に値ある人人少すし。我も聖人我も賢人とは申せども況滅度後の記文に値ある人一人も候はず。龍樹菩薩天台傳教ころ佛法の大難に値ある人人にては候へども此等も佛説には及ラず事なし。此即代よのあが(上)り法華經の時に生レ値はせ給はざる故也。今は時すでに後五百歲末法の始也日には五月十五日 月には八月十五夜に似たり。天台傳教は先に生レ給ヘり今より後は又のちぐへ(後悔)なり。大陳すでに破レぬ餘黨よたうの物のかずならず。今ころ佛、記しをき給ヒし後五百歲末法の夜、況滅度後の時に當リて候へば。佛語むなしからずば一閻浮提の内うちに定まて聖人出現して候らん。聖人の出デるしるしには一閻浮提第一の合戦をこるべしと説れて候に。すでに合戦も起リて候にすでに聖人や一閻浮提の内うちに出デさせ給ヒて候らん。さきりん(麒麟)出テしかば孔子を聖人とする鯉り社しゃなつ(鳴)て聖人出テ給フ事疑ひなし。佛には栴檀の木をひ(生)て聖人とする。老子は二五の文を

踏で聖人としる。末代の法華經の聖人をば何を用ッてかしるべき。經云能
 說此經能持此經の人則如來の使なり。八卷一卷一品一偈の人乃至題目を唱
 る人如來の使なり。始中終すてずして大難ををす人如來の使なり。日蓮
 が心は全く如來の使にはあらず凡夫なる故也。但三類の大怨敵にあだまれ
 て二度の流難に値へば如來の御使に似たり。心は三毒ふかく一身凡夫にて候
 へども口に南無妙法蓮華經と申せば如來の使に似たり。過去を尋れば不輕菩
 薩に似たり。現在をどぶらうに加刀杖瓦石にたがら事なし未來は常詣道場
 疑なからん歎。これをやしな(養)はせ給う人人は豈同_ニ居淨土_{スル}の人にあらず
 や。事多シと申せどもとどめ候心をもて計らせ給うべし。ちどのうらう(所勞)よ
 くなりたり悦候。又大進阿闍梨の死去の事末代のぎば(書婆)いかでか此
 にすぐべきと皆人舌をふり候なり。さにて候けるやらん。三位房が事さう
 四郎が事此事は宛も符契符契と申あひて候。日蓮が死生をばまかせまいら
 せて候。全く佗のくすし(醫師)をば用まじく候なり。

弘安元年戊寅九月十五日

日 蓮 花 押

四條金吾殿

○上野殿御返事

啓三四二五

抄二二二六

音下四〇

語四四八

拾七二六

扶一三三三

鹽一駄はじかみ送り給候。金多して日本國の沙のごとくならば誰かたか
 らとしてはこのろこ(筐底)にれさむべき。餅多して一閭浮提の大地のごとく
 ならば誰か米の恩をれも(重)くせん。今年(ことし)は正月より日日に雨ふこと七
 月より大雨ひまなし。このところは山中なる上南は波木井河北は早河東は富
 士河。西は深山なれば長雨大雨時時日日につづく間山さけ(裂)て谷をうづ(埋)
 み石ながれて道をふせぐ。河たけくして舟わたらず。富人なくして五穀ともし
 商人なくして人あつまる事なし。七月なんどはしほ(鹽)一升をせに百しほ五
 合を麥一斗にかへ候しが今はせんたいしほなし。何を以てかかう(買)べき。み
 う(味噌)もたねぬ小兒のち(乳)をしのぶがごとし。かゝるところにこのしほを
 一駄給て候。御志大地よりもあつく虚空よりもひろし。予が言は力及ぶべか
 らずただ法華經と釋迦佛とにゆづりまいらせ候。事多シと申せども紙上には
 つくしがたし。恐恐謹言。

弘安元年九月十九日

日 蓮 花 押

上野殿御返事

上野殿御返事 (遺二五ノ四九)

千七百九十三

(内三十二ノ二十三)

○本尊問答鈔 啓二〇三七 鈔九二四 註一〇二八 音下九 語二二二 記上三三 拾三三 扶七八

問テ云、末代惡世の凡夫は何物を以て本尊と定ムべきや。答テ云、法華經の題目を以て本尊とすべし。問テ云、何レの經文何レの人師の釋にか出テたるや。答テ法華經の第四法師品ニ云、藥王在在處處ニ若シテ讀シ若シテ誦シ若シテ書キ若シテ經卷所住之處ニ皆應下起ニ七寶ノ塔極令中_レ高廣嚴飾上_レ不_レ須_レ復安_レ舍利_レ所以_レ者何_レ此中已_レ有_レ如來_レ全身_レ等云云。涅槃經_レ第四如來性品ニ云、復次_レ迦葉諸佛_レ所_レ師_レ所謂法也。是故_レ如來恭敬供養_レ以_レ法常_レ故_レ諸佛_レ亦常_レ云云。天台大師_レ法華二味_レニ云、於_レ道場_レ中_レ敷_レ好_レ高座_レ安_レ置_レ法華經_レ一部_レ亦未_レ必_レ須_レ安_レ形像舍利_レ並餘_レ經典_レ唯置_レ法華經_レ一部_レ等云云。疑テ云、天台大師の摩訶止觀_レ第二_レ四種三味の御本尊は阿彌陀佛也。不空三藏の法華經の觀智の儀軌は釋迦多寶を以て法華經の本尊とせり。汝何_レ此等の義に相違するや。答テ云、是私の義にあらす上_レに出_レすところの經文並に天台大師の御釋也。但_レ摩訶止觀の四種三味の本尊は阿彌陀佛と者_レ彼は常坐常行非行非坐の三種の本尊は阿彌陀佛也。文殊問經般舟三昧經 請觀音經等_レによる。是爾前の諸經の内未顯眞實の經也。半行半坐三昧には二あり。一には方等經_レ七佛八菩薩等を本尊とす彼經による。二に

は法華經_レ釋迦多寶等を引_キ奉れども法華三昧を以て案_ニ法華經を本尊とすべし。不空三藏_レ法華儀軌は寶塔品の文によれり。此は法華經の教主を本尊とす法華經の正意にはあらす。上_レに舉_ルる所の本尊は釋迦多寶十方の諸佛の御本尊 法華經の行者の正意也。問テ云、日本國に十宗あり所謂俱舍 成實律 法相三論 華嚴 眞言 淨土 禪 法華宗也。此宗は皆本尊まちまちなり。所謂俱舍 成實律の三宗は劣應身の小釋迦也。法相三論の二宗は大釋迦佛を本尊とす。華嚴宗は臺上のるさな(盧遮那)報身の釋迦如來。眞言宗は大日如來。淨土宗は阿彌陀佛。禪宗にも釋迦を用_ヒたり。何_レ天台宗に法華經を本尊とするや。答テ彼等は佛を本尊とするに是は經を本尊とす其義あるべし。問_テ其義如何_ニ佛と經といづれか勝_リたるや。答テ云、本尊と者勝_リたるを用_ヒべし。例_ニば儒家には三皇五帝を用_ヒて本尊とするが如く佛家にも又釋迦を以て本尊とすべし。問_テ云、然者汝云何_レ釋迦を以て本尊とせずして法華經の題目を本尊とするや。答_テ上_レに舉_ルるところの經釋を見給へ私の義にはあらす。釋尊と天台とは法華經を本尊と定_メ給へり。末代今の日蓮も佛と天台との如く法華經を以て本尊とする也。其故は法華經は釋尊の父母諸佛の眼目也。釋迦大日總_シ十方_レ諸佛

は法華經より出生し給へり。故に今能生を以て本尊とする也。問、其證據如何。答、普賢經ニ云、此大乘經典ハ諸佛ノ寶藏十方三世、諸佛ノ眼目出生三世、諸如來ノ種等云云。又云、此方等經ハ是諸佛ノ眼目、因是得具五眼佛ノ三種ノ身ハ從三方等一生、是大法印印涅槃樂海。如、此海中能生三種ノ佛、清淨ノ身、此三種ノ身ハ人天ノ福田應供ノ中ノ最等云云。此等の經文佛ハ所生法華經ハ能生佛ハ身也法華經ハ神也。然則木像畫像ノ開眼供養ハ唯法華經にかざるべし。而今木畫の二像をまうけて大日佛眼の印と眞言とを以て開眼供養をなすはもと(最)も逆なり。問、云、法華經を本尊とすると大日如來を本尊とするといづれか勝るや。答、弘法大師慈覺大師智證大師の御義の如くならば大日如來はすぐれ法華經は劣也。問、其義如何。答、弘法大師の祕藏寶鑰十住心に云、第八法華第九華嚴第十大日經等云云是は淺キより深キに入ル。慈覺大師の金剛頂經ノ疏蘇悉地經ノ疏智證大師の大日經ノ旨歸等ニ云、大日經第一法華經第二等云云。問、汝意如何。答、釋迦如來多寶佛總ノ十方の諸佛の御評定ニ云、已今當一切經ノ中ニ法華最爲第一云云。問、今日本國中の天台眞言等の諸僧並に王臣萬民疑テ云、日蓮法師めは弘法慈覺智證大師等に勝ルべきか如何。答、日蓮反詰

云、弘法慈覺智證大師等は釋迦多寶十方の諸佛に勝ルべき歟是一。今日本の國王より民までも教主釋尊の御子也釋尊の最後の御遺言ニ云、依テ法ニ不レ依テ人ニ等云云。法華最第一と申メは法に依ル也。然に三大師等に勝ルべしやどの給ふ諸僧王臣萬民乃至所從牛馬等にいたるまで不孝の子にあらずや是ニ。問、弘法大師は法華經を見給はずや。答、弘法大師モ一切經を讀ミ給へり。其中に法華經華嚴經大日經の淺深勝劣を讀ミ給に。法華經を讀ミ給フ様に云、文殊師利此法華經ハ諸佛如來祕密之藏於テ諸經ノ中ニ最在リ其下ニ。又讀ミ給フ様に云、藥王今告、汝ニ我所說ノ諸經而於テ此經ノ中ニ法華最第三云云。又慈覺智證大師ノ讀ミ給フ様に云、於テ諸經ノ中ニ最在リ其中ニ又最爲第二等云云。釋迦如來多寶佛大日如來一切諸佛法華經を一切經に相對して説ての給はく法華最第一。又説テ云、法華最在リ其上ニ云云。所詮釋迦十方の諸佛と慈覺弘法等の三大師といづれを本とすべきや。但、事を日蓮によせて釋迦十方の諸佛には永ク背キテ三大師を本とすべき歟如何。問、弘法大師は讚岐ノ國ノ人勤操僧正の弟子也三論法相の六宗を極む。去延曆二十三年五月桓武天皇の敕宣を帶テ漢土に入り順宗皇帝の敕に依リテ青龍寺に入りテ慧果和尚に眞言ノ大法を相承し給へり。慧果和尚は太

日如來よりは七代になり給フ人ばかりはかかれども法門はをなじ。譬ば瓶の水を猶瓶にうつすがごとし。大日如來と金剛薩埵 龍猛 龍智 金剛智 不空 慧果 弘法どの瓶は異なれども所傳、智水は同、眞言也。此大師彼眞言を習して三千、波濤をわたりて日本國に付給に。平城嵯峨淳和の三帝にさづけ奉る。去弘仁十四年正月十九日に東寺を建立すべき敕を給て眞言、祕法を弘通し給フ。然ば五畿七道六十六箇國二の島にいたるまでも鈴をとり杵をにぎる人たれかこの末流にあらざるや。又慈覺大師は下野國、人廣智菩薩の弟子也。大同三年御歳十五にして傳教大師の御弟子となりて叡山に登りて十五年之間六宗を習、法華眞言の二宗を習、傳。承和五年御入唐、漢土の會昌天子、御宇也。法全、元政、義眞、法月、宗叡、志遠等の天台眞言の碩學に値、奉りて顯密の二道を習、極、給フ。其上殊に眞言、祕教は十年之間功を盡、給フ。大日如來よりは九代也嘉祥元年仁明天皇の御師也。仁壽、齊衡に金剛頂經蘇悉地經、二經の疏を造り、叡山に總持院を建立して第三の座主となり給フ。天台の眞言これよりはじまる。又智證大師は讚岐國、人天長四年御年十四叡山に登り、義眞和尚、御弟子となり給フ。日本國にては義眞、慈覺、圓澄、別當等の諸徳に入宗を習、傳。去仁壽元年に

文徳天皇の敕を給て漢土に入る。宣宗皇帝、大中年中に法全、良諤和尚等の諸大師に七年之間顯密の二教習、極、給て。去天安二年に御歸朝、文徳、清和等、皇帝の御師也。何れも爲、現、爲、當、如、月、如、日、代代、明主時時、臣民信仰有り、餘、歸依無、怠。故に愚癡、一切偏に信するばかり也。誠、依法不依人の金言を不、背、之外は争か佛によらずして弘法等の人によるべきや。所詮其心如何。答、夫教主釋尊の御入滅一千年之間月氏に佛法の弘通せし次第は先五百年は小乗後、五百年は大乗小大權實の諍はありしかども顯密の定、は、かすかなりき。像法に入、て十五年と申せしに漢土に佛法渡る。始、は儒道と釋教と諍論して定、がたかりき。されども佛法ややく弘通せしかば小大權實の諍論いできたる。されどもいたく(甚)の相違もなかりしに。漢土に佛法渡りて六百年玄宗皇帝の御宇、善無畏金剛智不空の三三藏月氏より入り給て後眞言宗を立てしかば。華嚴法華等の諸宗は以外にくだされき。上、自、一人、下、至、萬民、眞言には法華經は雲泥也と思、しなり。其後徳宗皇帝の御宇に妙樂大師と申、人眞言は法華經にあながち(強)にをとりたりとればしめしかども。いたく立、る事もなかりしかば法華眞言の勝劣を辨、人なし。日本國は人王三十代欽明の

御時百濟國より佛法始て渡りたりしかども。始は神と佛との諍論こわく(強)して三十餘年はすぎにき。三十四代推古天皇の御宇に聖徳太子始て佛法を弘通し給ふ。慧觀 觀勒の二の上人百濟國よりわたりて三論宗を弘、孝徳、御宇に道昭禪宗をわたす。天武の御宇に新羅國の智鳳法相宗をわたす。第四十四代元正天皇、御宇に善無畏三藏大日經をわたす。然而不弘。聖武の御宇に審祥大徳朗辨僧正等華嚴宗をわたす。人王四十六代孝謙天皇、御宇に唐代の鑿真和尚律宗と法華經をわたす。律をばひろめ法華をば不弘。第五十代桓武天皇、御宇に延暦二十三年七月傳教大師敕を給て漢土に渡り。妙樂大師の御弟子道邃 行滿に値奉りて法華宗の定慧を傳へ。道宣律師に菩薩戒を傳へ。順曉和尚と申せし人に眞言の祕教を習傳へて日本國に歸り給て。眞言法華の勝劣は漢土の師のれしへに依りては難定、思食しければ。こゝにして大日經、法華經、彼釋と此釋とを引並へて勝劣を判給しに。大日經は法華經に劣りたるのみならず大日經の疏は天台の心をとりて我宗に入たりけりと勘へ給へり。其後弘法大師眞言經を下されける事を遺恨とや思食しけむ。眞言宗を立てんとせばかりて法華經は大日經に劣るのみならず華嚴經に劣れりと云云。あはれ慈覺智

證叡山園城にこの義をゆるさずば弘法大師の僻見は日本國にひろまらざらまじ。彼兩大師華嚴法華の勝劣をばゆるさねと法華眞言の勝劣をば永弘法大師に同心せしかば。存外に本傳教大師の大怨敵となる。其後日本國、諸碩徳等各智慧高有なれども彼三大師にこゝろざれば。今四百餘年之間日本一同に眞言は法華經に勝れけりと定畢。たまたま天台宗を習へる人人、眞言は法華に不及之由存ども。天台、座主御室等の高貴にえられて申事なし。あるは又其義をもわきまへぬかのゆへにからくして同の義をいへば。一向眞言師はさる事れもひもよらずとわらふなり。然ば日本國中に數十萬の寺社あり皆眞言宗也。たまたま法華宗を並ども眞言は主の如く法華は所從の如也。若兼學ノ人も心中は一同に眞言也。座主 長吏 檢校 別當 一向に眞言たるうへ。上に好むところ下皆したかふ事なれば一人ももれず眞言師也。されば日本國或は口には法華經最第一とはよめども心は最第二最第三也。或は身口意共に最第二三也。三業相應して最第一と讀る法華經の行者は四百餘年が間一人もなし。まして能持此經の行者はあるべしともねばへず。如來現在猶多怨嫉況滅度後の衆生は上一人より下萬民にいたるまで法華經の大怨敵也。然に日

蓮は東海道十五箇國ノ内第十二に相當、安房ノ國長狹ノ郡東條ノ郷片海かたうみの海人あまが子也。生年十二司郷の内清燈寺きよみでらと申ヌ山にまかりて。遠國なるうへ寺とはなづけて候へども修學ノ人なし。然而しかるに隨分諸國を修行して學問し候しはどに。我身は不肖也人はたしへず十宗の元起勝劣たやすくわさまへ(辨)がたきところ。たまたま佛菩薩に祈請して一切ノ經論を勘へて十宗に合せたえに。俱舍宗ハ淺近なれども一分は小乘經に相當するに似たり。成實宗は大小兼雜して謬悞あり。律宗は本は小乘 中比は權大乘 今は一向に大乘宗とれもへり。又傳教大師の律宗あり別に習フ事也。法相宗は源權大乘經の中の淺近の法門にてありけるが。次第に增長して權實と並び結句は彼宗宗を打テ破ランと存せり。譬は日本國の將軍將門純友等のごとし。下に居て上を破ル。三論宗も又權大乘の空の一分也此も我ハ實大乘とれもへり。華嚴宗は又權大乘と云ひながら餘宗にまされり譬は攝政關白のごとし。然而しかるに法華經を敵となして立テる宗なる故に臣下の身を以て大王に順せんとするがごとし。淨土宗と申ヌも權大乘の一分なれども善導法然がたばかりかしくして。諸經をば上げ觀經をば下シ正像の機をば上げ末法の機をば下シて末法の機に相叶へる念佛を取り出して。機を以

て經を打チ一代の聖教を失て念佛の一門を立テたり。譬は心かしくして身は卑者シキが身ヲ上テて心はかなきものを敬て賢人をうしなふがごとし。禪宗と申ヌは一代聖教の外に眞實の法有りと云云。譬ばをや(親)を殺して子を用ヒ主を殺せる所從、しかも其位につけるがごとし。眞言宗と申ヌは一向ニ誑惑せられ候が深々其根源をかくして候へば淺機の人あらはしがかし。一向ニ誑惑せられて數年を経て候。先天竺に眞言宗と申ヌ宗なし然有りと云云。其證據を可キ尋マ也。所詮大日經こゝにわたれり法華經に引キ向テ其勝劣を見レ之ラ處。大日經は法華經より七重下劣の經也證據彼ノ經此ノ經に分明也此不レ之。しかるを或ハ云フ法華經に三重の主君或ハ二重の主君也と云云。以外の大僻見也。譬ば劉聰りうとうが下劣の身として愍帝びんに馬の口をとらせ超高が民の身として横よこしまに帝位につきしがごとし。又彼天竺の大慢婆羅門が釋尊を床として坐せしがごとし。漢土にも知ル人なく日本にもあやめずしてすでに四百餘年をわくれり。如レ是ノ佛法の邪正亂レしかば王法も漸く盡キぬ。結句は此國佗國にやふられて亡國となるべきなり。此事日蓮獨リ勘へ知れる故に佛法のため王法のため諸經の要文を集めて一卷の書を造る。仍テ故最明寺入道殿に奉る立正安國論と名ツけき。其書に

くはしく申されども愚人は難し知り。所詮現證を引きて申すべし。抑も人王八十二代隱岐ノ法王と申す王有たまはしまし。去承久三年太歳五月十五日伊賀太郎判官光末を打捕まします。鎌倉の義時をうち給はむとの門出也。やがて五畿七道の兵を召して相州鎌倉の權ノ太夫義時を打給はんとし給つところに。還りて義時にまけ給ぬ。結句我身は隱岐ノ國にながされ太子二人は佐渡ノ國阿波ノ國にながされ給つ。公卿七人は忽に頸をはねられてき。これはいかにとしてまけ給けるぞ。國王の身として民の如くなる義時を打給はんは鷹の雉をとり猫の鼠を食にころあるべけれ。これは猫のねずみにくらはれ鷹の雉にとられたるやうなり。しかのみならず調伏ノ力を盡せり所謂天台ノ座主慈圓僧正眞言ノ長者 仁和寺ノ御室 園城寺ノ長吏總ノ七大寺十五大寺。智慧戒行は日月の如く祕法は弘法慈覺等の三大師ノ心中ノ深密ノ大法 十五壇の祕法也。五月十九日より六月の十四日にいたるまであせ(汗)をながしなづき(頭腦)をくだきて行き。最後には御室紫宸殿にして日本國にわたりていまだ三度までも行はぬ大法。六月八日始て行つ之程に。同十四日に關東の兵軍宇治勢多をれしわたりて洛陽に打入りて三院ヲ生ヲ取り奉りて九重に火を放て一時に燒失す。三

院をば三國へ流罪し奉りぬ。又公卿七人は忽に頸をきる。しかのみならず御室の御所に押入りて最愛ノ弟子の小兒勢多伽と申せしをせめいだして終に頸をきりにき。御室不堪思死給畢ぬ母も死ス。童も死ス。すべて此いのりをたのみし人いく千萬といふ事をしらす死にき。たまたまいき(生)たるもかひなし。御室祈りを始給し六月八日より同十四日までなかをかふれば七日に満じける日也。此十五壇の法と申すは一字金輪 四天王 不動 大威徳 轉法輪 如意輪 愛染王 佛眼六字 金剛童子 尊星王 太元守護經等の大法也。此法の詮は國敵王敵となる者を降伏して命を召取りて其魂を密嚴淨土へつかはすと云フ法也。其行者の人人モ又不輕。天台ノ座主慈圓 東寺 御室 三井ノ常住院ノ僧正等の四十一人並伴僧等三百餘人也云云。法と云ひ行者と云ひ又代も上代也いかにとしてまけ(負)給けるぞ。たとひかつ(勝)事ころなくとも即時にまければりてかゝるはぢ(恥)にあひたりける事。いかなるゆへといふ事を餘人いまだしらす。國主として民を討事鷹の鳥をとらんがごとし。たとひまけ給つとも一年二年十年二十年もさうべきぞかし。五月十五日にこりて六月十四日まけ給ぬわづかに三十餘日也。權ノ大夫殿は此事ヲ兼てしらねば

祈禱もなしかまへ(構)もなし。然而日蓮小智を以て勘へたるに其故あり所謂彼眞言ノ邪法の故也。僻事ひがことは一人なれども萬國のわづらひ也。一人として行なども一國二國やふれぬぬべし況や三百餘人をや。國主とともに法華經の大怨敵となりぬいかでかほろびざらん。かゝる大惡法とし(年)をへてやうやく關東に落ち下りて諸堂の別當供僧となり連連と行り。本より邊域の武士なれば教法の邪正をば不知しただ三寶をばあがむべき事とばかり思ふゆへに。自然としてこれを用ときたりてやうやく年數を経る程に。今佗國のせめをかうふりて此國すでにほろびなんとす。關東八箇國のみならず叡山東寺園城七寺等座主別當皆關東の御はからひとなりぬるゆへに。隱岐ノ法皇のごとく大惡法の檀那と成り定まり給とぬる也。國主となる事は大小皆梵王帝釋日月四天の御計也。法華經の怨敵となり定給らはば忽とに治罰すべきよしを誓と給へり。隨つて人王八十一代安徳天皇ニ太政カ入道ノ一門與力して兵衛ノ佐頼朝を調伏せんがために。叡山を氏寺と定め山王を氏神とたのみしかども安徳は西海に沈しみ明雲は義仲に殺さる。一門皆一時にほろび畢す。第二度也今度は第三度にあたる也。日蓮がいさめを御用となくて眞言の惡法を以て大蒙古を調伏せられれば。日本國還つて

調伏せられなむ還著於本人と説けりと申す也。然則罰を以て利生を思はつに法華經にすぎたる佛になる大道はなかるべき也。現世の祈禱ノ兵衛ノ佐殿 法華經を讀誦する現證也。此道理を存せる事は父母と師匠との御恩なれば。父母はすでに過去し給と畢す。故道善御房は師匠にてははしまししかども法華經の故に地頭にねられ給とて。心中には不便とればしつらめども外うにはかたきのやうにくみ給とぬ。後にはすこし信を給とたるやうにきこへしかども。臨終にはいかにやればしけむればつかなし。地獄まではよもればせじ。又生死をはなれる事はあるべしともたばへず。中有ちゆうにやただよひますらむとなげかし。貴邊は地ののいかりし時義城房とともに清澄寺を出でてはせし人なれば。何となくともこれを法華經の御奉公とればしめして生死をはなれさせ給とべし。此御本尊は世尊説かかせ給とて後二千二百三十餘年が間一閻浮提の内にいまだひろめたる人候はず。漢土の天台日本の傳教はほしろしめしていさゝかひろめさせ給はず。當時ころひろまらせ給とべき時にあたりて候へ。經には上行無邊行等ころ出でてひろめさせ給とべしと見へて候へどもいまだ見へさせ給はず。日蓮は其人には候はねどもほぼこゝろわて候へば。地涌の菩薩の

出させ給うまでの口ずさみにあらわら申して況滅度後のほこさきに當候也。願は此功德を以て父母と師匠と一切衆生に回向し奉と祈請仕候。其旨をしらせまいらせむがために御不審を書きたくりまいらせ候に。忙事をすてて此御本尊の御前にして一向に後世をもいのらせ給候へ。又これより申さんと存候。いかにも御房たちはからい申させ給へ。

日 蓮花押

明治三十五年七月四日岩本實相寺ニ於テ開山源師正應三年七月十五日ノ御寫ヲ以テ對校ス復同年十二月十八日北山本門寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス惜哉不足ナリキ其不足ヲハ延山朝師ノ御本ヲ以テ補校ス(稻田海雲記)

高祖遺文錄卷之二十六

○大田殿女房御返事 啓三四四九 鈔二三三五 語五一 拾七三三 扶一三三二 音下四一

八木一石付十合者大旱魃の代には(渴)ける物に水をほどこしては。大龍王と生して雨をふらして人天をやしな(養)う。うぬ(飢)たる代に食をほどこせる人は國王と生して其國ゆたかなり。過去の世に金色と申大玉ましまし其國をば波羅奈國と申。十二年が間旱魃ゆきて人民うぬ死ぬ事れびたし。宅中には死人充滿し道路には骸骨充滿せり。其時大王一切衆生をあはれみてたゞくの藏をひらきて施をほどこし給。藏の中の財つきて唯一日の御供のみこのりて候し。衆僧をあつめて供養をなし。王と后と衆僧と萬民と皆うぬ死なんとせし程に。天より飲食雨のごとくふりて大國一時に富貴せりと金色王經にどかれて候。此も又かくのごとし。此供養によりて現世には福人となり。後生には靈山淨土へまいらせ給へし。恐恐謹言。

九月二十四日

日 蓮花押

大田殿入道殿女房御返事

大田殿女房御返事 (遺二六ノ一)

千八百九

(内三十四ノ一)

○十字御書 考八四九
十字三十。法華經の御寶前につみ(積)まいらせ候ぬ。又すみ(炭)二へい(俵)給候。恐謹言。

十二月廿一日

蓮花押

ほり(堀)の内殿御返事

○四條金吾殿御返事

啓二七九三 鈔一七四五 語三三四 音下三三 拾四 扶十三八

鷺目一貫文給候畢。御所領上より給らせ給て候なる事。まこととも覺へず候夢かどあまりに不思議に覺へ候。御返事なんともいかやうに申へしとも覺へず候。其故はどの(殿)の御身は日蓮が法門御ゆへに日本國並にかまくら中御内の人人さうだち(公達)までうけず。ふしぎ(不思議)にをもはれて候へば。其御内にをせむだにも不思議に候に。御恩をかうほらせ給へばうちかへし又うちかへしせさせ給へば。いかばかり同れいともふしぎとをもひ上もあまりなりとをばすらむ。さればこのたびはいかんが有べかるらんとらたがひ思候つる上。御内の數十人の人人うつた(訴)へて候へば。さればこう

いかにもかなひがたかるべし。あまりなる事なりと疑候つる上。兄弟にもすてられてをばするにかゝる御をん(恩)面目申はかりなし。かの處はどのをか(殿)三倍とありばして候上。さど(佐渡)の國のものこれに候がよくよく其處をしりて候が申候は。三箇郷の内にかたと申は第一の處也。田畠はすくなく候へともとく(徳)ははかり(盛)なしと申候。二所はみねんぐ(御年貢)千貫一所は三百貫と云云。かゝる處也と承はる。なにとなくともとうれい(同謀)といひ。したしき人人と申すて(捨)はてられてわらひよるこびつるに。どのをかにをとり(劣)て候處なりとも。御下文は給たく候つるがかし。まして三倍の處也と候。いかにわろくともわろきよし人にも又土へも申させ給へからず候。よきところよきところと申給はば又かさねて給はらせ給べし。わろき處徳分なしなむと候はば天にも人にもすてられ給候はむするに候。御心へあるべし。阿闍世王は賢人なりしが父をころせしかば。即時に天にもすてられ大地もやぶれて入へかりしかども。殺されし父の王一日は五百りやう(輛)五百りやう數年が間佛を供養しまいらせたりし功德と。後に法華經の檀那となるべき功德によりて。天もすてがたし地もわれずついに地

獄にをちずして佛になり給たまき。どの(嬰)も又かくのごとし兄弟にもすてられ
 同れいにもあだまれさうだち(公達)にもうば(害)められ日本國の人にもにくま
 れ給たまつれども。去文永八年の九月十二日の子丑の時日蓮が御勘氣をかほり
 し時。馬の口にとりつきて鎌倉を出でてさがみ(相摸)のぬち(依智)に御ともあ
 りしが。一閻浮提第一の法華經の御かたうとにて有りしかば梵天帝釋もすて
 かねさせ給へるか。佛にならせ給はん事もかくのごとし。いかなる大科あり
 ども法華經をひむかせ給はず候し。御ともの御ほうこう(奉公)にて佛になら
 せ給たまべし。例せば有徳國王の覺徳比丘の命いのちにかはりて釋迦佛とならせ給
 がごとし。法華經はいのり(祈)とはなり候けるず。あなかしこあなかしこ。い
 よいよ道心堅固にして今度佛になり給へ。御一門の御房たち又俗人等にもか
 かるうれしき事候はず。かう申せば今生のよく(慈)とをほすか。うれも凡夫
 にて候へばさも候へき上う。欲をもはなれずして佛になり候ける道の候けるず。
 普賢經に法華經の肝心を説まて候不レ斷ニ煩惱ヲ不レ離ニ五欲ヲ等云云。天台大師
 の摩訶止觀ニ云ク煩惱即菩提生死即涅槃等云云。龍樹菩薩の大論に法華經の一
 代にすぐれていみじきやうを釋ン云ク譬ハ如シ大藥師ノ能變ニ毒ヲ爲ス藥等云云。小

藥師は以テ藥ヲ治シ病ヲ大醫は大毒をもつて大重病を治ス等云云。

弘安元戊寅年十月 日

蓮花押

四條金吾殿御返事

○上野殿御返事 考三四

いるのいも(幸)一駄かうじ(柑子)一こ(籠)せに(錢)六百のかわり御ござのむしろ
(籠)十枚給たま畢シ。去今年は大おわき(疫)此の國にをこりて人の死シ事大風に木のた
 うれ大雪に草のれるるがごとし。一人ものこるべしともみへず候き。しかれど
 も又今年の寒温時にしたがひて。五穀は田畠にみち草木はやさん(野山)にねひ
 ふさがりて堯舜の代のごとく成劫のはじめかどみへて候しほとに。八月九月
 の大雨大風に日本一同に不熟ふじやくゆきてのこれる萬民冬をすごしがたし。去寛喜
 正嘉にもこの來らん三災にもれとらざるか。自界叛逆して盜賊國に充滿シ佗界
 さういて合戦に心をつひやす。民の心不孝にして父母を見ル事佗人のごとく。
 僧尼は邪見にして狗犬と猿猴とのあへるがごとし。慈悲なければ天も此國を
 まほらす邪見なれば三寶にもすてられたり。又疫病もしばらくはやみ(止)て

みねしかども。鬼神かへり入かのゆへに。北國も東國も西國も南國も一同にやみなげ(病歎)くよしきこへ候。かゝるよ(世)にいかなる宿善にか。法華經の行者をやしなわせ給事ありがたく候ありがたく候。事事見參の時申すべし。恐恐謹言。

後十月十二日

日 蓮花押

上野殿御返事

明治三十六年一月十七日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス但シ年號ハ弘安元年ト細注アリ (稻田海業記)

○千日尼御前御返事 啓二八九五 鈔一八二二 音下二六 語三三七 拾四五〇 扶一〇七三
青鳧一貫文干飯一斗種種ノ物給候畢。佛に土の餅を供養せし徳勝童子は阿育大王と生たり。佛に漿をまひらせし老女は辟支佛と生たり。法華經は十方三世の諸佛の御師也。十方の佛と申すは東方善徳佛 東南方無憂徳佛 南方栴檀徳佛 西南方寶施佛 西方無量明佛 西北方華徳佛 北方相徳佛 東北方三修行佛 上方廣衆徳佛 下方明徳佛也。三世の佛と申すは過去莊嚴劫の千佛

現在賢劫の千佛 未來星宿劫の千佛。乃至華嚴經法華經涅槃經等の大小權實顯密の諸經に列り給へる一切の諸佛盡十方世界の微塵數の菩薩等も。普悉く法華經の妙の一字より出生し給へり。故に法華經の結經 普賢經云、佛三種ノ身、從三方等一生等云云。方等者月氏の語漢土には大乘と翻す大乘と申すは法華經の名也。阿含經は外道の經に對すれば大乘經。華嚴般若大日經等は阿含經に對すれば大乘經 法華經に對すれば小乘經也。法華經に勝たる經なき故に一大乘經也。例せば南閻浮提八萬四千の國國の王王は其國國にては大王と云フ轉輪聖王に對すれば小王と申す。乃至六欲四禪の王王は大小に渡る。色界の頂の大梵天王獨り大王にして小の文字をつくる事なきが如し。佛は子也 法華經は父母也。譬ば一人の父母に千子有て一人の父母を讚歎すれば千子悦をなす一人の父母を供養すれば千子を供養するになりぬ。又法華經を供養する人は十方の佛菩薩を供養する功德と同じき也。十方の諸佛は妙の一字より生じ給へる故也。譬ば一の師子に百子あり彼百子諸の禽獸に犯さるるに。一の師子王吼れば百子力を得て諸の禽獸皆頭七分にわる。法華經は師子王の如し一切の獸の頂とす。法華經の師子王を持つ女人は一切の地獄餓鬼

ば。定業の者は藥變じて毒となる法華經は毒變じて藥となると見えて候。日蓮不肖の身に法華經を弘めんとし候へば天魔競ひて食をうばはんとする歟と思へて不歎候つるに。今度の命たすかり候は偏に釋迦佛の貴邊の身に入り替らせ給て御たすけ候歟。是はさてをさぬ。今度の御返りは神を失て歎候つるに。事故なく鎌倉に御歸候事悦いくろばくず。餘りの覺束なさに鎌倉より來る者ごとに問候つれば。或人は湯本にて行合せ給と云。或人はこぶづ(國府津)にと或人は鎌倉にと申候しにこころ心落居て候へ。是より後はればるげならずは御渡りあるべからず。大事の御事候はば御使にて承り候べし。返返今度の道はあまりにればつかなく候つる也。敵と申者はわすれ(忘)させてねらふ(狙)ものなり。是より後に若やの御旅には御馬をれしましませ給ふべからずよき馬にのらせ給へ。又供の者どもせん(詮)にあひぬべからんもの又どうまる(膈丸)もちあげぬべからん。御馬にのり給べし。摩訶止觀第八云、弘決第八云、必假三心、固神守、則強云云。神護ると申、人の心つよきによるとみめて候。法華經はよきつるぎ(劍)なれどもつかう人によりて物をきり候歟。されば末法に此經をひろめん人人舍利弗と迦葉と觀音と妙音と文殊

と藥王と此等程の人やは候べき。二乗は見思を斷じて六道を出でて候菩薩は四十一品の無明を斷じて十四夜の月の如し。然れども此等の人人にはゆづり給はずして地涌の菩薩に譲り給へり。されば能能心をきた(銀)はせ給にや。李廣將軍と申せしつはものは虎に母を食れて虎に似たる石を射しかば。其矢も又かくのごとく敵はねらふらめども法華經の御信心強盛なれば太難もかねて消候歟。是につけても能能御信心あるべし。委く紙には盡しがたし。恐恐謹言。

弘安元年戊寅後十月二十二日

日

蓮花押

四條左衛門殿御返事

○九郎太郎殿御返事

敬上。考四七

これにつけも。こうねのどの(故上野殿)の事ころ。をもひいでられ候へ。いも(幸)一駄くり(粟)やきごめ(燒米)はじかみ(生巻)給候ぬ。さてはふかき山にはいもつくる人もなしくりもならずはじかみもをひす。ましてやきごめ

みへ候はず。たとわくりなりたりともさる(獲)のこずへ(植)から(枯)す。いねの
 いも(芋)はつくる人なしたとむつくりたりとも人にくみ(憎)てたび候はず。い
 かにしてかかゝるたかき山へはきたり候べき。うれ山をみ候へばたかきより
 しい(次第)にしもわくだれり。うみ(海)をみ候へばあきよりしいにふか
 し。代をみ候へば三十年二十年五年四三二一次第にをとろへたり。人の心も
 かくのごとし。これはよのすへになり候へば山にはまがれるき(曲木)のみと
 せまりの(野)にはひきまきくまのみをひたり。よにはかしかき人はすくなくは
 かなきものはをほし。牛馬のち(交)をしらず兎羊の母をわきまわざるがご
 とし。佛御入滅ありては二千二百二十餘年なり。代すへになりて智人次第に
 かくれて山のくだれるがごとくくさのひききにはたり。念佛を申しかい(戒)を
 たもちなんどする人はをくけれども法華經をたのむ人すくなし。星は多けれ
 ども大海をてらさ草は多けれども大内の柱とはならず。念佛は多けれども
 佛と成る道にはあらず戒は持てども淨土へまひる種とは成らず。但南無妙法
 蓮華經の七字のみこる佛になる種には候へ。此を申せば人はうねみて用ひざ
 りしを故上野殿信じ給しによりて佛に成せ給ぬ。各各は其末にて此御志を

とげ給。歟。龍馬につきぬるだに(蟻)は千里ごとくぶ松にかかれるつた(誰)は千
 尋をよつと申。は是歟。各各主の御心也つちのもちる(土餅)を佛に供養せし人
 は王となりき。法華經は佛にまさらせ給。法なれば供養せさせ給て。いか
 でか今生にも利生にあづかり後生にも佛にならせ給はざるべき。うの上みひ
 ん(身貧)にしてげにん(下人)なし山河わづら(煩)ひあり。たとひ心ざしありとも
 あらはしがたきにいまいるをあらわさせ給に。しりぬ。まぼろげならぬ事な
 り。さだめて法華經の十羅刹まぼらせ給ぬらんとたのもしくころ候へ。事
 つくしがたし。恐恐謹言。

弘安元年十一月一日

日 蓮花押

九郎太郎殿御返事

明治三十五年九月十二日身延山ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ初二枚許ナリ餘者本満寺本等
 ニ依テ校正ス(稲田海素慶記)

○兵衛志殿御返事 微下六 考五三六

錢六貫文の内一貫白二白厚あつた小袖一領 四季にわたりて財を三寶に供養し給ふ。いづれもいづれも功德にならざるはなし。但し時に隨て勝劣淺深わかれて候。うへ(飢)たる人には衣をあたへたるよりも食をあたへて候はいますこし功德まさる。こゝ(凍)へたる人には食をあたへて候よりも衣は又まさる。春夏に小袖をあたへて候よりも秋冬にあたへぬれば又功德一倍なり。これをもつて一切はしりぬべし。ただし此事にをいては四季を論せず日月をたださすせに(錢)こめ(米)かたびら(帷子)きぬ(衣)こゝ(小袖)日日月月にひまなし。例せばびんばしやらわら(頼婆婆羅王)の教主釋尊に日日に五百輛の車ををくり。阿育太王の十億の沙金を雞頭けいづ摩ま寺にせ(施)せしがごとし。大小ことなれども志は彼にもすぐれたり。其上今年は子細候。ふゆ(冬)と申ふゆいづれのふゆかさむからざる。なつ(夏)と申ふなついづれのなつかあつからざる。ただし今年は餘國はいかんが候らめこのはさる(波木井)は法にすぎてかん(寒)と候。ふるきをき(古老)と(と)ひ(問)候へば八十九十一百になる者の物語候はすべていにしへこれほどさむき事候はず。此あんどち(庵)より四方の山の外十町二

十町人かよう事候はねばしり候はず。きんべん一町のほきはゆき(雪)一丈二丈五尺等なり。このうるう(閏)十月卅日ゆきすこしふりて候しがやがてきへ候ぬ。この月の十一日たつ(辰)の時より十四日まで大雪ふりて候しに。兩三日へたててすこし雨ふりてゆきかた(堅)なる事金剛のごとしいまにきゆる事なし。ひるもよるもさむくつめたく候事法にすぎて候。さけ(酒)はこをり(凍)て石のごとしあぶら(油)は金ににたり。なべかま(鍋釜)は小水こづいあればこをりてわれかん(寒)いよいよかたなり候へば。さものうすく食どもしくしてさしいづるものもなし。坊はほん(半)作(作)にてかせゆき(風雪)たまらずしきものはなし。木はさしいづるものもなければ火もたかず。ふるきあか(垢)づきなんどして候こゝこゝででなんどき著著たるものは。其身のいろ紅蓮大紅蓮のごとしこへ(壁)ははは(波々)大ばば(婆々)地獄にことならず。手足かんとできられさけ人死しことかぎりなし。俗のひげ(鬚)をみればやうらく(璽珞)をかけたり僧のはな(鼻)をみればすす(鈴)をつらぬき(貫)かけて候。かゝるふしぎ候はず候は。去年こぞの十二月の卅日よりはらのけ(下痢)の候しが春夏やむことなし。あき(秋)すぎて十月のころ大事になりて候しがすこし 平愈のかまつりて候へど

もやゝもすればをこ(發)り候に。兄弟二人のふたつの小袖わた(綿)四十兩をさ
 て候が。なつ(夏)のかたびら(帷子)のやうにかろく候が。ましてわたうすくただ
 ぬのもの(布物)ばかりのものをもひやらせ給へ。此二のころでなくば今年はこ
 こへし(凍死)に候なん。其上兄弟と申。右近尉の事と申。食もあいついて候。人
 はなき時は四十人ある時は六十人。いかにせき(塞)候へどもこれにある人人
 のあに(足)とて出来し(弟)とてさしいでしきる(來居)候ぬれば。かかはやさに
 いかにも申へず。心にはしす(静)かにあぢち(庵室)むすびて小法師と我身
 計。御經よみまいらせんところ存て候に。かゝるわづらわ(煩)しき事候はず。
 又とし(年)あけ候わばいづくへもにげんと存候が。かゝるわづらわしき事候
 はず。又又申へく候。なによりもねもん(衛門)の大夫志とどのの御事ち
 ち(父)の御中と申。上のをばへと申。面にあらずば申。つくしがたし。恐恐謹
 言。

十一月廿九日

日 蓮花押

兵衛志殿 御返事

明治三十五年五月一 京都立本寺ニ於テ十五丁左七行「此二」ヨリ下即御正本ノ第八九ノ二紙ヲ以

テ拜照シ奉リ餘ハ滿本ニ依テ校ス(稻田海素度記)

○上野殿御返事

微上三三 考三四二

餅九十枚 薯蕷五十木 わざと御使を以て。正月三日未の時に駿河ノ國富士
 郡上野ノ郷より甲州波木井の郷身延山の波ら(洞)へたくりたびて候。夫海邊に
 は木を財とし山中には鹽を財とす。早賊には水を財とし闇中には燈を財と
 し。女人は夫を財とし夫は女人を命とし。王は民を親とし民は食を天とす。
 此兩三箇年は日本國の中に大疫起りて人半分減じて候歟。去年の七月より大
 なるけかち(飢渴)にて里市とをき無縁の者と山中の僧等は命存しがたし。其
 上日蓮は法華經誹謗の國に生れて威音王佛の末法の不輕菩薩の如し。將又歡
 喜増益佛の末の覺徳比丘の如し。王もにくみ民もあだむ衣もらすく食もとば
 し布衣はにしきの如し草葉をば甘露と思ふ。其上去年の十一月より雪つもり
 て山里路たぬぬ。年返れども鳥の聲ならではをとづる人なし。友にあらず
 ばたれか問ふべきと心ぼりて過し候處に。元三の内に十字九十枚満月の如
 し。心中もあきらかに生死のやみもはれぬべし。あはれなりあはれなり。こ

うへのどの(故上野殿)をこういろあるをこと人は申せしに。其御子なればくれない(紅)のこき(濃)よしをつたへ給へるか。あい(藍)よりもあを(青)く水よりもつめ(冷)たき氷(こほり)かなど。ありがたしありがたし。恐恐謹言。

正月三日

日 蓮花押

上野殿御返事

明治三十五年五月三十一日京都本法寺ニ於テ御眞蹟ノ第四紙即「故上野」已下ノ斷編ヲ得テ拜照シ奉ル(稻田海素慶記)

○依テ法華經ニ可延定業ヲ 徴下五 考五二

夫レ病に二あり一者輕病二者重病。重病すら善醫に値つて急に對治すれば命猶存す何況ヤ輕病をや。業に二あり一定業二不定業。定業すら能能懺悔すれば必消滅す何況ヤ不定業をや。法華經第七云、此經、則爲闍浮提、人ノ病之良藥等云云。此經文は法華經ノ文也。一代の聖教は皆如來の金言無量劫より已來不妄語の言也。就中、此法華經は佛の正直捨方便と申して眞實が中の眞實なり。多寶證明を加へ諸佛舌相を添へ給ひいかでかひなしかるべき。其上最第一の秘

事はんべり。此經文は後五百歲二千五百餘年の時女人の病あらんとどかれて候文なり。阿闍世王は御年五十二二月十五日、大惡瘡身に出來せり。大醫者婆が力も及ばず三月七日必死して無間大城に墮つべかりき。五十餘年が間、大樂一時に滅して一生の大苦三七日にあつまれり。定業限りありしかども佛、法華經をかさねて演説して涅槃經となづけて大王にあたい給ひしかば。身の病忽に平癒し心の重罪も一時に露と消へにき。佛滅後一千五百餘年陳臣と申、人ありき命知命にありと申して五十年に定て候しが。天台大師に値つて十五年の命を宣て六十五までをはしき。其上不輕菩薩、更増壽命とどかれて法華經を行じて壽をのぶ。又陳臣は後五百歲にもあたらす冬の稻米、夏、菊花のごとし。當時の女人の法華經を行じて定業を轉ことは秋の稻米、冬、菊花誰かをどろくべき。されば目蓮悲母をいのりて候しかば現身に病をいやす(治)のみならず四箇年の壽命をのべたり。今女人の御身として病を身にうけさせ給ひ心みに法華經の信心を立てて御らむあるべし。しかも善醫あり中務三郎左衛門尉殿は法華經の行者なり。命と申、物は一身第一の珍寶也。一日なりともこれをのぶ(延)る

ならば千萬兩の金にもすぎたり。法華經の一代の聖教に超過していみじきと申すは壽量品のゆへ(故)がかし。閻浮第一の太子なれども短命なれば草よりもかるし。日輪のごとくなる智者なれども天死あれば生犬に劣る。早く心ざしの財がさねていろざいろざ御對治あるべし。此よりも申すべけれども人は申すよて吉事もあり又我志のうすきかとももう者もあり。人の心しりがたき上先先に少少かゝる事候。此人は人の申せばすころ(少)心へずげに思ふ人なり。なかなか申すはあしかりぬべし。但なかうと(中人)もなくひらなさけ(平情)に又心もなくうとたの(打恃)をせ給へ。去年の十月これに來りて候しが御所勞の事をよになげき申せしなり。當事大事のなければをどろかせ給へぬにや。明年正月二月のころをひは必とこるべしと申せしかばこれにもなげき入つて候。富木殿も此尼ごせんをころ杖柱とも持たるになんぞ申して候しなり。随分にわび候しず。きわめてまけたまし(不負魂)の人にて我かたの事をば大事と申す人なり。かへすがへす身の財をだにをしませ給わば此病治がたかるべし。一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。先づ御志をみみへさせ給へし。法華經の第七、卷三三千大千世界の財を供養するよりも手、一指を焼きて佛

法華經に供養せよとかれて候はこれなり。命は三千にもすぎて候而も齡もいまだたけさせ給はず。而し法華經にあわせ給へぬ。一日もいき(活)てをばせば功德つものるべし。あらをし(惜)の命やをしの命や。御姓名並御年を我どかかせ給てわざとつかわせ大日月天に申あぐべし。いよどの(伊豫殿)もあながちになげき候へば日月天に自我偈をあて候はんずるなり。恐恐。

日 蓮花押

尼ごせん御返事

明治三十五年三月三十一日下總正中山ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ全章十丁ナリ (稻田海素庵記)

○孝子御書 考三二

御親父御逝去の由風聞眞にてや候らん。貴邊と大夫志の御事は代入ニ末法ニ生を邊土にうけ法華の大法を御信用候へば。悪鬼定て國主と父母等の御身に入りかわり怨をなさん事疑なかるべきところに。案にたがふ事なく親父より度度の御かんだう(勸懲)をかうほらせ給ひしかども。兄弟どもに淨藏淨眼

の後身歟將^タ又藥王藥上の御計歟のゆへに。ついに事ゆへなく親父の御かんきをゆりさせ給て。前^{まへ}にたてまいらせし御孝養心に任せさせ給ぬるはあに孝子にあらずや。定て天よりも悦^{よろこ}をあたへ法華經十維利も御納受あるべし。其上貴邊の御事は心の内に感じをもう事候。此法門經のごとくひろまり候わば御悦^{よろこ}申^まへし。穴賢穴賢。兄弟の御中不和にわたらせ給ふべからず不和にわたらせ給ふべからず。大夫志^{さくはん}殿の御文にくわしくかきて候。きこしめすべし。恐恐謹言。

弘安二年二月二十一日

日蓮花押

此書ノ御眞蹟ノ斷編即「をも」ヨリ「申へし」ノ一行一字京都頂妙寺ニ藏ス(稻田海素慶記)

○日眼女造立釋迦佛供養事 啓三三一 鈔二〇四〇 語四二五 音下三七 拾六四四 扶一二三五
御守書^{まもり}てまいらせ候。三界^{さんがい}、主^{あるじ}教主釋尊一體三寸、木像造立、檀那日眼女。御供養、御布施前^{まへ}ニ二貫今一貫云云。法華經、壽量品ニ云、或、説^ま己身^{みづか}或、説^ま他身^{たづか}等云云。東方の善徳佛 中央の大日如來 十方の諸佛 過去の七佛 三世の諸佛。上行菩薩等 文殊師利舍利弗等。大梵天王 第六天の魔王 釋提桓因王 日

天月天 明星天 北斗七星 二十八宿 五星七星 八萬四千の無量の諸星。阿脩羅王 天神 地神 山神 海神 宅神 里神 一切世間の國國の主とある人。何れか教主釋尊ならざる。天照太神 八幡大菩薩も其本地は教主釋尊也。例せば釋尊は天の一月諸佛菩薩等は萬水に浮る影なり。釋尊一體を造立する人は十方世界の諸佛を作り奉る人なり。譬ば頭をふればかみ(髮)ゆるぐ心はたらけば身うごく。大風吹^ふば草木しづかならず大地うごけば大海さはがし。教主釋尊をうごかし奉ればゆるがぬ草木やあるべきさわがぬ水やあるべき。今の日眼女は三十七のやく(危)と云云。やくと申^まは譬ばさい(簀)にはか^か座(座)ます(升)にはすみ(角)人にはつぎふし(關節)方には四維^{よすみ}の如し。風は方よりふけばよはく角より吹^ふばつよし。病は肉より起れば治しやすし節^{せう}より起れば治しがたし。家にはかき(垣)なければ盜人いる人にはとがあれば敵便^{たき}をうく。やくと申^まはふしふしの如し家にかきなく人に科^かあるがごとし。よきひやうし(吉兵士)を以てまはらすれば盜人をからめとる。ふしの病をかぬて治すれば命ながし。今教主釋尊を造立し奉れば下女が太子をうめるが如し。國王尙此女を敬ひ給ふ何^な泥や大臣已下をや。大梵天王釋提桓因王日月等此女人を守り給ふ泥や大小の

神祇をや。昔優填大王釋迦佛を造立し奉りしかば大梵天王日月等木像を禮しに參り給ひしかば。木像説云我を供養せんよりは優填大王を供養すべし等云云。影壁王の畫像の釋尊を書き奉りしも又又如是。法華經云若人爲佛故建立諸形像如是諸人等皆已成佛道云云。文の心は一切の女人釋迦佛を造り奉れば。現在には日日月月の大小の難を拂ひ後生には必佛になるべしと申す文也。抑女人は一代五千七千餘卷の經經に佛にならずとさらはれまします。但法華經ばかりに女人佛になると説れて候。天台智者大師釋云不記女人等云釋の心は一切經には女人佛にならずと云云。次下云今經皆記と云云今の法華經にこそ龍女佛になれりと云云。天台智者大師と申せし人は佛滅度の後一千五百年に漢土と申す國に出させ給て。一切經を十五返まで御覽ありばして候しが法華經より外の經には女人佛にならずと云云。妙樂大師と申せし人の釋に云一代所絶等云云。釋の心は一切經にたれたる法門也。法華經と申すは星の中の月がかし人の中の王がかし山の中の須彌山水の中の大海の如し。是程いみじき御經に女人佛になると説れぬれば。一切經に嫌はれたるになにかくるしかるべき。譬は盗人夜打強盜乞食渴

體にさらはれたらんと國の大王に讃られたらんと何れかられしかるべき。日本國と申すは女人の國と申す國也。天照太神と申せし女神のつぎいたし給へる島也。此日本には男は十九億九萬四千八百二十八人女は二十九億九萬四千八百三十人也。此男女は皆念佛者にて候ず皆念佛なるが故に阿彌陀佛を本尊とす。現世の祈りも又如是。設釋迦佛をつくりかけども阿彌陀佛の淨土へゆかんと思へて本意の様には思へ候はぬ。中中つくりかかぬにはをとり候也。今日眼女は今生の祈りのやうなれども教主釋尊をつくりまいらせ給へ候へば後生も疑なし。二十九億九萬四千八百三十人の女人の中の第一也とをぼしめすべし。委は又又申すべく候。恐恐謹言。

弘安二年己卯二月二日

日蓮花押

日眼女御返事

○松野殿後家尼御前御返事 啓三四二〇八 鈔二四三七 語五四 音下四一 拾七四二 扶一三五九
法華經第五ノ卷安樂行品云、文殊師利此法華經、於無量ノ國、中乃至名字不可得聞云云。此文の心は我等衆生の三界六道に輪回せし事。或は天に生れ或は人に生れ或は地獄に生れ或は餓鬼に生れ畜生に生れ。無量の國に生をうけて無邊の苦しみをうけてたのしみにあひしかども一度も法華經の國には生せず。たまたま生れたりといへども南無妙法蓮華經と唱へず。となふる事はゆめ(夢)にもなし人の申をも聞かず。佛のたとへを説せ給に。一眼の龜の浮木の穴に値^あがたきにとへ給なり。心は大海の中に八萬由旬の底に龜と申大魚あり。手足もなくひれ(鱗)もなし腹のあつき事はくろがねのやけるがごとし。せなか(背)のこう(甲)のさむき事は雪山にいたり。此魚の晝夜朝暮のねがひ時時刻刻の口ずさみには腹をひやしこう(甲)をあたくめんと思ふ。赤梅檀と申木をば聖木と名く人の中の聖人也。餘の一切の木をば凡木と申す愚人の如し。此梅檀の木は此魚の腹をひやす木なり。あはれ此木にのぼりて腹をば穴に入れてひやしこうをば天の日にあててあためばやと申也。自然のことはりとしし千年に一度出づる龜也しかれども此木に値事かたし。大海は廣し

龜はちいさし浮木はまれなり。たとひよ(餘)のうきき(浮木)にはあへども梅檀にはあはず。あへども龜の腹をぬりはめたる様にかい分に相應したる浮木の穴にあひがたし。我身をち入りなばこうをもあためがたし誰か又とりあぐべき。又穴せばくして腹を穴に入れぬずんば波にあらひをとされて大海にしづみなむ。たとひ不思議として梅檀の浮木の穴にたまたま行^きあへども。我一眼のひがめる故に浮木西にながれば東と見る故にいろいろのらんと思へたよ(泳)げば彌彌とぞがる。東に流るを西と見る南北も又如^し此云云。浮木にはとをさかれども近づく事はなし。如^し是、無量無邊劫にも一眼の龜の浮木の穴にあひがたき事を佛説^せ給へり。此喩をととりて法華經にあひがたきに譬ふ。設ひあへどもとなへがたき題目の妙法の穴にあひがたき事を心うべき也。大海をば生死の苦海也龜をば我等衆生にたとへたり。手足のなきをば善根の我等が身にうなはらざるにたとへ。腹のあつきをば我等が瞋恚の八熱地獄にたとへ背のこうのさむきをば貪欲の八寒地獄にたとへ。千年大海の底にあるをば我等が三惡道に墮^ちて浮びがたきにとへ。千年に一度浮^つをば三惡道より無量劫に一度人間に生^て釋迦佛の出世にあひがたきにとへ。餘の

松木(檜)の木の浮木にはあひやすく梅檀にはあひがたし。一切經には値とや
すく法華經にはあひがたきに譬へたり。たとひ梅檀には値とも相應したる穴
にあひがたきに喩也。設ひ法華經には値とも肝心たる南無妙法蓮華經の五
字をとなへがたきにあひたてまつる事のかたきにたとう。東を西と見北を南
と見る事をば我等衆生かしがほに智慧有る由をして勝を劣と思ひ劣を勝と
思ふ。得益なき法をば得益あると見る機にかなはざる法をば機にかなう法と
云。眞言は勝れ法華經は劣り眞言は機にかなひ法華經は機に叶はずと見る
是也。されば思とよらせ給へ。佛月氏國に出とさせ給とて一代聖教を説せ給とし
に四十三年と申せしに始とて法華經を説せ給ふ。八箇年が程一切の御弟子皆
如意寶珠のごとくなる法華經を持と候とき。然とども日本國と天竺とは二十萬里
の山海をへだてて候しかば法華經の名字をだに聞とことなかりき。釋尊御入滅
ならせ給とて一千二百餘年と申せしに漢土へ渡し給ふ。いまだ日本國へは渡
らず。佛滅後一千五百餘年と申とに日本國の第三十代欽明天皇と申せし御門
の御時百濟國より始とて佛法渡る。又上宮太子と申せし人唐土より始とて佛法
渡させ給とて其より以來于と今七百餘年の間一切經並に法華經はひろまらせ

給とて。上一人より下萬人に至とまで心あらむ人は法華經を一部或は一卷或は
一品持とて或は父母の孝養とす。されば我等も法華經を持とと思と。しかれど
も未だ口に南無妙法蓮華經とは唱へず信とたるに似て信せざるが如し。譬ば
一眼の龜のあひがたき梅檀の聖木にはあいたれどもいまだ龜の腹を穴に入
ざるが如し。入とざればよしなし須臾に大海にしづみなん。我朝七百餘年の
間此法華經弘とらせ給とて或は讀と人或は説と人或は供養せる人或は持と人稻麻
竹葦よりも多し。然とどもいまだ阿彌陀の名號を唱とるが如く南無妙法蓮華經
とすとむる人もなく唱とる人もなし。一切の經一切の佛の名號を唱とるは凡木
にあうがごとし。未だ梅檀ならざれば腹をひやさず日天ならざれば甲をもあ
たとめず。但目をこやし心を悦ばしめて實なし華さいて菓なく言のみ有とて
しわざなし。但日蓮一人ばかり日本國に始とて是を唱へまいらす事。去建
長五年の夏のころより于と今二十餘年の間晝夜朝暮に南無妙法蓮華經と是を
唱る事は一人也。念佛申と人は千萬也。予は無縁の者也念佛の方人かたうとは有縁也高
貴なり。然とども師子の聲には一切の獸聲を失ふ虎の影には犬恐る。日天東
に出とぬれば萬星の光は跡形もなし。法華經のなき所にころ彌陀念佛はいみ

じかりしかども南無妙法華蓮經の聲出來しては。師子と犬と日輪と星との光くらべのごとし。譬は鷹と雉とのひとしからざるがごとし。故に四衆とりどりにうねみ上下同くにくむ讒人國に充滿して奸人士に多し故に劣を取りて勝をにくむ。譬は犬は勝たり師子をば劣り星をば勝り日輪をば劣りとりしが如し。然問邪見の惡名世上に流布しやゝもすれば讒訴し。或は罵詈せられ或は刀杖の難をかふる。或は度度流罪にあたる。五卷の經文にすこしもたがはず。さればなむだ(涙)左右の眼にうかび悦び一身にあまれり。こゝに衣は身をかくしがたく食は命をささへがたし。例せば蘇武が胡國にありしに雪を食として命をたもつ伯夷は首陽山にすみし蕨ををりて身をたすく。父母にあらざれば誰か問へば三寶の御助にあらずんばいかでか一日片時も持つべき。未だ見參にも入らず候人のかやうに度度御をとづれのはんべるはいかなる事にやあやしき候へ。法華經の第四卷には釋迦佛凡夫の身にいりかはらせ給て法華經の行者をば供養すべきよしを説れて候。釋迦佛御身に入らせ給候歟又過去の善根のよしをしか。龍女と申女人は法華經にて佛に成りて候へば。末代に此經を持てまいらせん女人をまほらせ給べきよし誓はせ給し。其御ゆかりにて候か貴し貴し。

弘安二年己卯三月二十六日

日蓮花押

松野殿後家尼御前御返事

○上野殿御返事

微上二六 考三

抑日蓮種種の大難の中には龍ノ口の頸の座と東條の難にはすぎず。其故は諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり。或はのりせめ或は處をたわれ無實を云つけられ或は面をうたれしなどは物のかすならず。されば色心の二法よりをこりてうしられたる者は日本國の中には日蓮一人也。ただしありとも法華經の故にはあらし。さてもさてもわすれざる事はせうばう(少輔房)が法華經の第五卷を取て日蓮がつら(面)をうちし事は三毒よりをこる處のちやうちやく(打擲)なり。天竺に嫉妬の女人あり男をにくむ故に家内の物をこどとく打やぶり。其上にあまりの腹立にやすがたけしき(氣色)かわり眼は日月の光のごとくかがやきくちは炎をはくがごとし。すがたは青鬼赤鬼のごとくにて年來男のよみ奉る法華經の第五卷をとり。兩の足にてさむさむに

上野殿御返事 (遺二六ノ二八)

千八百三十九

(外五ノ二)

ふみける。其後命いのちつきて地獄にをつ。兩の足ばかり地獄にいらす獄卒鐵杖をもつてうてどもいらす。是は法華經をふみし逆縁の功德による。今日蓮をにくむ故にせうばうが第五ノ巻を取て予がをもてをうつ是も逆縁となるべきか。彼は天竺此は日本かれは女人これはをどこかれは兩のあしこれは兩の手。彼は嫉妬の故此は法華經の御故也。されども法華經の第五ノ巻はをなじきなり。彼女人のあし(足)地獄に入らざらん此兩の手無間に入るべきや。ただし彼は男をにくみて法華經をばにくます此は法華經と日蓮とをにくむなれば一身無間に入るべし。經ニ云、其人命終入阿鼻獄と云云。手ばかり無間に入るまじとは見へず不便なり不便なり。ついに日蓮にあひて佛果をうべき歎不輕菩薩の上慢の四衆のごとし。夫第五ノ巻は一經第一の肝心なり龍女が即身成佛あきらかなり。提婆はころの成佛をあらはし龍女は身の成佛をあらはす。一代に分絶たる法門也。さてころ傳教大師は法華經の一切經に超過して勝れたる事をすあつめ給たる中に。即身成佛化導勝とは此事也。此法門は天台宗の最要にして即身成佛義と申して文句の義科也。眞言天台の兩宗の相論なり。龍女が成佛も法華經の功力也。文殊師利菩薩は唯常宣說妙法華經

どころかたらせ給へ。唯常の二字は八字の中の肝要也。菩提心論の唯眞言法中の唯の字と今の唯の字といづれを本とすべきや。彼の唯の字はをうらくはあやまり也。無量義經ニ云、四十餘年未顯眞實。法華經ニ云、世尊、法久後かならず要當ニ眞實ヲ。多寶佛は皆是眞實とて法華經にかざりて即身成佛ありとさだめ給へり。爾前經にいかやうに成佛ありともとけ權宗の人人無量にいひくるふ(言狂)ともただはうろく(焙烙)千につち(髓)一なるべし。法華折伏破權門理とはこれなり。尤もいみじく秘奥なる法門也。又天台の學者慈覺よりこのかた立文止の三大部の文をとかくれうけん(料簡)し義理をかまうとも。去年のこよみ(曆)昨日の食のごとしけう(今日)の用にならず。末法の始の五百年に法華經の題目をはなれて成佛ありといふ人は。佛説なりとも用ゆべからず何に況や人師の義をや。爰に日蓮思ふやう提婆品を案するに提婆は釋迦如來の昔の師なり。昔の師は今の弟子なり今の弟子はむかしの師なり。古今能所不二にして法華の深意をあらはす。されば惡逆の達多には慈悲の釋迦如來師となり愚癡の龍女には智慧の文殊師となり。文殊釋迦如來にも日蓮をとり奉るべからざる歟。日本國の男は提婆がごとく女は龍女にあひたり。

逆順ともに成佛を期すべきなり是提婆品の意なり。次に勸持品に八十萬億那由佉の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮一人よめり。誰か出でて日本國唐土天竺三國にして佛滅後ほよみたる人やある。又我よみたりとなるべき人なし又あるべしとも覺へず。及加刀杖の刀杖二字の中にもし杖の字にあら人はあるべし刀の字にあらざる人をきかず。不輕菩薩は杖木瓦石と見れば杖の字にあらぬ刀の難はきかず。天台妙樂傳教等は刀杖不加と見れば是又かけたり。日蓮は刀杖の二字ともにあらぬ。剩へ刀の難は前に申がごとく東條の松原と龍ノ口となり。二度もあう人なきなり日蓮は二度あらぬ。杖の難にはすでにせうばう(少輔房)につらをうたれしかども第五卷をもてうつ。う杖も第五卷うたるべしと云う經文も五卷不思議なる未來記の經文也。さればせうばうに日蓮數十人の中にしてうたれし時の心中には。法華經の故とはをもへどもいまだ凡夫なればうたて(無情)かりける間。つね杖をもうばひちから(力)あるならばふみそり(踏折)すつべきことかかし。然れどもつねは法華經の五卷にてまします。いまでもひいでたる事あり。子を思ふ故にやをや(親)つぎ(親)の本の弓をもて學文せざりし子にをしへ(教)たり。然る間此子うた

てかりしは父にく(憎)かりしはつぎの木の弓。されども終には修學増進して自身得脱をきわめ又人を利益する身となり。立(子)還て見ればつぎの木をもて我をうち(打)し故也。此子うとば(卒塔婆)に此木をつくり父の供養のためたててむけりと見へたり。日蓮も又かくの如くあるべき歎。日蓮佛果をむに争かせうばうが恩をすつべきや。何況(カニ)法華經の御恩の杖をや。かくの如く思ひつづけ候へば感涙をさへがたし。又涌出品は日蓮がためにはすこしよしみある品也。其故は上行菩薩等の末法に出現して南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと見へたり。しかるに先日蓮一人出來す六萬恆沙の菩薩よりさだめて忠賞をかほるべしと思へばたのもしき事也。とにかくに法華經に身をまかせ信せさせ給へ。殿一人にかざるべからず信心をすゝめ給じて過去の父母等をすくわ(救)せ給へ。日蓮生れし時よりいまに一日片時もこゝろやすき事はなし此法華經の題目を弘めんと思はかりなり。相かまへて相かまへて自作生死はしらねども。御臨終のさざみ生死の中間に日蓮かならずむかいにまいり候べし。三世の諸佛の成道はねうし(子丑)のをわりとらのさざみ(寅刻)の成道也。佛法の住處 鬼門の方に三國ともにたつなり。此等は相承の法門なるべし。委

は又又申へく候。恐恐謹言。

かつへて食をねがひ渴して水をしたうがごとく。戀て人を見たきがごとく病にくすりをたのむがごとく。みめかたちよき人べにしるいもの(紅粉)をつくるがごとく法華經には信心をいたさせ給へ。さなくしては後悔あるべし云々。

弘安二年己卯卯月二十日

蓮花押

上野殿御返事

○新池殿御消息 啓三五八 鈔二五二四 音下四三 語五二七 拾八二 扶一五二
八木三石送り給候。今一乗妙法蓮華經の御寶前に備へ奉りて南無妙法蓮華經と只一遍唱へまいらせ候畢。いとをしみ(最婆)の御子を靈山淨土へ決定無有疑と送りまいらせんがため也。抑因果のことはりは華と果との如し。千里の野の枯たる草に螢火の如くなる火を一つ付ぬれば。須臾に一草二草十百千萬草につきわたりてもゆれば十町二十町の草木一時にやけつきぬ。龍は一滯の水を手に入れて天に昇ぬれば三千世界に雨をふらし候。小善なれども法華經に

供養しまいらせ給へぬれば功德此の如し。佛滅後一百年と申せしに月氏國に阿育大王と申せし王ましましき一閻浮提八萬四千の國を四分が一御知行ありき。龍王をしたがへ鬼神を召仕はせ給。六萬の羅漢を師として八萬四千の石塔を立し十萬億の金を佛に供養し奉らんと誓はせ給。かゝる大王にてをばせし其因位の功德をたづぬればただ土の餅一釋迦佛に供養し奉りし故ぞかし。釋迦佛の伯父に斛飯王と申す王をはします。彼王に太子あり阿那律となづく此太子生れ給しに御器一持出たり。彼御器に飯あり食すれば又出さき又出さ終に飯つくる事なし。故にかの太子のをさな名をば如意となづけたり。法華經にて佛に成り給ふ普明如來是也。此太子の因位を尋ればうへ(飢)たる世にひね(糶)の飯を辟支佛と申す僧に供養せし故ぞかし。辟支佛を供養する功德すら此の如し。況や法華經の行者を供養せん功德は無量無邊の佛を供養し進らする功德にも勝れて候也。抑日蓮は日本國の者也。此國は南閻浮提七千由旬の内に八萬四千の國あり十六の大國五百の中國十千の小國無量の粟散國あり。其中に月氏國と申す國は大國也彼國に五天竺あり。其より東海の中に小島あり日本國是也中天竺よりは十萬餘里の東也。佛教は佛滅度後正

法一千年が間は天竺にとどまりて餘國にわたらず。正法一千年の末像法に入つて一十五年と申せしに漢土へ渡る。漢土に三百年過ぎて百濟國に渡る百濟國に一百年已上二千四百十五年と申せしに。人王三十代欽明天皇の御代に日本國に始つて釋迦佛の金銅の像と一切經は渡つて候き。今七百餘年に及ぶ候。其間一切經は五千餘卷或は七千餘卷也。宗は八宗九宗十宗也。國は六十六箇國一の島神は三千餘社佛は一萬餘寺也。男女よりも僧尼は半分に及べり。佛法の繁昌は漢土にも勝れ天竺にもまされり。但し佛法に入つて諍論あり。淨土宗の人人は阿彌陀佛を本尊とし眞言の人人は大日如來を本尊とす禪宗の人人は經と佛とをば一達磨を本尊とす。餘宗の人人は念佛者眞言等に隨へられ何れともなげれども。つよきに隨ひ多分に押されて阿彌陀佛を本尊とせり。現在の主師親たる釋迦佛を閉きて佗人たる阿彌陀佛の十萬億の佗國へに行つべきよしをねがはせ給へ候。阿彌陀佛は親ならず主ならず師ならず。されば一經の内虚言の四十八願を立給たりしを。愚なる人人實と思つて物狂はしく金拍子をたゞとどめりはねて念佛を申し親の國をばいとひ出せぬ。來迎せんと約束せし阿彌陀佛の約束の人は來らず。中有のたびの空に迷て謗法の

業にひかれて三惡道と申獄屋へたもむけば。獄卒阿防羅利悦をなしどらへ(提)からめ(擲)てさひなむ事限りなし。これをあらあら經文に任せてかたり申せば。日本國の男女四十九億九萬四千八百二十八人まします。某一人を不思議なる者に思つて餘の四十九億九萬四千八百二十七人は皆敵と成りて。主師親の釋尊をもちひぬだに不思議なるに。かへりて或はのり或はうち或は處を追ひ或は讒言して流罪し死罪に行はるれば。貧なる者は富るをへつらひ賤き者は貴きを仰ぎ無勢は多勢にしたがふ事なれば。適法華經を信する様なる人も世間をばばかり人を恐れて多分は地獄へ墮る事不便也。但し日蓮が愚眼にてやあるらん又宿習にてや候らん。法華經最第一已今當說難信難解唯我一人能爲救護と説れて候文は如來の金言也取て私の言にはあらず。當世の人は人師の言を如來の金言と打思ひ或は法華經に肩を並て齊しと思ひ或は勝れたり或は劣りなれども機にかなへりと思へり。しかるに如來の聖教に隨佗意隨自意と申事あり。譬は子の心に親の隨つをば隨佗意と申親の心に子の隨つをば隨自意と申。諸經は隨佗意也佛一切衆生の心に隨ひ給ふ故に。法華經は隨自意也一切衆生を佛心に隨へたり。諸經は佛説なれども是を信すれば衆

生の心にて永く佛にならず。法華經は佛説也佛智也一字一點も是を深く信ずれば我身即佛となる。譬は白紙を墨に染れば黒くなり黒漆に白物を入れば白くなるが如し。毒藥變じて藥となり衆生變じて佛となる故に妙法と申す。然に今の人人は高も賤も現在の父たる釋迦佛をばかるしめて佗人の縁なき阿彌陀大日等を重じ奉るは是不孝の失にあらずや是謗法の人にあらずや。と申すは日本國の人人一同に怨ませ給ふ也。其もことはり也まが(曲)れる木はすなを(直)なる繩をにくみいつはれる者はただしき政りごとをば心にあはず思ふ也。我朝人王九十一代之間に謀叛の人人は三十六人也。所謂犬山の王子 大石の小丸乃至將門すみこも(純友)悪左府等也。此等の人人は吉野とつ(十津)河の山林にこもり筑紫 鎮西の海中に隠るれば。島島のびす 浦浦のものゝふどもうたんどす。然れどもうれは貴き聖人山山寺神社の法師尼女人はいたら敵と思ふ事なし。日蓮をば上下の男女尼法師貴き聖人なんと云はるる人人は殊に敵となり候。其故はいづれも後世をば願へども男女よりは僧尼より願ふ由はみぬ候へ。彼等は往生はさてをきぬ今生の世をわたるなかたち(中人)となる故也。智者聖人又我好我勝たりと申す。本師の跡と申す所領と申す名聞利養

を重くしてまめやかに道心は輕し。佛法はひがさまに心得て愚癡の人も謗法の人也と言をも惜ます人も憚らず。當知是人佛法中怨の金言を恐て我是世尊使處衆無所畏と云ふ文に任せていたくせむる間。未得謂爲得我慢心充滿の人人争かにくみ嫉まざらんや。されば日蓮程天神七代地神五代人王九十餘代にいまだ此程法華經の故に三類の敵人にあだまれたる者なき也。かゝる上下萬人一同のにくまれ者にて候に此まで御渡り候し事。ねぼろげの縁にはあらず宿世の父母歎昔の兄弟にてははしける故に思ひ付せ給ふ歎。又過去に法華經の縁深くして今度佛にならせ給ふべきたね(種)の熟せるかの故に。在俗の身として世間ひまなき人の公事のひまに思ひ出させ給ふけるやらん。其上遠江國より甲州波木井の郷身延山へは道三百餘里に及べり。宿宿のいふせさ嶺に昇れば日月をいただき谷へ下れば穴へ入るか覺ゆ。河の水は矢を射るが如く早し大石ながれて人馬ひかひ難し船あやうくして紙を水にひたせるが如し。男は山かつ女は山母の如し。道は繩の如くほろく木は艸の如くしげし。かゝる所へ尋入らせ給て候事何なる宿習なるらん。釋迦佛は御手を引キ帝釋は馬となり梵王は身に隨ひ日月は眼となりかはらせ給て入らせ給けるにや。ありがた

じありがたし。事多しと申せども此程風たこりて身苦しく候間留候畢。

弘安二年己卯五月二日

日 蓮花押

新池殿御返事

○窪尼御前御返事 徴上九 考二〇

御供養の物數のまゝに慥に給候。當時は五月の比たひにて民のいとまなし其上宮の造營にて候也。かゝる暇なき時山中の有様思ひやらせ給て送りたびて候事御志殊にふかし。阿育大王と申せし王はこの天の日のめぐらせ給一閻浮提を大體しるしめされ候し王也。此王は昔徳勝とて五になる童にて候しが。釋迦佛にすなのもちぬ(沙餅)をまいらせたりしゆへにかゝる大王と生させ給。此童はさしも心ざしなしたわふれなるやうにてこゝ候しかども。佛のめでたくをはすればわづかの事もものとなりてかゝるめでたき事候。まして法華經は佛にまさらせ給事星と月とともしびと日とのごとし。又御心ざしもすぐれて候。されば故入道殿も佛にならせ給べし。又一人をはするひめ御前もいのちもながくさひわひもありてさる人のむすめなりときこ

ゑさせ給べし。當時もたさなけれども母をかけてすぞす女人なれば父の後世をもたすべし。から(唐)國にせいし(西施)と申せし女人はわかかなを山にのみ(摘)てをひたるはわ(老母)をやしなひき。天あはれみて越王と申大王のかり(辨)せさせ給しがみつけてきさき(斤)となりき。これも又かくのごとしをやをやしなふ女人なれば天もまほらせ給らん佛もあはれみ候らん。一切の善根の中に孝養父母は第一にて候なれば。まして法華經にてをはず。金のうつわ(器)ものなきよき水を入れたるがごとくすこしももる(漏)べからず候。めでたしめでたし。恐恐謹言。

五月四日

日 蓮花押

くばの尼御前御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海峯記)

○寶經法重事

啓三二九ニ

鈔二〇三四

語四二〇

音下三六

扶一二

拾六

筭百本芋一駄送り給畢。妙法蓮華經第七云、若復有_レ人以_ニ七寶_ヲ滿_ニ三千大千世界_ニ供養於佛及大菩薩辟支佛阿羅漢。是人所得_ノ功德_モ不_レ如_レ受_ニ持_{スル}此法華經_ノ乃至一四句偈_ヲ其福_ノ最_モ多_キ云云。文句_ノ十七寶奉_ル四聖_ニ不_レ如_レ持_{スル}一偈_ヲ法_ハ是_レ聖_ノ師_{ナリ}能_レ生_ク能_レ養_フ能_レ成_ス能_レ榮_ス莫_レ過_ニ於_レ法_ニ故_ニ人_ハ輕_ク法_ハ重_キ也_{云云}。記_ノ十_ニ云_ク如_レ下_シ父母必_ク以_テ四_ノ護_ヲ護_ト于_テ今發心_ハ由_テ法_ニ爲_シ生_ト始_ニ終_ニ隨_テ逐_ス爲_シ養_ト令_レ滿_ニ極_ニ果_ヲ爲_シ成_ト能_レ應_ニ法_{界_ニ爲_シ榮_ト雖_ニ四_ツ不_レ同_カ以_テ法_ヲ爲_シ本_ト云云。經_並天台妙樂の心は一切衆生を供養せんと阿羅漢ヲ供養せんと。乃至一切の佛を盡_クして七寶の財を三千大千世界にもりみてて供養せんよりは。法華經を一偈或は受持し或は護持せんはすぐれたりと云云。經_ニ云_ク不_レ如_レ下_カ受_ニ持_{スル}此法華經_ノ乃至一四句偈_ヲ其福_ノ最_モ多_キ云云。天台云_ク人_ハ輕_ク法_ハ重_キ也_{妙樂云_ク雖_ニ四_ツ不_レ同_カ以_テ法_ヲ爲_シ本_ト云云。九界の一切衆を佛に相對して此をはかるに一切衆生のふく(福)は一毛のかろく佛の御ふくは大山のをもきがごとし。一切の佛の御ふくは梵天三昧の衣のかろきがごとし。法華經一字の御ふくの重き事は大地のをもきがごとし。人_輕と申_スは佛を人と申_ス法_重と申_スは法華經なり。夫_レ法華已前の諸經並に諸論は佛の功德をほめて候佛のごとし。此法華經は經の功德をほめたり佛の父母のごとし。華嚴經大日經等の法華經に劣_ル事は一毛と大山と三昧と大地のごとし。乃至法華經の最下の行者と華嚴眞言の最上の僧とくらふれば帝釋と彌猴と師子と兔との勝劣なり。而_レをたみ(長)が王ごののしればかならず命となる。諸經の行者が法華經の行者に勝_レたりと申せば必國もほるび地獄へ入り候なり。但かたきのなき時はいつわりをろかにて候。譬へば將門_{マサカド}眞任_{マダニ}眞盛_{マサカド}頼義_{ヨリヨシ}がなかりし時は國をしり妻子安穩なり云云。敵なき時はつゆ(露)も空へのぼり雨も地に下_リ逆風の時は雨も空へあがり日出の時はずゆも地にをちぬ。されば華嚴等の六宗は傳教なかりし時はつゆのごとし眞言も又かくのごとし。強敵出現して法華經をもつてつよくせむるならば。叡山の座主東寺の小室等も日輪に露のあへるがごとしとをばしめすべし。法華經は佛滅後二千二百餘年にいまだ經のごとく説_キきわめてひろむる人なし。天台傳教もしろしめさざるにはあらず時も來らず機もなかりしかばかききわめつくさずしてをわらせ給へり。日蓮_カ弟子となりむ人人はやすくしりぬべし。一閻浮提の内_ニ法華經の壽量品の釋迦佛の形像をかきつくれる}}

堂塔いまだ候はず。いかでかあらわれさせ給はるべき。しげければとどめ候。たけのゑは百二十本法華經は二千餘年にあらわれ候。布施はかるけれども志重き故なり。當時はくわんのう(勤農)と申大宮づくりと申かたがた民のいとまなし。御心ざしふかければ法もあらわれ候にや。恐恐謹言。

五月十一日

蓮花押

西山殿御返事

明治三十六年正月十四日富士大石寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル(稲田海素度記)

○四菩薩造立鈔 考五六八

白小袖一薄墨染衣一(同色)袈裟一帖 慈目一貫文給候。不始_レ于今_一御志言_ニを以て宣_ハがたし。何日を期してか遂_ニ對面_ニ心中の朦朧を申_レ披_哉。

一 御狀云々本門久成の教主釋尊_ヲ奉_リ造_リの脇士には久成地涌の四菩薩を造立し奉るべしと兼て聽聞仕候き。然れば如_ニ聽聞_ノ者何の時乎云云。夫佛世を去せ給て二千餘年に成_ルぬ其間月氏漢主日本國一閻浮提の内に佛法の流布する事僧は稻麻のごとく法は竹草の如し。然るにいまだ本門の教主釋尊並に

本化の菩薩を造り奉りたる寺は一處も無し。三朝の間に未_レ聞_カ。日本國に數萬の寺寺を建立せし人人も本門の教主脇士を造るべき事を不知_ラ。上宮太子佛法最初の寺と號して四天王寺を造立せしかども。阿彌陀佛を本尊として脇士には觀音等四天王を造り副たり。傳教大師延曆寺を立_テ給に中堂には東方の慈王の相貌を造_リて本尊として久成の教主脇士をば建立し給はず。南京七大寺の中にも此事を未_レ聞_カ田舎の寺寺以て爾也。かたがた不審なりし間法華經の文を拜見し奉りしかば其旨顯然也。末法鬪諍堅固の時にいたらずんば造るべからざる旨分明也。正像に出世せし論師人師の造らざりしは佛の禁を重_シする故也。若正法像法の中に久成の教主釋尊並脇士を造るならば夜中に日輪出_テ日中に月輪の出_テたるが如くなるべし。末法に入_ッて始_メの五百年に上行菩薩の出_テさせ給て造り給_ハべき故也。正法像法の四依の論師人師は言_ハにも出_サさせ給はず。龍樹天親ころ知_ラせ給たりしかども口より外へ出_サさせ給はず。天台智者大師も知_ラせ給たりしかども。迹化の菩薩の一分なれば一端は仰_ヒ出_サさせ給たりしかども其實義をば宣_ハ出_サさせ給はず。但ねさめの枕に時鳥の一音を聞_キしが如くにして夢のさめて止_ムぬるやうに弘_シ給_ハ候ぬ。夫より已外

の人師はまして一言をも仰出し給事なし。此等の論師人師は靈山にして。迹化の衆は末法に入らざらん正像二千年の論師人師。本門久成の教主釋尊並久成の脇士地涌ノ上行等の四菩薩を影ほども申出すべからずと御禁ありし故がかし。今末法に入れば尤佛ノ金言の如きんば造るべき時なれば本佛本脇士造り奉るべき時也。當時は其時に相當れば地涌の菩薩やがて出させ給はんすらん。先其程四菩薩を建立し奉るべし尤今は然るべき時也と云云。されば天台大師は後五百歳遠く法妙道としたひ。傳教大師は正像稍過已末法太有近法華一乘ノ機今正是其時と戀させ給フ。日蓮は世間には日本第一の貧者なれども以佛法論すれば一閻浮提第一の富者也。是時の然らしむる故也と思へば喜び身にあまり感涙難押へ教主釋尊の御恩報じ奉り難し。恐くは付法藏の人人も日蓮には果報は劣らせ給たり天台智者大師傳教大師等も及給べからず。最四菩薩を建立すべき時也云云。問云可造立四菩薩證文有之耶答云涌出品云有之四導師一名上行二名無邊行三名淨行四名安立行等云云。問云後五百歳に限るといへる經文有之耶答云藥王品云我滅度後後五百歳中廣宣流布於閻浮提無令斷

絶等云云。

一 御狀云、大田方の人人一向に迹門に得道あるべからずと申され候由其聞候是は以テの外の謬也。御得意候へ本迹二門の淺深勝劣與變傍正は時と機とに依るべし。一代聖教を弘むべき時に三あり機もて爾也。佛後正法の始の五百年は一向小乘後の五百年は權大乘。像法一千年は法華經の迹門等也。末法の始には一向に本門也一向に本門の時なればとて迹門を捨べきにあらず。於法華經一部二前十四品を捨べき經文無之。本迹の所判は一代聖教を三重に配當する時爾前迹門は正法像法或は末法は本門の弘らせ給べき時也。今の時は正には本門 傍には迹門也。迹門無得道と云て迹門を捨て一向本門に心を入させ給人人は。いまだ日蓮が本意の法門を習はせ給はざるにころ以テの外の僻見也。私ならざる法門を僻案せん人は偏に天魔波旬の其身に入替て。人をして自身ともに無間大城に墮すべきにて候。つたなしつたなし。此法門は年來貴邊に申含たる様に人人にも披露あるべき者也。總じて日蓮が弟子と云て法華經を修行せん人人は日蓮が如くにし候へ。さだにも候はば釋迦多寶十方の分身十羅刹も御守候べし。其さへ向人人

の御心中は量りがたし。

一 日行房死去の事不便に候。是にて法華經の文讀、進らせて南無妙法蓮華經と唱へ進ませ。願は日行を釋迦多寶十方諸佛靈山へ迎へ取らせ給へと申上候ぬ。身の所勞いまだきらきら快然しからず候間、令省略候。又又可申候。恐恐謹言。

弘安二年五月十七日

日 蓮花押

富木殿御返事

○松野殿女房御返事

微上三八 考四二

麥一箱 いろのいも一籠 うち(瓜)一籠等 旁の物。六月三日に給候しを今まで御返事申候はざりし事恐入候。此身延の澤と申處は甲斐國飯井野御牧波木井ノ三箇郷の内波木井の郷の戌亥の隅にあたりて候。北には身延嶽天をいただき南には鷹取が嶽雲につづき東には天子の嶽日とたけをなほ。西には又峨峨として大山つづきてしらね(白根)の嶽にわたれり。猿のなく音天に響き蟬のさるづり地にみたり。天竺の靈山此處に來れり唐土の天台山親り

こゝに見る。我が身は釋迦佛にあらす天台大師にてはなけれども。まがるまがる晝夜に法華經をよみ朝暮に摩訶止觀を談すれば靈山淨土にも相似たり天台山にも異ならず。但し有待の依身なれば著ざれば風身にしみ食ざれば命持がたし。燈に油をつがず火に薪を加へざるが如し命いがでかつぐべきやらん。命續がたくつぐべき力絶ては。或は一日乃至五日既に法華經讀誦の音も絶ぬべし止觀のまご(窓)の前には草しげりなん。かくの如く候にいかにして思寄せ給ぬらん。兎は經行の者を供養せしかば天帝哀みをなして月の中にかせ給ぬ今天を仰見るに月の中に兎あり。されば女人の御身としてかゝる濁世末代に法華經を供養しましたませば。梵王も天眼を以て御覽じ帝釋は掌を合せてをがませ給ひ地神は御足をいただきて喜び。釋迦佛は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給らん。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。恐恐謹言。

弘安二年己卯六月二十日

日 蓮花押

松野殿女房御返事

○上野殿御返事

啓三五三四

鈔二五二三

音下四二

語五二三

拾七五六

扶十四

鷺目一貫しほ(鹽)一たわら(俵)蹲(いもかしら)鴨一俵はじかみ少少(つかひ)使者をもて送り給ヒ畢シメ。あつきには水を財(たから)とすさむきには火を財とすけかちには米を財とす。い
くさには兵杖を財とす海には船を財とす山には馬をたからとす。武藏下總に
石を財とす此の山中にはいほのいも(芋)海のしほ(鹽)を財とし候予。竹ノ子木ノ
子等候へどもしほなければうのあぢわひ(味)つち(土)のごとし。又金(かね)と申スも
の國王も財とし民も財とす。たとへば米のごとし一切衆生のいのち(命)なり
せに(錢)又かくのごとし。漢土(もんこ)に銅山と申ス山あり彼の山よりいでて候せにな
れば一文もみな三千里の海をわたりて來るものなり。萬人皆たま(玉)とれも
へり。此を法華經にまいらせさせ給フ。釋(しやく)まなん(摩男)と申せし人のたな心に
は石變じて珠たまとなる。金(かね)ぐく(粟)王は沙(いさ)を金となせり。法華經は草木を佛と
なし給フいわうや心あらん人をや。法華經は燒種(やうしゆ)の二乗を佛となし給フいわう
や生種(しやうしゆ)の人をや。法華經は一闍提を佛となし給フいわうや信ずるものをや。
事事つくしがたく候。又又申スべし。恐恐謹言。

八月八日

日 蓮花押

上野殿御返事

明治三十六年一月十七日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス但シ年號ハ弘安二年到來ト細
注ア。(稻田海素記)

高祖遺文録卷之二十七

○曾谷殿御返事 啓三五九四 鈔二五三六 音下四四 語五三三 拾八、扶一五三三

燒米二俵給畢。米は少と思食候へども人の壽命を繼物にて候。命をば三千大千世界にても買はぬ物にて候と佛は說せ給へり。米は命を繼物也譬ば米は油の如く命は燈の如し。法華經は燈の如く行者は油の如し檀那は油の如く行者は燈の如し。一切の百味の中には乳味と申して牛の乳第一なり涅槃經ノ七云猶如諸味ノ中ニ乳最爲第一云云。乳味をせん(煎)すれば酪味となる酪味をせんすれば乃至醍醐味となる醍醐味は五味の中の第一也。法門を以て五味にたとへば儒家の三千外道の十八大經は衆味の如し阿含經は醍醐味なり。阿含經は乳味の如く觀經等の一切の方等部の經は酪味の如し。一切の般若經は生蘇味 華嚴經は熟蘇味 無量義經と法華經と涅槃經とは醍醐の如し。又涅槃經は醍醐のごとし法華經は五味の主の如し。妙樂大師云若論ニ教旨ヲ法華ハ唯以ニ開權顯遠ヲ爲ニ教ノ正主ト獨得ニ妙ノ名ヲ意在於此云云又云故ニ知法華ハ爲醍醐ノ正主等云云。此釋は正しく法華經は五味の中にはあらず此釋の心は五

珠は壽命をやしなふ壽命は五味の主也。天台宗には二の意あり一には華嚴方等般若涅槃法華同醍醐味也。此釋の心は爾前と法華とを相似せるにいたり。世間の學者等此筋のみを知りて法華經は五味の主と申法門に迷惑せるゆへに諸宗にたばらかさるる也。開未開異なれども同く圓なりと云云是は迹門の心なり。諸經は五味法華經は五味の主と申法門は本門の法門也。此法門は天台妙樂粗書せ給候へども分明ならざる問學者の存知すくなし。此釋に若論教旨とかかれて候は法華經の題目を教旨とはかかれて候。開權と申は五字の中の華の一字也顯遠とかかれて候は五字の中の蓮の一字也。獨得妙名とかかれて候は妙の一字也。意在於此とかかれて候は法華經を一代の意と申は題目なりとかかれて候。此を以て知べし法華經の題目は一切經の神一切經の眼目也。大日經等の一切經をば法華經にてこそ開眼供養すべき處に。大日經等を以て一切の木畫の佛を開眼し候へば。日本國の一切の寺塔の佛像等形は佛に似れども心は佛にあらず九界の衆生の心なり。愚癡の者を智者とすること是より始れり。國のついで(費)のみ入って祈とならず還て佛變じて魔となり鬼となり。國主乃至萬民をわづらはす是也。今法華經の行者と檀那との出

來する故に百獸の師子王をいと草木の寒風をたふるが如し。是は且くをく。法華經は何故に諸經に勝して一切衆生の爲に用ふる事なるぞと申すに。譬ば草木は大地を母とし虚空を父とし。甘雨を食とし風を魂とし日月をめのと(乳母)として生長し華さき菓なるが如く。一切衆生は實相を大地とし無相を虚空とし一乗を甘雨とし已今當第一の言を大風とし。定慧力莊嚴を日月として妙覺の功德を生長し大慈大悲の華さかせ安樂佛果の菓なつて一切衆生を養ひ給ふ。一切衆生又食するによりて壽命を持つ。食に多數あり土を食し水を食し火を食し風を食する衆生もあり。求羅と申す蟲は風を食すうぐろもち(鼯鼠)と申す蟲は土を食す。人の皮肉骨髓等を食する鬼神もあり尿糞等を食する鬼神もあり。壽命を食する鬼神もあり聲を食する鬼神もあり。石を食するいを(魚)くろがね(鐵)を食するばく(獲)もあり。地神天神龍神日月帝釋大梵王二乘菩薩佛は佛法をなめて身とし魂とし給ふ。例せば乃往過去に輪陀王と申す大王ましましき一閻浮提の主也賢王也。此王はなに物をか供御とし給ふと申せば白馬の鳴聲をさこしめて身も生長し身心も安穩にしてよをたもち給ふ。れいせば蝦蟇と申す蟲ノ母のなく聲を聞て生長するがごとし。秋のはぎ(萩)の

しか(鹿)の鳴に華のさくがごとし。象牙草のいかづち(雷)の聲にはら(孕)み柘榴の石にあふてさかうるがごとし。されば此王白馬ををほくあつめてかはせ給ふ。又此白馬は白鳥をみてなく馬なればをほくの白鳥をあつめ給しかば我身の安穩なるのみならず百官萬乗もさかへ天下も風雨時にしかがひ佗國もかうへ(頭)をかたぶけてすねん(數年)すこし給ふに。まつり(政)事のさをい(相違)にやはむべりけん又宿業によつて果報や盡きけん。千萬の白鳥一時にうせしかば又無量の白鳥もなく事やみぬ。大王は白馬の聲をさかざりしゆへに華のしぼめるがごとく月のしよく(蝕)するがごとく。御身の色かはり力よはく六根もうも(憎々)としてばれ(盡)たるがごとくありしかば。きさき(后)ももうもうしくならせ給ふ百官萬乗もいかんがせんとなげき。天もくもり地もふるひ大風かんばち(旱魃)しけかち(飢渴)やくびやう(疫病)に人の死する事。肉はつか(塚)骨はかはら(瓦)とみへしかば佗國よりもをうひ來れり。此時大王いかにせんとなげき給ふしほごにせんする所は佛神にいのるにはしくべからず。此國にもとより外道をほく國國をふさげり。又佛法という物ををほくあがめをきて國の大事とす。いづれにてもあれ白鳥をいだして白馬をなかせん法を

あがむべし。まづ外道の法にをほせつけて數日をこなはせければ白鳥一疋もいでこず白馬もなく事なし。此時外道のいのりをとどめて佛教にをほせつけられけり。其時馬鳴菩薩と申す小僧一人ありめしいたされければ。此僧の給はく國中に外道の邪法をとどめて佛法を弘通し給ふべくば馬をなかせん事やすしといふ。敕宣に云々をほせのこどくなるべしと。其時馬鳴菩薩三世十方の佛にさしやう(祈請)し申せしかばたちまちに白鳥出來せり。白馬は白鳥を見て一こへなきけり。大王馬の聲を一こへきこしめして眼を開き給ふ。白鳥二ひき乃至百千いできたりければ百千の白馬一時に悦ばなきけり。大王の御いろなをること日しよくのほんにふく(本復)するがごとし。身の力心のはかり事先には百千萬ばい(倍)こへたり。きさきもよろこび大臣公卿いさみて萬民もたな心をわはせ佗國もかうべをかたふけたりとみへて候。今のよ(世)も又是にたがう(違)べかず。天神七代地神五代已上十二代は成劫のことし先世のかいりき(戒力)と福力とにて今生のはげみなければも國もたさまり人の壽命も長し。人王のよ(代)となりて二十九代があひだは先世のかいりき(戒力)もすこしよはく今生のまつり(政)事もはかなかりしかば。國にやうやく三災

七難をこりはじめたり。なをかんと(漢土)より三皇五帝の世ををさむべきふみ(文書)わたりしかば其をもて神をわがめて國の災難をしづむ。人王第三十代欽明天王の世となりて國には先世のかいふく(戒福)うすく悪心がうじやう(強盛)の物をほく出來て善心をろかに悪心はかしこし。外典のをしへ(教)はあさしつみ(罪)をももきゆへに外典すてられ内典になりしなり。れい(例)せばもりや(守屋)は日本の天神七代地神五代が間の百八十神をわがめたてまつりて。佛教をひろめずしてもとの外典となさんといのりき。聖德太子は教主釋尊を御本尊として法華經一切經をもんしよ(文書)として兩方のせうふ(勝負)ありしについには神はまけ佛はかたせ給て神國はじめて佛國となりぬ。天竺漢土の例のごとし。今此三界皆是我有の經文あらはれさせ給べき序也。欽明より桓武にいたるまで二十よ代二百六十餘年が間佛を大王とし神を臣として世ををさめ給へしに。佛教はすぐれ神はをとりたりしかども未だよ(代)をさまる事なし。いかなる事にやとうたが(疑)はりし程に桓武の御宇に傳教大師と申す聖人出來して。勘へて云々神はまけ佛はかたせ給ぬ。佛は大王神は臣か(下)なれば上下あひついでれいぎ(禮儀)ただしければ國中をさまるべしとをもふ

に。國のしづかならざる事ふしん(不審)なるゆへに一切經をかんがへて候へば道理にて候けるが。佛教にをほきなるとがありけり。一切經の中に法華經と申す大王をはします。ついで華嚴經大品經深密經阿含經等はあつては臣の位あるいはさふらい(侍)のくらしいあるいはたみ(民)の位なりけるを。或は般若經は法華經にはすぐれたり三論宗。或は深密經は法華經にすぐれたり法相宗。或は華嚴經は法華經にすぐれたり華嚴宗。或は律宗は諸宗の母也などと申して。一人として法華經の行者なし。世間に法華經を讀誦するは還つてをこつ(笑)さうしなう也。依之(之)天もいかり守護の善神も力よはし云云。所謂法華經をほむといふども返つて法華の心をころす等云云。南都七大寺十五大寺日本國中の諸寺諸山の諸僧等此ことばをききてをほきにいかり。天竺の洞天漢土の道士我國に出來せり所謂最澄と申す小法師是也。せんする所は行(あはむ)する處にてかしら(頭)をわれかた(肩)をされをとせうてのれ(打響)と申せしかども。桓武天皇と申す賢王たづねあきらめて六宗はひ(僻)が事なりけりとして。初てひへい(比叡)山をこんりうして天台法華宗とさだめをかせ。圓頓の戒を建立し給ふのみならず七大寺十五大寺の六宗の上に法華宗をうへ(副)をかる。せ

んする所六宗を法華經の方便となされしなり。れいせば神の佛にまけて門まほりとなりしがごとし。日本國も又又かくのごとし法華最第一の經文初て此國に顯(れ)給(と)能竊爲一人說法華經の如來の使初て此國に入(ッ)給(ぬ)。桓武平城嵯峨の三代二十餘年が間は日本一州皆法華經の行者なり。しかれば梅檀には伊蘭(い)釋尊には提婆のごとく。傳教大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり。漢土にわたりて大日經眞言宗をならい日本國にわたりてありしかども。傳教大師の御存生の御時はいたう法華經に大日經すぐれたりといふ事はいはざりけるが。傳教大師去(スル)弘仁十三年六月四日にかくれさせ給(と)てのち。ひまをわたりとやをもひけん弘法大師去(スル)弘仁十四年正月十九日に。眞言第一華嚴第二法華第三法華經は戲論の法無明の邊域天台宗等は盜人なりなどと申(ス)書(カ)どもをつくりて。嵯峨の皇帝を申(シ)かすめたてまつりて七宗に眞言宗を申(シ)くはにて。七宗を方便とし眞言宗は眞實なりと申(シ)立(テ)畢(ル)。其後日本一州の人ごとい眞言宗になりし上(上)。其後又傳教大師の御弟子慈覺と申(ス)人漢土にわたりて天台眞言の二宗の奥義をきはめて歸朝す。此人金剛頂經蘇悉地經二部の疏をつくりて前唐院と申(ス)寺を叡山に申(シ)立(テ)畢(ル)。此(レ)には大日經第一法華經第

二其中に弘法のごとくなる過言かすうべからず。せむせむにせうせう申_シ畢_ス。智證大師又此大師のあとをついでをんじやう(園城)寺に弘通せり。たうじ寺とて國のわざはい(福)とみゆる寺是也。叡山の三千人は慈覺智證をはせずは眞言すぐれたりと申_スをばもちいぬ人もありなん。圓仁大師に一切の諸人くち(口)をふさがれ心をたばらかされてことば(言)をいだす人なし。王臣の御きね(歸依)も又傳教弘法にも超過してみへ候へばい(怨)山七寺日本一州一同に法華經は大日經にをとりと云云。法華經の弘通の寺寺ごとに眞言ひろまりて法華經のかしら(頭)となれり。かくのごとくしてすでに四百餘年になり候ぬ。やうやく此邪見がうじやう(増上)して八十一乃至五の五王すでにうせぬ。佛法うせしかば王法すでにつき畢_ス。あまさへ禪宗と申_ス大邪法念佛宗と申_ス小邪法眞言と申_ス大惡法。此惡宗はな(愚)をならべて一國にさかんなり。天照太神はたましい(魂)をうしなつてうぢご(氏子)をまほらす八幡大菩薩は威力よはしくて國を守護せずけつく(結句)は佗國の物とならむとす。日蓮此よしを見るゆへに佛法中怨俱墮地獄等のせめをたうれて粗國主にしめせども。かれらが邪義にたばらかされて信_ト給_フ事なし還_ッて大怨敵となり給_ヘぬ。法華經

をうしなふ人國中に充滿せりと申_スども人しる事なければただぐち(愚痴)のごとがばかりにてある事。今は又法華經の行者出來せり日本國の人人癡_ろの上_{うへ}にいかりををこす邪法をあい(愛)し正法をにくむ。三毒がうじやうなる一國いかに安穩なるべき。壞劫_{わいけつ}の時は大の三災をこるいはゆる火災水災風災也。又滅劫_{めつけつ}の時は小の三災をこるゆはゆる飢渴_{けいかつ} 疫病 合戦なり。飢渴は大貪よりをこりやくびやうはぐちよりをこり合戦は瞋恚よりをこる。今日本國の人人四十九億九萬四千八百二十八人の男女人人ことなれども同_{ひと}一の三毒なり。所謂南無妙法蓮華經を境としてをこれる三毒なれば。人ごとに釋迦多寶十方の諸佛を一時にのりせめ(罵責)流しうしなうなり。是即小の三災の序_{ついで}なり。しかるに日蓮が一(類)いかなる過去の宿しう(習)にや法華經の題目のだんな(檀那)となり給_フらん。是をもてをぼしめせ。今梵天帝釋日月四天天照太神八幡大菩薩。日本國の三千一百三十二社の大小のじんぎ(神祇)は過去の輪陀王のごとし白馬は日蓮なり白鳥は我らが一門なり。白馬のなくは我等が南無妙法蓮華經のこねなり。此聲をきかせ給_フ梵天帝釋日月四天等いかでか色をましひかり(光)をさかんになし給_ハざるべき。いかでか我等を守護し給_ハざるべ

きつよつよとをばしめすべし。抑^オ貴邊の去^ヌ三月の御佛事に驚^{おど}目其數有^あしかば今年^{ことし}一百よ人の人を山中にやしなひて十二時の法華經をよましめ談義して候^まず。此らは末代惡世には一^いわんふだい(閻浮提)第一の佛事にてこう候へ。いくうばくか過去の聖靈もうれしくをばすらん。釋尊は孝養の人を世尊となづけ給へり貴邊^{きへん}に世尊にあらすや。故^ゆ大進阿闍梨の事なげかしく候へども此^こ又法華經^{ほふけ}流布^{りゅうぷ}出來^きすべきいんわん(因縁)にてや候らんをばしめすべし。事事^{じじ}命^{いのち}ながらへば其時申^ますべし。

弘安二年己卯八月十七日

日蓮花押

曾谷の道宗御返事

○寂日房御書

是まで御をどづれ(音信)かたじけなく候。夫^{おれ}人身をうくる事はまれなり。已にまれなる人身をうけたり又あひがたきは佛法是^レ又^レあへり。同^し佛法の中にも法華經の題目にあひたにまつる。結句題目の行者となれり。まことにまことに過去十萬億の諸佛供養の者也。日蓮は日本第一の法華經の行者也。すでに勸

持品の二十行の偈の文は日本國の中には日蓮一人よめり。八十萬億那由陀の菩薩は口には宣^{のたま}たれども修行したる人一人もなし。不思議の日蓮をうみ出^だせし父母は日本國の一切衆生の中には大果報の人也。父母となり其子となるも必^{かな}宿習^{しゆくじゆ}なり。若日蓮が法華經釋迦如來の御使ならば父母^{おん}に其故なからんや。例せば妙莊嚴王 淨德夫人 淨藏 淨眼の如し。釋迦多寶の二佛 日蓮が父母と變^かじ給^{たま}ふ歟。然らずんば八十萬億の菩薩の生れかわり給^{たま}ふ歟又上行菩薩等の四菩薩の中の垂迹歟不思議に覺^{おぼ}は候。一切の物にわたりて名の大切なる也。さてこう天台大師五重玄義の初^{はつ}に名玄義と釋し給へり。日蓮とななる事自^{みづか}解佛乘^{げぶつじやう}とも云^いつべし。かやうに申せば利口^{りくわ}げに聞^きたれども道理のさすところさもやあらん。經^{きやう}云^い如^{ごと}日月^{につげつ}光明^{くわうめい}能除^{のぞ}諸^{しよ}幽冥^{うみやう}斯^{ごと}人行^{にんぎやう}世間^{せけん}能滅^{のう}衆生^{しゆじやう}闍^{せつ}と此文の心よくよく案^あじさせ給へ。斯人行世間の五^ごの文字は上行菩薩末法の始^{はじめ}の五百年に出現して。南無妙法蓮華經の五字の光明をさしいだし(指出)て無明煩惱の闇^{くら}をてらすべしと云^い事也。日蓮等此の上行菩薩の御使として日本國の一切衆生に法華經をうけたもてと勸^{すす}しは是也。此山にしてもをこたらず候也。今の經文の次下^{つぎ}に説^まして云^い於^{こゝ}我滅度^{われめつたう}後^{のち}應^ま受^ま持^ま此

經^ニ是^レ人^ヲ於^テ佛道^ニ決定^シ無^ク有^リ疑^ト云云。かゝる者の弟子檀那とならん人人は宿縁ふかしと思つて日蓮と同一く法華經を弘むべき也。法華經の行者といはれぬる事不祥也まぬかれがたき身也。彼のはんくわい(樊噲)ちやうりやう(張良)まさかぞ(將門)すみとも(純友)といはれたる者は。名ををしむ故にはぢを思ふ故についに臆したることはなし。同じはぢなれども今生のはぢはもののかすならずただ後生のはぢころ大切なれ。獄卒だつねば(番衣婆)懸衣翁が三途河のはた(端)にていしやう(衣裝)をはが(剝)ん時を思食して。法華經の道場へまいり給べし。法華經は後生のはぢをかくす衣也經云々如^シ裸者^ノ得^レ衣^ヲ云云。此御本尊ころ冥途のいしやうなれよくよく信じて給べし。をどこ(男)のはたへ(膚)をかくさざる女あるべしや子のさむさをあわれまざるをや(親)あるべしや。釋迦佛法華經はめ(妻)とをやとの如くましまし候。日蓮をたすけ給ふ事今生の恥をかくし給ふ人也。後生は又日蓮御身のはぢをかくし申すべし。昨日は人の上今日は我身の上なり。花さけばこのみなりよめ(嫁)のしうとめ(姑)になる事候。信心をこたらずして南無妙法蓮華經と唱へ給へし。度度の御音信申すつくしがたく候。此事叙日房くわしくかたり給へ。

九月十六日

日蓮花押

○聖人御難事

啓三〇

鈔一八三七

音下二九

語三五二

拾五四二

扶一一三六

去^ル建^ル長^ル五^ニ年^{癸丑}四月二十八日に。安房ノ國長狹郡之内東條の郷今は郡也。天照太神の御くりや(厨)右大將家の立^テ始^メ給^ヒ日本第二のみくりや。今は日本第一なり。此郡の内清澄寺と申^ス寺ノ諸佛坊の持佛堂の南面にして午ノ時に此法門申^シはじめて今に二十七年弘安二年^{己卯}なり。佛は四十餘年天台大師は三十餘年傳教大師は二十餘年に出世の本懐を遂^ゲ給^フ。其中の大難申^ス計^リなし先^ニ申^スがごとし。余は二十七年なり其間の大難は各各かつ(且)しろしめせり。法華經云^ク而^モ此經者如來^ノ現在^ニ猶多^シ怨嫉^ニ況^ヤ滅度^ノ後云云。釋迦如來の大難はかすをしらず。其中馬の麥をもつて九十日小指の出佛身血大石の頂にかゝりし。善生(星)比丘等の八人が身は佛の御弟子心は外道にともないて晝夜十二時に佛の短をねらいなし。無量の釋子の波瑠璃王に殺し無量の弟子等が惡象にふまれし阿闍世王の大難をなせし等。此等は如來現在の小難なり。況滅度後の大難は龍樹天親天台傳教いまだ値^ヒ給^ハず。法華經の行者な

らずといわばいかでか行者にてをばせざるべき。又行者といはんとすれば佛のどとく身より血をあや(滴)されず。何況や佛に過(カ)たる大難なし。經文むなしきかどとし。佛説すでに大虚妄となりぬ。而日蓮二十七年が間弘長元年(西五月十二日には伊豆ノ國へ流罪。文永元年(甲十一月十一日頭(疵)をかほり左の手を打(チ)をらる。同文永八年(未九月十二日佐渡の國へ配流又頭(疵)の座に望(つ)し。其外に弟子を殺(サ)れ切(ラ)れ追出(ク)われ(過料)等かすをしらず。佛の大難には及(フ)か勝(レ)たるか其(チ)は知(ラ)ず龍樹天親天台傳教は余に肩を並(ハ)がたし。日蓮末法に出(テ)ずば佛は大妄語ノ人多寶十方の諸佛は大虚妄の證明なり。佛滅後二千二百二十餘年が間一閻浮提の内に佛の御言を助(タ)たる人但日蓮一人なり。過去現在の末法の法華經の行者を輕賤する王臣萬民始(ハ)は事なきやうにて終(ツ)ほろびざるは候はず。日蓮又かくのごとし。始(ハ)はしるし(驗)なきやうなれども今二十七年が間。法華經守護の梵釋日月四天等のみ守護せずば。佛前の御誓(ヒ)なしくて無間大城に墮(ツ)べしとをうるしく想(た)間今は各各はげむらむ。大田ノ親昌(チカマサ)長崎次郎兵衛ノ尉時繩(トキツナ)大進房(オホシノブ)が落馬等は法華經の罰(バチ)のあらわるるか。罰は總罰 別罰 現罰 冥罰 四候。日本國の大疫病と大け(カ)ち(飢渴)と

としうち(同土討)と佗國よりせめらるるは總(ト)ばち(罰)なり。やくびやう(疫病)は冥罰なり大田等は現罰なり別(バ)ち(罰)なり。各各師子王の心を取り出(シ)ていかに人をどすともをづる事なかれ。師子王は百獸にをぢず師子の子又かくのごとし。彼等は野干のぼうる(吼)なり日蓮が一門は師子の吼(ナリ)。故最明寺殿の日蓮をゆるししと此殿の許(ゆる)ししは禍(わざ)なかりけるを人のざんげん(諛言)と知(リ)て許(ゆる)しなり。今はいかに人申(ス)とも聞(キ)ほぞかすしては人のざんげんは用(ヒ)給(ハ)べからず。設(シ)大鬼神のつける人なりとも日蓮をば梵釋日月四天等天照太神八幡の守護し給(ハ)ゆへにはつ(罰)しがたかるべしと存(シ)給(ハ)べし。月月日日につよ(強)り給(ハ)へすこしもたゆ(撓)む心あらば魔(マ)たよりをうべし。我等凡夫のつたなさは經論に有(ル)事と遠(ト)き事はをうる心なし。一定として平等(へいとう)も城(じやう)等もいかりて此一門をざんげんとす事も出來せば眼(メ)をひさい(塞)で觀念せよ。當時の人人のつくし(筑紫)へかさされんすらむ。又ゆく人又かしこに向(ム)る人人を我が身にひきあてよ。當時までは此一門に此なげきなし。彼等はげん(現)はかくのごとし殺(サ)ば又地獄(じごく)へゆくべし。我等現(げん)には此大難に値(ヒ)とも後生(ごせい)は佛になりなん。設(シ)ば灸治(しゆじ)のごとし當時(とうじ)はいた(瘡)けれども後の藥(くすり)なればいた(疼)くて

いたからず。彼のあつわら(熱原)の愚癡の者どもいるはげま(言動)してをぞす
 事なかれ。彼等にはただ一(心)にをもち切れよ(善)からんは不思議わる
 (悪)からんは一定をもちへ。ひだる(空腹)しとをもちば餓鬼道ををしへよ。
 さむしといわば八かん(寒)地獄ををしへよ。をろししといわばたか(鷹)にあ
 へるまじ(雉)ねこ(猫)にあへるねすみ(鼠)を佗人とをもう事なかれ。此はこま
 こまとかき候事はかくとし(年)とし月月日に申て候へども。なごへ(名越)の
 尼せう(少輔)房のど(能登)房三位房なんどのやうに候。をくびやう(臆病)物をば
 へすよくふか(欲深)くうたがい多き者どもはぬれ(塗)るうるし(漆)に水をかけ
 ろら(空)をきり(切)たるやうに候。三位房が事は大不思議の事ども候しかど
 も。どのばら(殿原)のをもちには智慧ある者をうねませ給かど。ぐちの人を
 もいなんとももいて物も申さで候しが。はらぐる(倭心)となりて大難にもあ
 たりて候。なかなかさんざんとだにも申せしかばたすかるへんもや候なん。
 あまりにふしぎさに申ざりしなり。又かく申せばれこ人どもは死もう(亡)の
 事を仰候と申べし。鏡のために申。又此事は彼等の人人も内内はれぢれ
 ろれ候らむとをばへ候。人のさわげ(騒)ばとてひやうじ(兵士)なんと此一門
 にせられは。此へかきつけてたび候へ。恐恐謹言。

十月一日

人人御中

日 蓮花押

さぶらうざへもん殿のもとに。とどめらるべし。

明治三十五年三月二十七日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此章全ク十二丁百
 四十一行アリ(稻田海素度記)

○持妙尼御前御返事

微上三〇 考四四

御らう(僧)せんれら(膳料)送り給畢。すでに故入道殿のかくるる日にてればし
 ける歎。とかうまぎれ候けるほどにうちわすれて候ける也。よもうれにはわす
 れ給はじ。蘇武と申せしつわものは漢王の御使に胡國と申國に入つて十九
 年。め(妻)もれとこ(夫)をはなれれどもわする事なし。あまりのこひ(戀)
 しさにれとこの衣を秋ごとにきぬた(礎)のうへにてうちけるが。たもひやど
 を(通)りてゆきにけんれとこのみ(耳)にきこへけり。ちんし(陳子)というしも
 のはめれとこはな(夫婦別)れけるにかがみ(鏡)をわりてひとつづつとりけり。

持妙尼御返事 (遺二七ノ一七)

千八百七十九

(外九ノ十四)

わするる時は鳥いでて告げけり。さらし(相思)といふものはたどこをこひてはか(墓)にいたりて木となりぬ。相思樹と申すはこの木也。大唐へわたるにしが(志賀)の明神と申す神をはす。たこのもろこし(唐)へゆきしをこひて神となれりしま(島)のすがたうな(女)にいたり。まつら(松浦)さよひめ(佐與姫)といふ是也。いにしへよりいまにいたるまでをやこ(親子)のわかれ主従のわかれいづれかつらからざる。されどもれどこをんな(男女)のわかれはどたとへなかりけるはなし。過去遠遠より女の身となりしが。このれどこ娑婆最後のせんちしき(善知識)なりけり。ちりしはな(散花)をちしこのみ(落果實)もさきむすぶなどかは人の返らざるらむ。こごもう(憂)くことしもつらき月日かなれもひはいつもはれぬものゆへ。法華經の題目をとなへまいらせてまいらせ。

十一月二日

日 蓮花押

持妙尼御前御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海素記)

○本門戒體鈔

啓三三五四

鈔二〇五七

語四三三

音下三八

拾六五三

扶一二五二

大乘戒並小乘戒ノ事。凡受テ二百五十戒ヲ得テ大僧ノ名ヲ也。受戒ハ邊國ハ五人中
國ハ十人也。十人者三師七證也三師者和尙阿闍梨ト教授ト也。十人共ニ具ス五徳ト
二百五十戒ト云ヒ別解脱戒ト亦ハ云フ具足戒ト也。受ニ小乗ノ五戒ト云フ優婆塞優婆
夷ト也八齋戒ト亦如レ是ト。受ニ五戒ト必有リ二師ト二師者和尙阿闍梨ト也八齋戒ト
亦如レ是ト。小乗戒ト雖有ニ經卷ト無キ師資相承ト者不レ授テ戒ト也菩薩ノ前非ニ佛ノ
前ニ不レ授テ戒ト也。大乘戒ノ事 師ハ必具ス五徳ト僧也。當ニハ一師ト二師トハ 具ニ受ニ十重
禁戒ト名ニ大僧ト也亦云フ具足戒ト也。受ニ一戒ト不レ云フ具足戒ト也。日本
國自ニ傳教大師ト始立ル一向大乘戒ト也傳教已前通受戒ト也。通受戒者受ニ小乗戒ト
正ニ威儀ト受ニ大乘戒ト期ニ成佛ト也。大小乗ノ戒ヲ兼テ受云フ通受戒ト。日本國小乗ノ
別解脱戒ト弘 鑒真和尙ノ時始鑒真已前沙彌戒ト也。千里之内ニ無下具ニ五徳ト僧上
者自誓受戒ト。自誓受戒者坐於道場ニ一日二日乃至一年二年懺悔罪障ト。普
賢文殊等來告テ云フ毗尼薩毗尼薩ト時可シ自誓受戒ト即名ニ大僧ト。毗尼薩毗尼薩者
滅罪滅罪ト云フ事也。若有下具ニ五徳ト僧上者不レ見ニ好相ト受戒ト也。破ニ十重禁戒ト
者懺悔 授テ之ヲ四十八輕ト亦復如レ是ト。五逆七逆ト論也經文不ニ分明ト不レ授テ者

道理也。佛ハ則盧舍那佛 二十餘菩薩 羅什三藏 南岳 天台 乃至道邃 傳教大師等也。達磨 不空 自天竺受此戒。已上常人義也。日蓮云、彼梵網意歟。傳教大師顯戒論云、大乘戒有二三二者梵網經、大乘二者普賢經、大乘也。普賢經ハ一向自誓受戒也常、人ハ梵網千里之外、自誓受戒、與普賢經、自誓受戒同之思也。日蓮云、水火相違也。所以者何、傳教大師顯戒論有二三義。一者梵網經、十重戒四十八輕戒、大僧戒二者普賢經、大僧戒也。以梵網經、十重禁四十八輕戒、爲眷屬戒也。以法華經普賢經、戒爲大王戒也。小乘、二百五十戒等、民戒 梵網經、戒、臣戒 法華經普賢經、戒、大王戒也云云。普賢經、戒師、千里之外千里之内、有五德、無五德。以三等覺已下、生身、四依、菩薩等、全、不可用傳受戒師。受戒、必三師一證一伴也。已上五人也。三師者、一身、和尚、靈山淨土、釋迦牟尼如來也。如響應、音如清水、移月、法華經、戒、自誓受戒時必來、給也。然則何捨生身、釋迦牟尼如來、更用等覺、元品未斷、四依等耶。若有圓教、四依者爲傳戒、可請之、爲傳受戒、不可用之。疑云、小乘、戒、梵網、戒何、生身、如來不來耶。答云、小乘、釋迦、灰身滅智、佛也、生身既破、譬如下水餅、入清水、移、全餅一本餅既破、小

乘、釋迦、以五分法身、水、移、迦葉阿難等、全餅、佛既入、灰斷了。乃至佛四果初果四善根三賢及以博地、凡夫。二千二百餘年之間、次、餅、移、五分法身之水、前餅、即破壞。如是、展轉之程、凡夫、土器、餅、移、此五分法身、水、未移、佗餅之前、五分法身、水、漏失。更、以何水、移、佗餅、耶。小乘、戒體、亦復如是。正像既盡、末法、濁亂、有名無實也。二百五十戒、僧等、者、但有土器、餅、全、無五分法身、水也。如是、僧等、形、似沙門、無戒體、故、天不護之、唯好、惡行、誑惑、愚人、也。梵網大乘、戒、譬如下金銀、餅、入佛性法身、清水、亦移、金銀、餅、終、雖、可、破壞、勝、瓦器、土器、其用強。故、小乘、二百五十戒、僧、持戒、梵網大乘、破戒、僧、爲國、依怙。雖、然、此、戒、終、可、漏失、者、也。普賢經、戒、互、正像、末、三時、以生身、釋迦如來、爲戒師、故、不用、等覺、已下、聖凡之師、也。小乘、劣應身、通教、勝應身、別教、臺上、虛遮那、爾前、圓教、虛空爲座、毗盧遮那佛、猶以不用之。何況、其已下、菩薩聲聞、凡夫等、師耶。但法華迹門、四教開會、釋迦如來、用之、爲和尚也。二、金色世界、文殊師利菩薩、請之、爲阿闍梨。三、非四味三教、並、爾前、圓教、文殊、此、法華迹門、文殊也。三、都史多天宮、彌勒、慈尊、請之、爲教授。非、小乘、未斷惑、彌勒、乃至通別圓等、彌勒、亦

非下無著菩薩ノ來ニ下、阿輸舍國ニ所授大乘師ノ彌勒上此迹門方便品ヲ所授彌勒也。已上三師也。一證者十方諸佛也。此則異小乘ノ七證也。一伴者同伴同伴者同受戒者也。法華ノ序品ニ所列ニ乘菩薩二界八番之衆也。今戒者捨小乘ノ二百五十戒等並梵網ノ十重禁 四十八輕戒 華嚴ノ十無盡戒 瓔珞ノ十戒等未顯眞實ト定畢テ。入ニ方便品ニ所持ッ五戒 八戒 十善戒 二百五十戒 五百戒乃至十重禁戒等也。經ニ是名持戒者則此意也。迹門ノ戒ハ雖勝ニ爾前大小ノ諸戒ニ而不レ及ニ本門ノ戒一也。十重禁者一不殺生戒二不偷盜戒三不邪淫戒四不妄語戒五不酤酒戒六不說四衆過罪戒七不自讚毀他戒八不慳貪戒九不瞋恚戒十不謗三寶戒。第一不殺生戒者爾前ノ諸經ノ心ハ佛說レ持ニ不殺生戒一雖然法華經ノ心ハ爾前ノ佛ハ殺生第一也。所以ハ者何ニ爾前ノ佛ハ一往雖似レ持ニ世間ノ不殺生戒一未レ持ニ出世ノ不殺生戒ヲ。殺ニ一乘闡提無性有情等ノ九界ノ衆生ヲ不レ令ニ成佛セ。能化ノ佛未レ免レ殺生罪一何況ニ所化ノ弟子耶。然今ノ經ニ悉ク令ニ成佛一云云。從リ今身一至ニ佛身一捨テ爾前ノ殺生罪一持ニ法華壽量品ノ久遠之不殺生戒一不持ニ返。第一一不偷盜戒者爾前ノ諸經ノ心ハ佛說レ持ニ不偷盜戒一雖然法華ノ心ハ爾前ノ佛ハ邪淫第一也。所以ハ者何ニ爾前ノ佛ハ一往雖似レ持ニ世間ノ不邪淫戒一未レ持ニ出世ノ不邪淫戒ヲ。犯ニ一乘闡提等ノ九界ノ衆生ノ佛性ノ智水ヲ不レ令ニ成佛セ。能化ノ佛未レ免レ邪淫罪一何況ニ所化ノ弟子耶。然今ノ經ニ悉ク令ニ成佛一云云。從リ今身一至ニ佛身一捨テ爾前ノ邪淫罪一持ニ法華壽量品ノ久遠之不邪淫戒一不持ニ返。第四一不妄語戒者爾前ノ諸經ノ心ハ佛說レ持ニ不妄語戒一雖然法華ノ心ハ爾前ノ佛ハ妄語第一也。所以ハ者何ニ爾前ノ佛ハ一往雖似レ持ニ世間ノ不妄語戒一未レ持ニ出世ノ不妄語戒ヲ。破ニ一乘闡提等ノ九界ノ衆生ノ色心ヲ不レ令ニ成佛セ。能化ノ佛未レ免レ妄語罪一何況ニ所化ノ弟子耶。然今ノ經ニ悉ク令ニ成佛一云云。從リ今身一至ニ佛身一捨テ爾前ノ妄語罪一持ニ法華壽量品ノ久遠之不妄語戒一不持ニ返。第五一不酤酒戒者爾前ノ諸經ノ意ハ佛說レ持ニ不酤酒戒一雖然法華經ノ心ハ爾前ノ佛ハ酤酒第一也。所以ハ者何ニ爾前ノ佛ハ一往雖似レ持ニ世間ノ不酤酒戒一未レ持ニ出世ノ不酤酒戒ヲ。令ニ一乘闡提等ノ九界ノ衆生飲ニ無明ノ酒ヲ不レ令ニ

戒一。盜ニ一乘闡提等ノ九界ノ衆生ノ佛性ノ智水ヲ不レ令ニ成佛セ。能化ノ佛未レ免レ偷盜罪一何況ニ所化ノ弟子耶。然今ノ經ニ悉ク令ニ成佛一云云。從リ今身一至ニ佛身一捨テ爾前ノ偷盜罪一持ニ法華壽量品ノ久遠之不偷盜戒一不持ニ返。第三一不邪淫戒者爾前ノ諸經ノ心ハ佛說レ持ニ不邪淫戒一雖然法華ノ心ハ爾前ノ佛ハ邪淫第一也。所以ハ者何ニ爾前ノ佛ハ一往雖似レ持ニ世間ノ不邪淫戒一未レ持ニ出世ノ不邪淫戒ヲ。犯ニ一乘闡提等ノ九界ノ衆生ノ佛性ノ智水ヲ不レ令ニ成佛セ。能化ノ佛未レ免レ邪淫罪一何況ニ所化ノ弟子耶。然今ノ經ニ悉ク令ニ成佛一云云。從リ今身一至ニ佛身一捨テ爾前ノ邪淫罪一持ニ法華壽量品ノ久遠之不邪淫戒一不持ニ返。第四一不妄語戒者爾前ノ諸經ノ心ハ佛說レ持ニ不妄語戒一雖然法華ノ心ハ爾前ノ佛ハ妄語第一也。所以ハ者何ニ爾前ノ佛ハ一往雖似レ持ニ世間ノ不妄語戒一未レ持ニ出世ノ不妄語戒ヲ。破ニ一乘闡提等ノ九界ノ衆生ノ色心ヲ不レ令ニ成佛セ。能化ノ佛未レ免レ妄語罪一何況ニ所化ノ弟子耶。然今ノ經ニ悉ク令ニ成佛一云云。從リ今身一至ニ佛身一捨テ爾前ノ妄語罪一持ニ法華壽量品ノ久遠之不妄語戒一不持ニ返。第五一不酤酒戒者爾前ノ諸經ノ意ハ佛說レ持ニ不酤酒戒一雖然法華經ノ心ハ爾前ノ佛ハ酤酒第一也。所以ハ者何ニ爾前ノ佛ハ一往雖似レ持ニ世間ノ不酤酒戒一未レ持ニ出世ノ不酤酒戒ヲ。令ニ一乘闡提等ノ九界ノ衆生飲ニ無明ノ酒ヲ不レ令ニ

○兩人御中御書 考四四七

大國阿闍梨ねもんのたいら(衛門大夫) 志まぐわん殿等に申る。故大進阿闍梨の坊は各各の御計ラビに有んべきかと存候に。今に人も住せずなんど候なるはいかなる事ふ。ゆづり(讓)状のなくばころ人も計候ラビはめ。くはしくうけ給候へばん(難)の阿闍梨にゆづられて候よしうけ給候ハ。又いぎ(違義)あるべしどもをばへず候。うれに御用なきは別の子細の候か。其子細なくば大國阿闍梨 大夫殿の御計ラビとして辨阿闍梨の坊へこばま豊ちわたさせ給候へ。心こころけん(賢)なる人に候へばいかながところをもい候らめ。辨の阿闍梨の坊をすり(修理)してひる(廣)くもら(漏)ずば諸人の御ために御たからにてこり候はんすらむめ。ふゆ(冬)はせうまう(燒亡)しげし。もしやけ(燒)なばうむ(損)と申人もわらいなん。このふみ(文書)ついて兩三日が内に事切きて各各御返事給候はん。恐恐謹言。

十月廿日

日 蓮花押

兩人御中

ゆづり状を。たがうべからず。

明治三十五年五月二十六日京都妙顯寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ全章二丁也(稻田海素)

(度記)

○四條金吾殿御返事 微下 考四四九

先度強敵トとりあひ(取合)について御文給かみき。委ま見まいらせ候。さてもさても敵人にねらはれさせ給としか。前前の用心といひ又けなげといひ又法華經の信心つまき故に難なく存命させ給と目出たし目出たし。夫と運はまりぬれば兵法もいらす果報つきぬれば所従もしたがはず。所詮運ものこり果報もひかゆる故なり。ことに法華經の行者をば諸天善神守護すべきよし屬累品にして誓狀をたて給と。一切の守護神諸天の中にも我等が眼に見へて守護し給は日月天也。争か信をとらざるべき。ことにことに日天の前に摩利支天ままします日天法華經の行者を守護し給はんに所従の摩利支天尊すて給べしや。序品の時名月天子普光天子寶光天子四大天王與其眷屬萬天子俱と列座し給ふまりし天は三萬天子の内なるべし。もし内になくば地獄にころねはしまさなすれ。今度の大事は此天のまほりに非ずや彼天は劔形けんぎやうを貴邊にあたへ此こゝへ下りぬ。此日蓮は首題の五字を汝にさづく法華經受持のものを守護せん事

四條金吾殿御返事 (遺二七ノ二六)

千八百八十九

(外十三ノ十六)

疑あるべからず。まりし天も法華經を持て一切衆生をたすけ給、臨兵闘者皆陳列在前の文も法華經より出たり。若説俗間經書治世語言資生業等皆順正法とは是也。これにつけてもいよいよ強盛に大信力をいだし給へ。我が運命つきて諸天守護なしとらむる事あるべからず。將門まさかどはつはもの名をとり兵法の大事をさしめたり。されども王命にはまけぬ。はんくわひ(樊噲)ちやうりやう(張良)もよしなしただ心ころ大切なれ。いかに日蓮いのり申、とも不信ならばぬれ(濡)たるはくちに火をうちかくるがごとくなるべし。はげみをなして強盛に信力をいだし給へし。すぎし存命不思議とれもはせ給へ。なにの兵法よりも法華經の兵法をもちひ給へし。諸餘怨敵皆悉摧滅の金言むなしかるべからず。兵法劔形の大事も此妙法より出たり。たふかく信心をとり給へ。あへて臆病にては叶へべからず候。恐恐謹言。

十月二十三日

日 蓮花押

四條金吾殿御返事

○上野殿御返事

微下四四 考八五〇

白米しろこめ一だ(駄)をくり給と畢しま。一切の事は時による事に候か。春は花 秋は月と申、事も時なり。佛も世にいでさせ給とし事は法華經のためにて候しかども四十餘年はどかせ給はず。其故を經文にどかれて候には説時未至故等と云云。夏あつわた(厚綿)のころで(小袖)冬かたびら(帷)をたびて候はうれしき事なれども。ふゆ(冬)のころで(夏)のかたびらにはすぎず。うへ(飢)て候時のこがね(金)かつ(渴)せる時のこれ(御料)はうれしき事なれどもはん(飯)と水とにはすぎず。佛に土をまいらせて候人 佛となり玉をまいらせて地獄へゆく(行)と申、ことこれか。日蓮は日本國に生れてわわく(誑惑)せずぬすみせずかたがたのどがなし。末代の法師にはどがらすき身なれども。文をこのむ王に武のすてられいる(色)をこのむ人に正直物のにくまるるがごとく。念佛と禪と眞言と律とを信する代に値たて法華經をひろむれば王臣萬民にくまれて。結局は山中に候へば天いかんが計うせ給とらむ。五尺のゆき(雪)ふりて本よりもかよわぬ山道ふさがりといく(訪來)る人もなし。衣きぬもらすくてかん(寒)ふせぎがたし食たへ(絶)て命すでにをはりなんとす。かゝるきざみ(刻)にいのちさまた

げの御とぶらひかつはよろこびかつはなけかし。一度にをもひ切つてうへし(餓死)なんとあん(案)じ切つて候つるに。わづかのともしび(燈)にあふら(油)をうへられたるがごとし。あわれたうとくめでたき御心かな。釋迦佛法華經定て御計候はんか。恐恐謹言。

十二月廿七日

日蓮花押

上野殿御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ全章四丁卅一行也又弘安二年到來トアリ(稲田海素度記)

○三世諸佛總勘文教相廢立

日蓮撰之

夫一代聖教者總テ五十年ノ說教是ヲ言フ一切經也。此分ヲ爲ス二ト一者化佗二者自行也。一ニ化佗ノ經者從リ法華經一前、四十二年ノ間說給諸ノ經教此云ニ權教ト亦ハ名ニ方便ト。此四教、中ニ藏教ト通教ト別教ト三教也五時ノ中華嚴ト阿含ト方等ト般若ト從リ法華一前、四時ノ經教。又十界ノ中前、九法界又夢ト寤ト中夢中ノ善惡又夢云ヒ

權ト寤云フ實ト也。是ノ故ニ夢ハ假ニ有テ無ニ體性ニ故ニ名テ云フ權ト也寤ハ常住不變ノ心ノ體故ニ此名テ爲ス實ト。故ニ四十二年ノ諸ノ經教ハ生死ノ夢中ノ善惡ノ事ヲ說ク故ニ言フ權教ト。夢中ノ衆生ヲ誘引シ驚覺シ成ニ法華經ノ寤ト思食支度方便ノ經教故ニ言フ權教ト。由スレテ糾ニ文字ノ讀テ可キ得レ心也。故ニ權ノ讀レ權ノ權事ノ手本以テ夢ヲ爲ス本ト又實讀レ實ト實事ノ手本ト寤ト。故ニ生死ノ夢ハ權ニ無ニ性體ニ權事ノ手本故ニ云フ妄想ト。本覺ノ寤ハ實ニ離ニ生滅ヲ心眞實ノ手本故ニ云フ實相ト。是以テ糾ニ權實ノ二字ヲ可キ知ル一代聖教ノ化佗ノ權ト自行ト實差別ト也。故ニ四教ノ中前ノ三教ト五時之中前ノ四時ト十法界ノ中前ノ九法界ト同皆說シ夢中ノ善惡ノ事也故ニ云フ權教ト。此教相無量義經ニ說シ四十餘年未顯眞實ト已上。未顯眞實諸經ハ夢中ノ權教ト。故ニ釋籤ニ云ク性雖無殊必藉テ幻ニ發ス幻ノ機ト幻ノ感ト幻ノ應ト幻ノ赴ニ能應ト所化ト並ニ非ニ權實ト已上此皆夢幻ノ中ノ方便ノ教。性雖無殊等者夢見心性寤時ノ心性只一ノ心性總テ雖無レ異夢中ノ虛事ト寤時ノ實事ト二事以テ一ノ心法ト見思我心云フ釋也。故ニ止觀ニ云ク前ノ三教ノ四弘能モ所浪ス已上。四弘者衆生ノ無邊度誓願シ煩惱ノ無邊斷誓願シ法門ノ無盡知誓願シ無上菩提證誓願シ此云フ四弘ト。能者如來所者衆生此四弘ハ能ノ佛モ所ノ衆生モ前三教ハ皆夢中ノ是非釋給。然法華以前ノ四十二年ノ

間ノ說教諸經ハ未顯眞實ノ權教ノ方便ナリ。法華ニ可キ取リ寄ル方便故ニ非ニ眞實ニハ。此佛自四十二年之間說集給後今欲說ニ法華經ヲ。先ッ序分ノ開經ノ無量義經ノ時佛自勘文給教相不可入人ノ語不可生不審。故ニ玄義ニ云ク九界ヲ爲シ權佛界ヲ爲ス實ト已上。九法界ノ權ハ四十二年ノ說教佛法界ノ實ハ八箇年ノ說法華經是也故ニ法華經ニ云ク佛乘ト。九界ノ生死ノ夢ノ理云ニ權教ト佛界ノ常住ノ寤ノ理云ニ實教ト。故ニ五十年ノ說教一代ノ聖教一切ノ諸經ハ化化ノ四十二年ノ權教ト與ニ自行ノ八箇年ノ實教ト合五十年。以テ權實トノ文字ヲ懸テ鏡ニ無陰。故ニ修行ニ三藏教ヲ歷テ三僧祇百大劫ヲ終成レ佛ニ思我カ身出シ火ヲ灰身入滅成レ灰ト失也。修行ニ行通教ヲ滿ニ七阿僧祇百大劫ヲ成レ佛ニ思如ク前ノ同様ニ灰身入滅無ニ跡形ト失也。修行ニ別教ヲ盡ニ二十二大阿僧祇百千萬劫ヲ終思成レ佛ニ。生死ノ夢ノ中ノ權教ノ成佛本覺ノ寤ノ法華經之時別教無ニ實佛ノ夢中ノ果。故ニ別教ノ教道無ニ實佛云フ也。別教ノ證道初地ニ始斷ニ一分ノ無明ヲ顯シ一分ノ中道ノ理ヲ。始見レ之ヲ知テ別教ハ隔歷不融ノ教ト移リ入テ圓教ニ成リ圓人ト已テ不レ留ニ別教。有ニ上中下ノ三根ノ不同故ニ初地ニ地三地乃至等覺成圓人ト。故ニ別教之面ニ無佛也故ニ云ク有教無人ト也。故ニ守護國界章ニ云ク有爲ノ報佛夢中ノ權果前三教ノ修行ノ佛無作ノ三身ハ覺前ノ實佛後圓教ノ觀心ノ佛又云ク權教ノ三身ハ

未タ免レ無常ヲ前三教ノ實教ノ三身ハ俱體俱用後圓教ノ觀心ノ佛此釋ヲ能可キ得レ意也。權教ハ難行苦行ノ適成レ佛ニ思夢中ノ權ノ佛本覺ノ寤ノ時無ニ實佛也。極果ノ佛無有教無人也況ヤ教法實ヲ取レ之ヲ修行迷ニ聖教ニ也。此前三教不レ成レ佛ニ證據ヲ說キ置キ給未代ノ衆生ニ令レ開ニ慧解ヲ。九界ノ衆生ハ於テ一念ノ無明ノ眠之中ニ溺ニ生死ノ夢ニ忘レ本覺ノ寤ヲ執シ夢ノ是非ニ從レ冥キ入ル冥。是故ニ如來ハ入テ我等カ生死ノ夢ノ中ニ顛倒ノ衆生ト。以テ夢中ノ語ヲ誘ヒ夢中ノ衆生ヲ說テ夢中ノ善惡ノ差別ノ事ヲ漸漸ニ誘引シ給。夢中ノ善惡ノ事重疊様様ニ無量無邊先ッ付テ善事ニ立ッ上中下ヲ三乘ノ法是也三三九品也。如此說キ已テ後ニ又立ッ上上品ノ根本善ヲ云フ上中下三三九品ノ善ト。皆悉ク九界生死ノ夢中ノ善惡ノ是非今是總ッ爲ス邪見外道ト搜要。此上ニ又上上品ノ善心ハ本覺ノ寤ノ理此云ニ善ノ本ト說キ聞給時ニ。以テ夢中ノ善惡ノ悟ノ力故ニ寤ノ本心ノ實相ノ理始被レ聞知ノ事也。是ノ時ニ佛說テ言ク夢ト寤トハ虛事ノ實事トノ事心法ハ只一也。值ニ眠ノ緣ニ夢眠去寤ノ心法ハ只一可レ被レ開會ニ下地ヲ被シ造リ置カ方便也此ハ別教ノ中道ノ理。是ノ故ニ未タ顯サ十界互具圓融相即ニ無ニ成佛ノ人。故ニ從ニ三藏教ニ至ニ別教ニ四十二年之間ノ八教ハ皆悉ク方便夢中ノ善惡也。只暫ク用テ之ヲ誘引シ衆生ヲ給支度方便也。此權教ノ中分分ニ皆悉ク方便ト眞實ト有權實ノ法不レ闕也。四

教一一各有四門一無有差別一語一語只同語也文字無異。由斯迷語權實差別不分別時云佛法滅。是方便教。唯有穢土。總無淨土。法華經云十方佛土中。唯有此一乘。法無二。亦無三。除佛方便。說已上。故知無二。十方佛土。取方便。教為往生。行。十方淨土。有一乘。法嫌之。不取。可成佛。道理。可有否。一代教主釋迦如來說。一切經。勘文。給言。三世諸佛。同樣。一語。一語。勘文。給說法。儀式。我如是。不違。一言。說教。次第云云。方便品云。如三世諸佛。說法之儀式。我。今亦如是。說。無分別。法。已上。無分別。法者。一乘。妙法。無簡。善惡。草木。樹林。山河。大地。微塵。中互。各具。足。十法界。法。我。心。妙法。蓮華。經。一乘。周。徧。十方。淨土。無闕。十方。淨土。依報。正報。功德。莊嚴。有我心。中。一片。時。無離。三身。即一。本覺。如來。是。外。無法。此一法計。有。十方。淨土。無有。餘法。故云。無分別。法。是也。不取。此一乘。妙法。行。全。無。淨土。取。方便。教。為。成佛。行。迷。中。迷。也。我。成佛。後。立。還。穢土。穢土。衆生。為。令。入。佛法。界。次第。誘。入。說。方便。教。云。化。他。教。故。言。權。教。又。云。方便。化。他。法。門。有。樣。大。體。存。略。如。斯。二。自行。法。者。是。法。華。經。八。箇。年。說。是。經。說。寤。本。心。唯。衆。生。思。習。夢。中。心。地。故。借。夢。中。言。語。

訓。寤。本。心。故。語。夢。中。言。語。意。本。心。訓。法。華。經。文。釋。意。如。此。不。明。之。經。文。釋。文。必。可。迷。也。但。此。化。他。夢。中。法。門。備。寤。本。心。德。用。法。門。取。夢。中。教。攝。寤。心。故。四。十。一。年。夢。中。化。他。方。便。法。門。攝。妙。法。蓮。華。經。寤。心。外。無。法。此。云。法。華。經。開。會。也。譬。如。衆。流。納。大。海。也。佛。心。法。妙。衆。生。心。法。妙。取。此。二。妙。攝。己。心。故。心。外。無。法。己。心。心。性。心。體。三。己。身。本。覺。三。身。如。來。也。是。經。說。云。如。是。相。應。身。如。是。性。報。身。如。是。體。去。身。此。云。三。如。是。此。三。如。是。本。覺。如。來。十。方。法。界。為。二。身。體。十。方。法。界。為。三。心。性。十。方。法。界。為。三。相。好。是。故。我。身。本。覺。三。身。如。來。身。體。也。周。徧。法。界。一。佛。德。用。一。切。法。皆。是。佛。法。也。說。給。時。列。其。座。席。諸。四。衆。八。部。畜。生。外。道。等。不。漏。一。人。皆。悉。安。想。僻。目。僻。思。立。所。散。止。還。本。覺。寤。皆。成。佛。道。佛。如。三。寤。人。衆。生。如。三。夢。見。人。故。醒。生。死。虛。夢。還。本。覺。寤。即。身。成。佛。平。等。大。慧。無。分。別。法。皆。成。佛。道。云。只。一。法。門。也。十。方。佛。土。區。區。雖。分。通。法。一。乘。也。無。方。便。故。無。分。別。法。十。界。衆。生。品。品。雖。異。實。相。理。一。故。無。分。別。百。界。千。如。三。千。世。間。法。門。雖。殊。十。界。互。具。故。無。分。別。夢。寤。虛。實。雖。各。別。異。一。心。中。法。故。無。分。別。過。去。未。來。現。在。雖。三。一。念。心。中。理。無。分。別。一。切。經。語。夢。中。

語者譬如扇樹。顯法華經。寤心。言者譬如三月。風。故本覺。寤心。月輪。光照。無明。闇。實相般若。智慧。風。拂。妄想。塵。故以夢。語。扇。樹。令。知。寤。心。月。風。是。故。散。夢。餘。波。令。歸。寤。心。本。心。也。故。止。觀。云。如。月。隱。重。山。舉。扇。類。之。風。息。大。虛。動。樹。訓。之。文。弘。決。云。真。常。性。月。隱。煩。惱。山。煩。惱。非。一。故。名。為。重。山。圓。音。教。風。息。化。歸。寂。寂。理。無。礙。猶。如。大。虛。四。依。弘。教。如。扇。樹。乃。至。教。知。月。風。也。已。上。夢。中。煩。惱。雲。重。疊。如。山。其。數。八。萬。四。千。塵。勞。隱。心。性。本。覺。之。月。輪。如。扇。樹。以。經。論。文。字。言。語。教。如。月。風。本。覺。之。理。令。覺。知。聖。教。故。文。語。如。扇。樹。一。文。上。釋。一。往。釋。非。實。義。也。如。月。妙。法。心。性。月。輪。如。風。我。心。般。若。慧。解。令。訓。知。名。妙。法。蓮。華。經。故。釋。籤。云。尋。聲。色。之。近。名。而。至。無。相。之。極。理。已。上。聲。色。近。名。者。如。扇。樹。夢。中。一。切。經。論。言。說。也。無。相。極。理。者。如。月。風。寤。我。身。心。性。寂。光。極。樂。也。此。極。樂。者。十。方。法。界。正。報。有。情。十。方。法。界。依。報。國。土。和。合。一。體。三。身。即。一。四。土。不。二。法。身。一。佛。十。界。為。身。法。身。十。界。為。心。報。身。也。十。界。為。形。應。身。也。十。界。外。無。佛。佛。外。無。十。界。依。正。不。二。身。土。不。二。以。一。佛。身。體。云。寂。光。土。是。故。云。無。相。極。理。也。離。生。滅。無。常。之。相。故。云。無。相。也。法。性。淵。底。

玄宗極地故云極理。此無相極理。寂光極樂。有。一切有情。心性。中。一。清。淨。無。漏。名。之。云。妙。法。心。蓮。臺。也。是。故。云。心。外。無。別。法。此。云。一。切。法。皆。是。佛。法。通。達。解。了。也。生。死。二。理。生。死。夢。理。妄。想。顛。倒。以。本。覺。無。糾。我。心。性。無。可。生。始。一。故。無。可。死。終。非。離。生。死。心。法。耶。劫。火。不。燒。水。災。不。朽。劍。刀。不。切。弓。箭。不。射。入。芥。子。中。芥。子。不。廣。心。法。不。縮。滿。虛。空。中。虛。空。不。廣。心。法。不。狹。背。善。云。惡。背。惡。云。善。故。心。之。外。無。善。無。惡。離。此。善。惡。云。無。記。也。善。惡。無。記。此。外。無。心。心。外。無。法。故。善。惡。淨。穢。凡。夫。聖。人。天。地。大。小。東。西。南。北。四。維。上。下。言。語。道。斷。心。行。所。滅。心。分。別。思。言。顯。言。語。心。外。分。別。無。分。別。無。言。云。心。思。響。顯。聲。云。凡。夫。迷。我。心。不。知。不。覺。也。佛。悟。顯。之。名。神。通。也。神。通。者。神。通。一。切。法。無。礙。也。此。自。在。神。通。一。切。有。情。心。有。故。狐。狸。分。分。現。通。皆。心。神。分。分。悟。此。心。一。法。國。土。世。間。出。來。事。也。一。代。聖。教。者。說。此。事。也。此。云。八。萬。四。千。法。藏。也。是。皆。悉。一。人。身。中。法。門。有。也。然。八。萬。四。千。法。藏。我。身。一。人。日。記。文。書。也。此。八。萬。法。藏。我。心。中。孕。持。懷。持。以。我。身。中。心。佛。法。淨。土。我。身。外。思。願。求。迷。也。此。心。值。善。惡。緣。善。惡。法。造。出。也。華。嚴。經。云。心。

如三工畫師ノ造種種ノ五陰一切世間ノ中無法而不造。如心ノ佛亦爾。如佛ノ衆生然三界唯一心心外無別法。心佛及衆生是三無差別已上。無量義經云從無相不相一法。出生無量義已上。無相不相一法者一切衆生一念心是也。文句釋云無生滅無常相故云無相也。雖二乘有餘無餘ノ二涅槃相故云不相也云云。以心不思議爲經論詮要也。悟知此心名云如來。悟知之後十界我身我心我形本覺如來我身心故。不知之時名爲無明。無明無讀也。我心有樣明不覺。悟知之一時名云法性。故無明法性一心異名也。雖二心只一心。由斯無明不可斷也。斷夢心無明可失。寤心一故。總圓教意一毫惑不。斷故云一切法皆是佛法也。法華經云如是相一切衆生相好。如是性。本覺如是體。本覺法身如來。此三如是後七如是出生合。成十如是十法界也。此十法界一人心出。成八萬四千法門也。一人手本一切衆生平等如是。三世諸佛總勘文御判。印正本。文書佛御判者實相。一印之印者判異名。餘一切經無實相印。非正本。文書全無實佛無實佛。故夢中文書無淨土故。十法界十如是。一也。譬如下水中月。雖

無量。虛空ノ月。一上。九法界ノ十如是。夢中ノ十如是。故如水中月。佛法界ノ十如是。本覺寤ノ十如是。如虛空ノ月。是故顯佛界。一十如是。九法界ノ十如是。如水中月。一。無闕減。同時皆顯體。用一具。成一體。佛。十法界互具足平等。十界衆生。虛空。本月。水中。末月。具足一人。身中無闕。故十如是。本末究竟等。無差別。本者衆生。十如是。末者諸佛。十如是也。諸佛衆生一念心顯。給衆生。是本諸佛。是末也。然經云。今此三界皆是我有。其中衆生。悉是吾子。已上。佛成道後。爲化他。故唱迹。成道。生死。夢中。說本覺。寤。智慧。譬父。愚癡。譬子。如是。說給。衆生。雖本覺。十如是。一念。無明。如眠。覆心。入。生。死。夢。忘。本覺。理。髮筋。切。程。見。過去。現在。未來。三世。虛夢也。佛。如。寤。人。入。生。死。夢。驚。衆生。給。智慧。夢。中。如。父母。夢。中。我等。如。子。息。也。以此道理。言。悉是吾子。思。解。此。理。諸。佛。我。等。本。故。父子。末。故。父子。父子。天性。本末。是同。由斯。己心。佛心。不。異。觀。故。覺。生。死。夢。還。本。覺。寤。即。身。成。佛。云。即。身。成。佛。今。我。身。上。天。性。地。體。無。煩。無。障。衆。生。運。命。果。報。冥。加。夫。以。夢。時。心。譬。迷。寤。時。心。譬。悟。以。之。覺。悟。一。代。聖。教。無。二。跡。形。見。虛。夢。苦。心。成。汗。水。驚。我。身。家。臥。所。一。所。不。異。

夢ノ虛ト虚ノ實ト一事ヲ目見心思只一所身モ只一身有ニ一ノ虚ト實事ト以テ之ヲ可シ知シ
 九界ノ生死ノ夢見我心佛界常住ノ寤ノ心不レ異○九界生死ノ夢見ル所カ佛界常
 住ノ寤ノ所不レ變心法不レ替在所不レ差夢ハ皆虚事寤ハ皆實事也○止觀ニ云ク昔有ニ
 莊周一夢ニ成テ胡蝶ト經ニ一百年ヲ苦ハ多ク樂ハ少ク成テ汗水ト驚○胡蝶不レ成ラ百年不レ經
 無レ苦モ無レ樂モ皆虚事也皆妄想也取意○弘決ニ云ク無明ハ如ク夢ノ蝶ニ三千ハ如ク百年ノ
 一念無レ實猶如ク非蝶ニ三千亦無キ○如ク非積年ヲ已上此釋ハ即身成佛ノ證據○夢
 成レ蝶ト時モ莊周一不異寤ニ蝶ト不レ成ラ思フ時モ無レ別○莊周一我身ヲ思フ生死ノ凡夫
 時ハ如ク夢ニ成レ蝶ト僻カ目僻カ思我身ハ本覺ノ如來思フ時ハ如ク本ノ莊周一即身成佛以テ
 蝶ノ身一非レ云ニ成佛ト也○蝶ト思虚事無レ成佛ノ言ハ沙汰ノ外ノ事○無明ハ如ク夢ノ蝶ト判
 我等カ僻カ思ハ猶如ク昨日ノ夢ノ無レ性體ト妄想○誰ノ人カ信ニ受テ虚夢ノ生死ヲ生ニ疑テ
 於常住涅槃ノ佛性ト止觀ニ云ク無明ノ癡惑本是法性以テ癡迷ト故ニ法性變作ニ無
 明ト起テ諸ノ顛倒ノ善不善等ト如ク寒來結テ水ヲ變作ニ堅冰ト又如ク眠來變テ心ヲ有ニ
 種種ノ夢ト今當ニ體ニ諸ノ顛倒ハ即是法性不レ一不レ異○雖ニ顛倒起滅如ク旋火輪ノ
 不レ信ニ顛倒起滅ト唯信ニ此心但是法性○起ハ是法性起滅ハ是法性滅體ニ其
 實ニ不起滅ト妄謂ニ起滅ト只指ニ妄想ト悉ク是法性以テ法性ト繫ニ法性ト以テ法性ト念ニ

法性ト常ニ是法性無レ不レ法性一時ト已上○如ク是ノ無レ不レ法性一時ノ際上理ノ法性ト如ク
 夢ノ蝶ト於テ無明ト生ニ實有ノ思ヲ迷レ之○止觀ノ九ニ云ク譬如シ眠ノ法覆レテ心ヲ一念之
 中ニ夢ニ無量世ノ事ト乃至寂滅真如ニ有ニ何ノ次位ト乃至一切衆生即大涅槃不
 可ニ復滅ト有ニ何ノ次位高下大小ト耶○不生不生不可說有ニ因緣ト故ニ亦可得レ說
 十因緣ト法爲レ生ト作レ因ト如下畫ニ虚空ニ方便種樹ト說ク一切位ヲ耳已上○知テ十法
 界ノ依報正報ト法身佛一體三身ノ德ト通ニ達解レ了一切法ハ皆是佛法ト是爲レ名
 字即ト○名字即ト位即身成佛ト故ニ圓頓ノ教無レ次位ト次第ト故ニ玄義ニ云ク末代ノ學
 者多ク執ニ經論ト方便斷伏ト諍鬪ト如ク水ノ性ト冷ト不レ飲ト安ト知レ已上○天台判ニ云ク
 次位ノ綱目ハ依レ仁王瓔珞斷伏ト高下ハ依レ大品智論ト已上○仁王瓔珞大品大智
 度論是ノ經論ト皆法華已前ノ八教ノ經論ト權教ト行ハ經ト無量劫ト昇進次位ト說ニ位ト
 次第ト○今法華ハ超ニ八教ニ圓速疾頓成ト心佛衆生此三攝ト我一念ノ心中ニ無レ
 心ノ外ニ觀ト下根ノ行者尙一一生中ニ入ニ妙覺位ト○一多ト相即一位ト一切位皆
 是具足故ト入ニ一生ト○下根如是ト況ヤ中根ト者何ト況ヤ上根ト實相ノ外ニ更ニ無レ別
 法ト實相ト無レ次第故ト無レ位ト總ニ代聖教ト一人ノ法ト我身ノ本體ト能可レ知ル
 悟レ之ト云レ佛ト迷レ之ト衆生此ト華嚴經ト文意ト弘決ト六ニ云ク知此身ノ中ニ具ニ做ニ天

地。知頭圓象。天足方象。地。身內空種。即是虛空。腹。溫。法。春夏。背。剛。法。秋冬。四體。法。四時。大節。十二。法。十二月。小節。三百六十六。法。三百六十日。鼻。息。出入。法。山澤溪谷。中。風。口。息。出入。法。虛空。中。風。眼。法。日月。開閉。法。晝夜。髮。法。星辰。眉。法。北斗。脈。法。江河。骨。法。玉石。皮。肉。法。地。土。毛。法。叢林。五。臟。在。天。法。五星。在。地。法。五。岳。在。陰。陽。法。五行。在。世。法。五常。在。內。法。五。神。修。行。法。五。德。治。罪。法。五。刑。謂。墨。劓。剕。宮。大。辟。其。數。有。三。千。罰。此。云。五。刑。主。領。為。五。官。五。官。如。下。第。八。卷。引。博。物。志。謂。荷。蕢。等。昇。天。曰。五。雲。化。為。五。龍。心。為。朱。雀。腎。為。玄。武。肝。為。青。龍。肺。為。白。虎。脾。為。勾。陳。又。云。五。音。五。明。六。藝。皆。從。此。起。亦。復。當。識。內。治。之。法。覺。心。內。為。大。王。居。百。重。之。內。出。則。為。五。官。侍。衛。肺。為。司。馬。肝。為。司。徒。脾。為。司。空。四。支。為。民。子。左。為。司。命。右。為。司。錄。主。司。人。命。乃。至。臍。為。太。一。君。等。禪。門。中。廣。明。其。相。已。上。人。身。本。體。委。檢。如。是。然。以。此。金。剛。不。壞。身。思。生。滅。無。常。身。一。僻。思。譬。如。莊。周。夢。蝶。釋。給。也。五。行。者。地。水。火。風。空。五。大。種。五。蓋。五。戒。五。常。五。方。五。智。五。時。只。一。物。經。經。異。說。內。典。外。典。名。目。異。名。今。經。開。之。說。一。切。衆。生。心。中。五。佛。性。

五智。如來。種子。是。則。妙。法。蓮。華。經。五。字。也。以。此。五。字。造。人。身。體。也。本。有。常。住。也。本。覺。如。來。也。是。云。十。如。是。此。云。唯。佛。與。佛。乃。能。究。盡。不。退。菩。薩。與。極。果。二。乘。少。分。不。知。法。門。然。圓。頓。凡。夫。從。初。心。知。之。故。即。身。成。佛。金。剛。不。壞。體。是。以。明。可。知。天。崩。我。身。可。崩。地。裂。我。身。可。裂。地。水。火。風。滅。亡。我。身。亦。滅。亡。然。此。五。大。種。過。去。現。在。未。來。三。世。雖。替。五。大。種。無。替。正。法。像。法。未。法。三。時。雖。殊。五。大。種。是。一。無。盛。衰。轉。變。藥。草。論。品。疏。圓。教。理。大。地。圓。頓。教。空。雨。亦。三。藏。教。通。教。別。教。三。教。三。草。一。木。也。其。故。此。草。木。圓。理。大。地。生。圓。教。空。雨。養。五。乘。草。木。榮。依。天。地。我。榮。由。不。思。知。故。三。教。人。天。二。乘。菩。薩。譬。草。木。說。不。知。恩。故。得。草。木。名。今。法。華。始。五。乘。草。木。知。圓。理。母。圓。教。父。也。一。地。所。生。如。知。母。恩。一。雨。所。潤。如。知。父。恩。藥。草。論。品。意。如。是。也。釋。迦。如。來。五。百。塵。點。劫。之。當。初。凡。夫。御。坐。時。知。我。身。地。水。火。風。空。即。座。開。悟。後。為。化。佗。世。世。番。番。出。世。成。道。在。在。處。處。八。相。作。佛。王。宮。誕。生。樹。下。成。道。始。成。佛。樣。見。知。衆。生。四。十。餘。年。儲。方。便。教。誘。引。衆。生。其。後。捨。方。便。諸。經。教。說。顯。正。直。妙。法。蓮。華。經。五。智。如。來。種。子。理。其。中。九。納。四。十。二。年。方。便。諸。經。九。一。佛。乘。名。一。法。一。人。上。法。多。人。

不_レ綺_エ造_テ正文書_ヲ慥_{ナル}御判_ノ印_{アリ}。三世諸佛ノ手繼_キ文書_ヲ從_リ釋迦佛_一被_レ相傳_セ時_ニ滿_チ塞_{カレ}三千二百萬億那由佗ノ國土ノ上ノ虛空ノ中_ニ若干ノ菩薩達ノ頂_ヲ摩_テ盡_シ指_シ時_ヲ末法_{近來}爲_ニ我等衆生_ノ慥_ニ說_キ聞_セ此_由。以_テ佛ノ讓狀_ヲ末代ノ衆生_ニ慥_ニ可_シ授_與一慥_ニ三度_同御語_ニ說_キ給_シ。若干ノ菩薩達各盡_シ數_ヲ曲_レ躬_ヲ低_レ頭_ヲ三度_同言_ニ各我_モ不_レ劣_ラ事請_ヲ申_シ給_シ佛_心安_ク思_食還_テ本覺_ノ都_ニ。三世ノ諸佛ノ說法ノ儀式作法_只同_シ御言_ニ指_シ時_ヲ末代ノ讓狀_ヲ只_一向_ニ指_テ後五百歲_ヲ以_テ此_妙法_{蓮華經}可_シ成佛_一時讓狀_之面_ニ被_レ載_シ手繼_キ證文_{アリ}。安樂行品末法_ニ入_テ近來_初心_ノ凡夫修_ニ行法華經_一可_シ成佛_一樣_ヲ被_レ說_キ置_カ也。身_モ安樂行口_モ安樂行意_モ安樂行自行_ノ三業_モ誓願安樂_ノ化他_ノ行_モ同_ク於_レ後末世法欲滅_時云云。此_ハ近來_ノ時_{アリ}。已_上有_ニ四所_一。藥王品_ニ所_ニ被_レ說_キ勸發品_ニ所_ニ被_レ說_キ。皆指_テ近來_一被_レ讓_リ置_カ不_レ用_ニ正文書_ヲ付_キ凡夫_ノ言_ニ任_テ愚癡_ノ心_ニ奉_シ背_キ三世諸佛ノ讓_リ狀_ニ。永_ク背_キ佛法_ニ三世諸佛何_レ無_ク本意_一口惜_シ心憂_ク歎_キ悲_シ思_食。涅槃經_ニ云_ク依法_ニ不_レ依_ラ人_ニ云云。痛_ヒ哉_悲哉_{末代ノ學者習_ニ學佛法_ヲ還_テ滅_ニ佛法_ヲ。弘決_ニ悲_シ之_ヲ曰_ク聞_ニ此圓頓_ヲ不_ニ崇重_セ者良_ニ由_レ近代習_テ大乘_ヲ者_ノ雜濫_上故_也。況_像末情_澆信_心寡_薄圓頓_ノ教法_盜藏_ニ盈_レ函_ニ不_ニ暫思_惟便_チ至_レ瞑_目徒_生徒_死一_ニ何_ソ痛_哉已_上。同_四云_ク然_モ圓}

頓_ノ教_ハ本_被凡夫_ニ若不_レ擬_シ凡_ニ佛何_ソ不_レ自住_ニ法性_ノ土_ニ以_テ法性_ノ身_ヲ爲_ニ諸_ノ菩薩_ノ說_中此圓頓_上何_ソ須_下與_ニ諸_ノ法身_ノ菩薩_ノ示_ニ於_レ凡身_ヲ現_中此_ニ三界_上耶。乃_至一_心在_レ凡_ニ即可_シ修習_ス已_ト。所_證己_心佛_身觀_一速_ニ成_佛也。故_ニ弘決_ニ又_云一切_ノ諸佛_由觀_下己_心不_レ異_ニ佛_心故_得成_佛已_上此_ヲ云_ク觀_心。實_ニ悟_ニ己_心佛_心一_心可_レ礙_ニ臨終_ヲ惡業_モ不_レ有_ル可_レ留_ニ生死_ニ妄念_モ不_レ有_ル。知_ニ一切_ノ法_ハ皆_是佛法_ニ可_シ教訓_ス善知識_モ不_レ可_レ入_ル。思_言言_ヒ爲_爲儀_儀行住坐臥_ノ四威儀_ノ所作_ハ皆_佛御_心和_合一體_{。無_レ過_モ無_レ障_モ自在_ノ身_ト成_ル此_ヲ云_ク自行_ト。如_ク此_自在_レ自行_ノ行_ヲ捨_テ不_レ有_ニ跡形_一無_明妄想_住僻_カ思_ノ心_ニ奉_レ背_キ三世_ノ諸佛_ノ教訓_ニ從_リ冥_キ入_リ冥_{永_ク背_キ佛法_ニ可_レ悲_ム可_レ悲_ム。只_今打_テ返_思直_悟返_即身_成佛_ハ無_レ我_身外_一知_{。我}心_鏡佛_心鏡_只雖_一鏡_ニ我_等向_レ裏_ニ不_レ見_我性_ノ理_故云_ク無_明。如_來向_レ面_見我_性ノ_理故_明無_明其_體只_一鏡_ハ雖_一鏡_ニ依_テ向_レ樣_ニ有_リ明_昧差別_{。鏡}雖_レ有_レ裏_{不_レ成}面_障只_依向_レ樣_ニ有_ニ得_失。二_{。相}即_融通_一法_ノ二_義。化_佗ノ_法門_ハ如_ク向_レ鏡_ノ裏_ニ自行_ノ觀_心如_ク向_レ鏡_ノ面_ニ化_佗ノ_時鏡_モ自行_ノ時_鏡我_心性_ノ鏡_ハ只_一無_替。鏡_ハ即_身向_レ面_ニ譬_ハ成佛_ノ向_レ裏_ニ譬_ハ衆生_ニ鏡_ニ有_レ裏_譬性_惡不_レ斷_向裏_ニ時_無二_面德_一譬_ハ化_佗ノ_功}}

德也。譬如衆生ノ佛性ノ不顯也。自行化佗得失力用。玄義ノ一ニ云ク如菩薩悉達變轉祖王ノ弓ヲ滿名ヲ爲力カト中ニ七鐵鼓ヲ貫キ一鐵圍山ヲ洞シ地ヲ徹上ニ水輪一名爲用也。諸ノ方便教ハ力用ノ微弱如凡夫ノ弓箭ノ何者昔ノ緣稟ニ化佗ノ二智ヲ照ス理ヲ不遍生信ヲ不深除疑ヲ不盡。今緣稟ニ自行ノ二智ヲ極ニ佛ノ境界ヲ起シ法界ノ信ヲ增シ圓妙ノ道ヲ斷ニ根本ノ惑ヲ損ニ變易ノ生ヲ。非但生身及ヒ生身得忍ノ兩種ノ菩薩俱益上法身ト法身後心ノ兩種ノ菩薩亦以俱益。化佗ノ功廣大ニ利潤弘深蓋茲ノ經之力用也。自行化佗力用勝劣分明勿論也能能見之ヲ一代聖教ヲ縣鏡ニ教相。極佛境界者十如是法門十界互具足十界十如ノ因果權實ノ二智二境有 myself 中一人無漏通達解了悟佛語一極起法界信者十法界爲體十法界爲心十法界爲形本覺ノ如來者有 myself 中ニ信。增圓妙道者自行化佗二相即圓融ノ法如珠光寶三德只一珠ノ德二片時不離佛法無不足一一生中成佛增慶喜之念。斷根本惑者覺一念無明ノ眠還本覺ノ寤生死涅槃俱如昨日之夢無跡形也。損變易生者同居土ノ極樂ト方便土ノ極樂ト實報土ノ極樂ト二土往生人。彼土修菩薩道欲成佛之間因ハ移果ハ易次第進昇經劫數待成佛遠云變易ノ生死也。

下位ヲ捨云レ死ト進ニ上位ニ云フ生ト如ク是ノ變易生死ハ淨土ノ苦惱有也。爰凡夫我等於此穢土ニ修二行法華十界互具法界一如。淨土ノ菩薩變易ノ生ハ損佛道ノ行ハ增變易ノ生死促一一生中成佛道。故生身及ヒ生身得忍ノ兩種ノ菩薩増道損生也。法身菩薩者捨生身一居實報土也。後心菩薩者等覺ノ菩薩但迹門生身及ヒ生身得忍ノ菩薩利益也本門法身後身菩薩利益。但今開於迹門攝於本門成二妙法。故以凡夫我等穢土ノ修行ノ力ヲ利益淨土ノ地覺菩薩行故化ノ功廣大。化佗ノ利潤弘深者自行圓頓ノ行者ハ自行化佗一法不漏一念具足。横遍十方方法界故弘豎互三世極法性淵底。故深也此經ノ自行力用如此。化佗ノ諸經ハ不具自行以鳥ノ片翼如不飛空故無成佛人。今法華經ハ開會自行化佗二行無不足故以鳥ノ二翼飛如無障成佛無滯。藥王品以十論判自行化佗力用勝劣。第一譬云諸經ハ如諸水ノ法華ハ如大海云云取意。實自行ノ法華經ノ大海入化佗ノ諸經ノ衆水ト晝夜不絶。雖入不増不減顯不可思議德用。諸經ノ衆水ハ片時ノ程無納ニ法華經ノ大海ヲ自行化佗勝劣如是以例諸上來譬論ハ皆佛ノ所說不入人ノ語。意得此旨一代聖教懸鏡無陰見此

文釋ヲ誰ノ人カ迷惑哉。三世諸佛ノ總勘文也敢テ不可引キ入ル人ノ會釋ヲ。三世諸佛ノ出世ノ本懷一切衆生成佛ノ直道。以テ四十二年ノ化佗ノ經ヲ所立宗宗ハ華嚴眞言達磨淨土法相三論律宗俱舍成實等諸宗也。此等ハ皆悉ク自リ法華已前ノ八教ノ中ノ教皆是方便兼但對帶ノ方便誘引也。三世諸佛ノ說教ノ次第糾ニ此次第談ニ法門一若違ニ次第非ニ佛法也。一代教主ノ釋迦如來モ糾ニ三世諸佛ノ說教ノ次第一若違ニ我モ亦如是。經ニ云ク如ク三世諸佛ノ說法之儀式一我モ亦如是ノ說ク無分別ノ法一已上。若違レ之ニ永ク背ク三世諸佛ノ本意。佗宗ノ祖師各立テ我宗ヲ諍ニ法華宗ト悞リ之中ノ悞迷之中ノ迷。微佗學ノ決ニ破レ之ヲ云ク山王院凡ソ八萬法藏統ニ其行相ヲ不出テ四教ヲ如ク頭邊ニ示一藏通別圓ハ即聲聞緣覺菩薩佛乘也。眞言禪門華嚴三論唯識律業成俱ニ二論等ノ能ト所ト教ト理ト爭過ニ此四ヲ。若言過者豈非外邪若言不出便問得佗所期ノ果也。然後ニ隨テ答ニ推徵極理。以テ我四教ノ行相一並檢決ニ定於彼所期之果。若與我違隨即詰之。且如華嚴ノ五教各各有修因向果。初中後ノ行不。一教一果合ニ是所期。若非藏通別圓之因與果者不。是佛教一耳。三種ノ法輪三時ノ教等就中可定汝以何者爲所期ノ乘。若言佛乘未見成佛之觀行。若言菩薩此

亦即離ノ中道ノ異也汝正ク取レ何。設取ニ離ノ邊ヲ無ニ果可成ス如要ニ即是例佛難之ヲ。謬誦眞言不。會ニ三觀一心ノ妙趣ヲ恐。同別人ニ不。證ニ妙理ヲ。所以ニ逐佗ノ所期之極ニ準レ理。我宗之可徵。因明ノ道理ハ與外道對多。在リ小乘及以別教。若望ニ法華華嚴涅槃等ノ經ニ接引門ノ權對機設。終ニ以テ引進也。令邪小之徒會。至中眞理也。所以論時存于四依擊目之志。莫執著之。又須將佗ノ義對檢自義。隨決中是非。上莫執怨之。大底佗ハ多ク在ニ三。先德大師ノ所判如是。是諸宗ノ所立懸鏡。無陰。末代ノ學者何。不。見之。妄判。教門。大綱。三教ヲ能可學。頓漸圓三教是一代聖教ノ總。三諦頓漸ノ二。四十二年ノ說圓教ノ一。八箇年ノ說也。合五十年。此外無法由何迷之。有衆生時此云三諦。成佛果時此云三身。一物異名也。說顯之云。一代聖教。開會之。成只一。總。三諦。時。成佛。此云。開會。此云。自行。又佗宗所立。宗宗者此總。三諦。分別爲八。各各依立。宗。闕。圓滿。理。無。成佛。理。是。故。餘宗無。實。佛。也。故。嫌。之。意。嫌。不足。也。取。圓。教。觀。一切諸法。圓融。圓滿。如。二十五。夜。月。無。不足。滿足。究竟。不。嫌。善。惡。不。撰。折。節。不。求。靜。處。不。擇。人。品。知。一切諸法。皆是佛法。通達諸法。即行非道。成佛道。故也。天地水火

風^ハ是五智ノ如來^{ナリ}住^ニ在^ン一切衆生ノ身心之中^ニ片時^モ無^レ離^ル故^ニ世間^ト與^ニ出世^ト和合^{シテ}有^ニ心中^ニ心外^ニ全^ク無^レ別^ノ法^〇故^ニ聞^ク之^ヲ時立^チ所^ニ速^ク成^ス佛果^一無^レ滯^リ道理^至極^也。總^ノ三諦^者譬^如三珠^ト光^ト寶^ト由^テ有^ル此^三德^ニ云^フ如意寶珠^ト故^ニ譬^フ總^ノ三諦^〇若^ク亦^レ珠^ノ三德^ヲ別^レ別^ニ取^リ放^者何^ノ用^不可^レ叶^フ。隔^別ノ方便^教ノ宗^宗亦^如是^ノ珠^譬法^身ニ光^譬報^身ニ寶^譬應^身ニ此^總ノ三德^ヲ分^別立^ル宗^ヲ嫌^フ不^足也^〇九^レ之^ヲ爲^レ一^ト云^フ總^ノ三諦^ト此^總ノ三身^即一^ノ本^覺ノ如來^〇又^寂光^譬鏡^ニ同^居ト方便^ト實^報ノ三^土遷^レ鏡^ニ譬^フ像^〇四^土一^土三^身一^佛今^ハ此^三身^ト四^土和^合佛^ノ一^體德^ニ云^フ寂^光佛^ト以^テ寂^光佛^ヲ爲^シ圓^教佛^ヲ以^テ圓^教佛^ヲ爲^シ寤^實佛^ト〇餘^ノ三^土佛^ハ夢^中權^佛此^ハ三^世諸^佛只^同語^ニ勘^文給^總教^相人^ノ語^モ不^レ入^ラ會^釋不^レ有^ラ若^違之^ニ奉^ル背^ニ三^世諸^佛大^罪人^也天^魔外^道永^ク背^ニ佛^法故^ニ秘^藏之^ヲ佗^人不^レ見^セ若^不秘^藏妄^披露^之佛^法無^ニ證^理二^世無^ニ冥^加謗^人出^來背^ニ三^世諸^佛故^ニ識^ル下^ニ二^人俱^ニ墮^中惡^道上^故誠^レ之^也〇能^能秘^藏深^ク證^シ此^理相^叶三^世諸^佛御^本意^ニ蒙^リ二^聖二^天十^羅刹^ノ擁^護無^レ滯^リ遂^ニ上^品寂^光往^生須^臾之^間還^リ來^テ九^界生^死夢^中遍^ニ身^ヲ十^方法^界國^土入^ニ心^ヲ一^切有^情身^中〇從^レ內^勤發^シ從^レ外^引導^シ內^外相^應因^緣和^合施^シ自^在

神通^ノ慈悲^ノ力^ヲ廣^ク利^ニ益^ス衆^生不^レ可^レ有^ル滯^リ〇三^世諸^佛此^一大^事因^緣思^食世^間出^現給^〇一^者中^道大^者華^嚴之^事者^假諦^ノ阿^含已^上一^代總^ノ三^諦也^〇悟^ル知^ル之^ヲ時^成佛^果一^故出^世本^懷成^佛直^道〇因^ト者^一切^衆生^ノ身^中有^ニ總^ノ三^諦常^住不^變此^ヲ總^ノ云^フ因^ト也^〇緣^者三^因佛^性雖^有不^レ值^ニ善^知識^ノ緣^ニ不^レ悟^ラ不^レ知^ラ不^レ顯^レ值^ニ善^知識^ノ緣^ニ必^顯故^ニ云^フ緣^ト也^〇然^今此^一大^事因^緣五^事和^合難^レ值^ニ善^知識^ノ緣^ニ顯^ニ五^佛性^ヲ有^ニ何^ノ滯^リ哉^〇春^ノ時^來值^ニ風^雨緣^ニ無^心草^木皆^悉萌^エ出^生華^敷榮^值世^氣色^也〇至^秋時^值月^光緣^ニ草^木皆^悉實^成熟^養育^シ一^切有^情續^ニ壽^命長^養〇終^ニ顯^ニ成^佛德^用可^レ有^ル疑^ヒ之^ヲ不^レ信^セ之^ヲ人^乎〇無^心草^木猶^以如^是何^況於^人倫^哉〇我^等雖^迷凡^夫有^ニ一^分心^モ有^レ解^分別^シ善^惡思^ヒ知^ル折^節〇然^被催^ニ宿^緣受^ニ生^ラ佛^法流^布國^土值^ニ善^知識^ノ緣^ニ分^別因^緣以^テ可^レ成^佛身^上〇雖^值善^知識^ニ猶^劣草^木不^レ顯^ニ身^中三^因佛^性一^默止^謂可^レ有^ル〇此^度必^覺生^死夢^ヲ還^テ本^覺寤^ニ可^レ切^ニ生^死繼^ラ〇自^リ今^已後^夢中^法門^不可^レ懸^心也^〇三^世諸^佛一^心和^合修^ニ行^シ妙^法蓮^華經^ヲ無^レ障^リ可^レ開^悟〇自^行化^佗一^教差^別懸^レ鏡^ニ無^レ陰^〇三^世諸^佛勘^文如^是可^レ秘^ス可^レ秘^ス〇

啓一五三 鈔一五一 註一五三六 語一五七
拾三三三 扶九三七 音下二五

弘安二年己卯十月 日

日 蓮花押

○上野殿御返事

啓三四一八 鈔三三四

語四四六

音下四〇

拾七三三

扶一三三三

唐土に龍門と申すたき(龍)あり。たかき事十丈水の下。ことかかんひやうがや
 (矢)をいをと(射落)すよりもはやし。このたきにをくのみな(鮎)あつまりて
 のぼらむと申す。ふなと申すいを(魚)ののぼりぬればりう(龍)となり候。百に
 一千に一萬に一十年二十年に一ものぼる事なし。或ははやさせ(急瀬)に
 かへり或ははし(鷲)たか(鷹)とび(鷗)ふくろう(梟)にくらわれ。或は十丁のたき
 の左右に漁人どもつらなりて。或はあみ(網)をかけ或はくみ(汲)とり或はい
 (射)てとるものもあり。いをのりうとなる事かくのごとし。日本國の武士の中
 に源平二家と申すて王の門守の犬二疋候。二家ともに王を守りてまつる事や
 まかつ(山人)が八月十五夜の月のみね(峰)よりいづるをあい(愛)するがごとし。
 でんじやう(殿上)のなんによ(男女)のあうぶをみては月と星とのひかりをあわ
 せたるを。木の上にてさる(猿)のあいするがごとし。かゝる身にてはあれど
 もいかんがして我等でんじやうのまじわ(交)りをなさんとねがいし程に。平

氏の中に貞盛と申せし者將門を打てありしかども昇でん(殿)をゆるされず。
 其子正盛又かなわす其子忠盛が時始て昇でんをゆるさる。其後清盛(重盛)
 等でんじやうにありふのみならず。月をうみ日をいたたくみ(身)となりなき。
 佛になるみちこれにをとるべからず。いをの龍門をのぼり地下の者のでんじ
 やうへまいるがごとし。身子と申せし人は佛にならむとて六十劫が間菩薩の
 行をみてしかども。こらへかねて二乗の道に入りなき。大通結縁の者三千塵
 點劫久遠下種の人の五百塵點劫 生死にしづみし。此等は法華經を行せし程
 に第六天の魔王 國主等の身に入るとかうわづら(願)はせしかばたい(退)して
 すてしゆへに。うこばくの劫に六道にはめぐりしづかし。かれは人の上(上)とこ
 ろみしかども今は我等み(身)にかかれり。願くは我弟子等大願ををこせ。去年
 去去年のやくびやうに死し人人のかずにも入らず。又當時蒙古のせめにまぬ
 かるべしともみへす。とにかくに死は一定なり。其時のなげきはたうじ(當時)
 のごとし。をなじくはかりにも法華經のゆへに命をすてよ。つゆ(露)を大海
 にあつらへちり(塵)を大地にうづむとをもへ。法華經第三云、願以此功德
 普及於一切我等與衆生皆共成佛道云云。恐恐謹言。

十一月六日

日 蓮花押

上野賢人殿御返事

此はあつわら(熱原)の事の。ありがたさに申御返事なり。

明治三十六年正月十四日富木大石寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ全章五紙ナリ猶興師ノ御
寫モアリ諸京都本國寺ニモ治部殿宛ノ同文アレトモ今且ク此ニ依ル(稲田海素慶記)

○富木殿女房尼御前御書 考八三六

いよ(伊豫)房は學生がくしやになりて候ず。つねに法門きかせ給へ。

はるかに見まいらせ候はねばをばつかなく候。たうじ(當時)とてもたのしき事は候はねどもむかしはことにわびし(不樂)く候し時よりやしなはれまいらせ候へば。ことにをんをもく(恩重)をもらいませ候。うれについてはいのちはつるかめ(鶴龜)のごとく。さいはい(幸福)は月のまさりしを(潮)のみつがごとくところ。法華經にはいのりまいらせ候へ。さてはいち(越)後房しもつけ(下野)房と申僧といよどのにつけて候ず。しばらくふびんにあたらせ給へとき(富木)殿には申させ給へ。

十一月二十五日

日 蓮花押

富城殿女房尼御前

明治三十五年四月十八日房州小港誕生寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ二枚續ノ横幅
ナリ(稲田海素慶記)

○中興入道消息 啓二八一 鈔一七五四 註一八三八 音下二四 語三三七 拾四三三 扶一〇四六

記上四六

鶯目一貫文送り給候畢。妙法蓮華經の御寶前に申上候畢。抑日本國と申國は須彌山よりは南一閻浮提の内縦廣七千由旬なり其内に八萬四千の國あり。所謂五天竺十六の大國五百の中國十千の小國無量の粟散國微塵の島島あり。此等の國國は皆大海の中にあつたとへば池にこのは(木葉)のちれるが如し。此日本國は大海の中の小島なりしほ(潮)みては見へずひ(干)ればすこしみゆるかの程にて候しを。神のつき出させ給て後人王のはじめ神武天皇と申せし大王をはしましき。うれよりこのかた三十餘代は佛と經と僧とはましまさずただ人と神とばかりなり。佛法をはしまさねば地獄もしらず淨土もねがはず。

父母兄弟のわかれ(別)ありしかどもいかなるらん。ただ露のきゆるやうに日月のかくれさせ給うやうにうちをもいてありけるが。然に人王第三十代欽明天皇と申す大王の御宇に。此國より戊亥の角に當りて百濟國と申す國あり。彼國よりせいめい(聖明)王と申せし王金銅の釋迦佛と此佛の説せ給へる一切經と申すふみ(文書)と此をよむ僧をわたしてありしかば。佛と申す物もいさ(生)たる物にもあらず。經と申す物も外典の文にもにず。僧と申す物も物はいへども道理もさこへず形も男女にもにざりしかば。かたがたあやしみをどろきて左右の大臣大王の御前にしてとから僉議ありしかども多分はもちうまじきにてありしかば。佛はすてられ僧はいましめられて候しほごに。用明天王の御子聖德太子と申せし人びだつ(敏達)二年二月十五日。東に向て南無釋迦牟尼佛と唱へて御舍利を御手より出さし給て。同六年に法華經を讀誦し給ふよりこのかた七百餘年王は六十餘代に及ぶまで。やうやく佛法ひろまり候て日本六十六箇國二の島にいたらぬ國もなし。國國郡郡郷郷里里村村に堂塔と申す寺と申す佛法の住所すでに十七萬一千三十七所なり。日月の如くあきらかなる智者代代に佛法をひろめ衆星のごとくかがやくけんじん(賢人)國國に

充滿せり。かの人人は自行には或は眞言を行じ。或は般若或は仁王或は阿彌陀佛の名號或は觀音或は地藏或は三千佛或は法華經讀誦しをるとは申すども。無智の道俗をすゝむるにはただ南無阿彌陀佛と申すべし。譬ば女人の幼子をまうけたるに或はほり(無)或はかわ(河)或はひとり(獨)なるには。母よ母よと申せばさきつけぬればかならず佗事をすててたすくる習となり。阿彌陀佛も又如是、我等は幼子なり阿彌陀佛は母なり。地獄のあな餓鬼のほりなごにをち入ぬれば。南無阿彌陀佛と申せば音と響との如く必來りてすくひ給なりと一切の智人ども教へ給しかば。我日本國かく申すならばして年ひさしくなり候。然に日蓮は中國都の者にもあらず邊國の將軍等の子息にもあらず遠國の者民が子にて候しかば。日本國七百餘年に一人もいまだ唱へまいらせ候はぬ南無妙法蓮華經と唱候のみならず。皆人の父母のごとく日月の如く主君の如くわたり(渡)に船の如く渴して水のごとくうゑて飯の如く思て候。南無阿彌陀佛を無間地獄の業なりと申候ゆへに。食に石をたひ(炊)たる様にかんせき(巖石)に馬のはねたるやうに渡りに大風の吹來たるやうにじゆらく(聚落)に大火のつきたるやうに。俄にかたきのよせたるやうにとわりのきさ

き(后)になるやうにをどろきうねみねたみ候ゆへに。去^ス建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで二十七年が間退轉なく申^ツつより候事。月のみつるがどとくしほのさすがどくははじめは日蓮只一人唱へ候しほに。見^ル人値^フ人聞^ク人耳をふさぎ眼をいからかし口をひろめ手をにぎりはをかみ。父母兄弟師匠せんう(善友)もかたきとなる後には所の地頭領家かたきとなる。後には一國さはぎ後には萬人をどろくほに。或は人の口まねをして南無妙法蓮華經ととなへ或は悪口のためにとなへ。或は信するに似て唱へ或はうしるに似て唱へなんどする程に。すでに日本國十分が一分は一向南無妙法蓮華經のこりの九分は或は兩方或はうたがひ或は一向念佛者なる者は。父母のかたき主君のかたき宿世のかたきのやうにのしる。村主郷主國主等は謀叛の者のごとくあだまれたり。かくの如く申^ス程に大海の浮木の風に隨^ヒて定^メなきが如く輕毛の虚空にのぼりて上下するが如く日本國ををはれあるく程に。或時はうたれ或時はいましめられ或時は疵をかほふり或時は遠流。或時は弟子をころされ或時はうちをはれなんどする程に。去^ル文永八年九月十二日には御かんき(勘氣)をかほりて北國佐渡の島にうつ(遷)されて候しなり。世間には一

分のどがもなかりし身なれども。故^ニ最明寺入道殿極樂寺入道殿を地獄に墮^ラたりと申^ス法師なれば謀叛の者にもすぎたりとて。相州鎌倉龍ノ口と申^ス處にて頸を切^ラんとし候しが。科^トは大科なれども法華經の行者なれば左右なくうしなひなはいかんがとやをもはれけん。又遠國の島にすてをき(捨置)たるなちばいかにもなれかし。上^ニにくまれたる上萬民も父母のかたきのやうにたもひたれば。道にても又國にても若はころすか若はかつねしぬ(餓死)るかにならんすらんとあてがはれて有^リしに。法華經十羅刹の御めぐみ(惠)にやありけん。或は天とが(失)なきよしを御らんするにやありけん。島にてあだむ者は多かりしかども中興^ニの次郎入道と申せし老人ありき。彼人は年ふりたる上心かしく身もたのし(樂)くて國の人にも人ともはれたりし人の。此御房はゆへある人にやと申^スけるかのゆへに。子息等もいたうもにく(甚憎)ます。其已下の者どもたいし(大旨)彼等の人人の下人にてありしかば内内あやまつ事もなく唯^ニ上の御計のまゝにてありし程に。水は濁れども又すみ月は雲かくせども又はるることほりなれば。科^トなき事すでにあらわれているし事もひなしからざりけるかのゆへに。御一門諸大名はゆる(許)すべからざるよし申

されけれども。相摸守殿の御計ひばかりにてついにゆりて候てのば(登)りぬ。ただし日蓮は日本國には第一の忠の者なり肩をならぶる人は先代にもあるべからず後代にもあるべしとも覺わす。其故は去正嘉年中の大地震文永元年の大長星の時。内外の智人其故をうらなひ(占考)しかどもなにのゆへいかなる事の出來すべしと申事をしらざりしに。日蓮一切經藏に入りて勘へたるに。眞言禪宗念佛律等の權小の人人をもつて法華經をかるしめたてまつる故に。梵天帝釋の御どがめにて西なる國に仰付て日本國をせむ(政)べしとかんがへて故最明寺入道殿にまいらせ候き。此事を諸道の者をこつきわらひ(嘲笑)し程に。九箇年すぎて去文永五年に大蒙古國より日本國ををろ(襲)うべきよし牒狀(ていじょう)わたりぬ。此事のあふ(合)故に念佛者眞言師等あだみて失はんとせしなり。例せば漢土に玄宗皇帝と申せし御門の御后に上陽人と申せし美人あり。天下第一の美人にてありしかば楊貴妃と申ささきの御らんじて。此人王へまいるならば我がを殺へ(寵)をとりなんとて宣言なりと申かすめて。父母兄弟をば或はながし或は殺し上陽人をばらう(牢)に入て四十年までせめたりしなり。此もろれにて候。日蓮が勘文あらわれて大蒙古國を調伏し日本國かつなら

ば此法師は日本第一の僧となりなん。我等が威徳をとろうべしと思かゆへに讒言をなすをばしろしめさずして。彼等がことばを用て國を亡さんとせらるるなり。例せば二世王は趙高が讒言によりて李斯を失ひかへりて趙高が爲に身をほろぼされ。延喜の御門はしへい(時平)のをとど(大臣)の讒言によりて菅丞相を失て地獄にわち給ぬ。此も又かくの如し。法華經のかたきたる眞言師禪宗律僧持齋念佛者等が申事を御用とありて日蓮をあだみ給ゆへに。日蓮はいやし(暇)けれども所持の法華經を釋迦多寶十方の諸佛梵天帝釋日月四天龍神天照太神八幡大菩薩。人の眼をれしむ(惜)がごとく諸天の帝釋をまやまら(敬)がごとく母の子を愛するがごとくまほりれもん(守重)と給ゆへに。法華經の行者をあだむ人を罰し給事父母のかたきよりも朝敵よりも重く大科に行ひ給なり。然に貴邊は故次郎入道殿の御子にてをばするなり御前は又よめ(嫁)なり。いみじく心かしてかりし人の子とよめとにをばすればや。故入道殿のあとをつぎ國主も御用なき法華經を御用あるのみならず。法華經の行者をやしな(養)はせ給てとし(年)に千里の道をれく(送)りむか(迎)へ。去ぬる幼子のむすめ(娘)御前の十三年に丈六のうとば(室堵波)

をたてて其面に南無妙法蓮華經の七字を顯してをはしませば。北風吹は南海のいろくづ(魚族)其風にあたりて大海の苦をはなれ。東風きたれば西山の鳥鹿其風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生れん。況やかのろとばに隨喜をなし手をふれ眼に見まいらせ候人類をや。過去の父母も彼ろとばの功德によりて天の日月の如く淨土をてらし。孝養の人並に妻子は現世には壽を百二十年持て後生には父母とともに靈山淨土にまいり給はん事。水すめば月うつりつづみ(鼓)をうて(打)ばひびき(響)のあるがごとしとをばしめし候へ等云云。此より後後の御ろとばにも法華經の題目を顯し給へ。

弘安二年己卯十一月卅日

中興入道殿女房

身延山 日 蓮花押

高祖遺文録卷之二十八

○右衛門太夫殿御返事 考八三七

抑久不ニ申承候之處御文到來候畢。殊にあをきうら(青裏)の小袖一ばらし(帽子)一ッをび一すぢ(鷲目)一貫文くり(栗)一籠たしかにうけとりまいらせ候。當今は末法の始の五百年に當りて候。かゝる時刻に上行菩薩御出現あつて南無妙法蓮華經の五字を日本國の一切衆生にさづけ給べきよし經文分明也。又流罪死罪に行はるべきよし明かなり。日蓮は上行菩薩の御使にも似たり此法門を弘る故に。神力品云々如日月ノ光明ノ能除諸ノ幽冥斯ノ人行世間ニ能滅ニ衆生ノ闇等云云。此經文に斯人行世間の五の文字の中の人の文字をば誰とか思食す。上行菩薩の再誕の人なるべしと覺たり。經云於我滅度ノ後ニ應ニ受ニ持ス經ヲ是ノ人於テ佛道ニ決定無有疑云云。貴邊も上行菩薩の化儀をたすくる人なるべし。

弘安二年己卯十二月三日

右衛門太夫殿御返事

日 蓮花押

○窪尼御前御返事 考三三

十字五十まい(枚)くしがき(串柿)一れん(連)あめをけ(輪桶)一送り給(送)給(給)御心ざしとさざさかさつくしてふで(筆)もつひゆびもたたぬ。三千大千世界に七日ふる雨のかずはかずへつくしてん。十方世界の大地のちりは知(知)人もありなん。法華經一字供養の功德は知(知)りたしとて佛はとかせ給(給)て候へ。此をもて御心へあるべし。恐恐謹言。

十二月二十七日

日 蓮花押

くぼの尼御前御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海業記)

○出家功德御書 徴下二 考八三五

近日誰やらん承(承)て申(申)候は。内内還俗(げんずく)の心中出來候由風聞候ひけるは。實事(まこと)にてや候らん虚事(うそこと)にてや候らん。心元(こころもと)なく候間一筆令(しるし)啓(せ)候。凡(まづ)父母の家を出(で)て僧(そう)となる事は必(かならず)父母を助(たす)る道(みち)にて候也。出家功德經(しゅつがくごんとくぎょう)云(い)ふ、高(たか)三十三天(てん)に百千(ひやくせん)の塔婆(たつば)を立(た)てるよりも一日(いちにち)出家(しゅつがく)の功德(ごんとく)は勝(か)れたりと。されば其身(そのみ)は

無智無行にもあれかみ(髪)をり(剃)り袈裟(けさ)をかくる形(かたち)には天魔(てんま)も恐(おそ)をなすと見(み)たり。大集經(だいじつぎょう)云(い)ふ、剃(し)頭(とう)著(しやく)袈裟(けさ)持(ぢ)戒(がい)及(及び)毀(くわい)戒(がい)天人(てんじん)可(べ)し供養(くうやう)ス則(すなは)ち爲(な)る供(く)養(やう)佛(ぶつ)云(い)ふ。又一(また)經(ぎょう)の文(ぶん)に有人(あるひと)海邊(かいべん)をとをる一人(ひとり)の餓鬼(がき)あつて喜(よろこ)び踊(おど)れり。其(その)功(こう)徳(とく)にひかれて出(で)離(り)生死(じふじ)せん事(こと)喜(よろこ)ばしきなりと答(こた)へたり。されば出家(しゅつがく)と成(な)る事(こと)は我(われ)身(み)助(たす)るのみならず親(おや)をも助(たす)け土無量(どむりやう)の父母(ふぼ)まで助(たす)かる功(こう)徳(とく)あり。されば人身(じんしん)をうてること難(がた)く人身(じんしん)をうけても出家(しゅつがく)と成(な)ること尤(なほ)も難(がた)し。然(しか)るに惡縁(あくえん)にあふて還俗(げんずく)の念(ねん)起(おこ)る事(こと)淺(あは)ましき次第(しだい)也(なり)金(かね)を捨(す)て石(いし)をとり藥(くすり)を捨(す)て毒(どく)をとるが如(ごと)し。我(われ)身(み)惡道(あくだう)に墮(お)つるのみならず六親眷屬(ろくしんけんじやく)をも惡道(あくだう)に引(ひ)かん事(こと)不(ふ)便(べん)の至(いた)極(ごく)也(なり)。其上(そのかみ)在(あ)る家の世(よ)を渡(わた)る辛(くるしみ)勞(うづ)方(かた)ならずやがて必(かならず)後悔(こうご)あるべし。只(ただ)親(おや)のなされたる如(ごと)く道(みち)をちがへず出家(しゅつがく)にてあるべし。道(みち)を違(ちが)へずば十羅刹女(じゆらしゃくにょ)の御守(ごしゆ)堅(かた)かるべし。道(みち)をちがへたる者(もの)をば神(かみ)も捨(す)てさせ給(たま)へる理(ことば)にて候也。大勢至經(だいせいしぎょう)云(い)ふ、衆生(しゆじやう)有(あ)り五(ご)失(しつ)一(いつ)必(かならず)墮(お)惡道(あくだう)ニ出家(しゅつがく)還俗(げんずく)ノ失(しつ)。又(また)云(い)ふ、出家(しゅつがく)還俗(げんずく)ハ者(もの)其(その)失(しつ)過(か)五(ご)逆(ぎやく)ニ文(ぶん)。五(ご)逆(ぎやく)罪(つみ)と申(まを)すは父(ちち)を殺(ころ)し母(はは)を殺(ころ)し佛(ぶつ)打(うち)奉(ほう)りなんどする大(おほ)なる失(しつ)を五(ご)聚(く)めて五(ご)逆(ぎやく)罪(つみ)と云(い)ふ也(なり)。されば此(こゝろ)五(ご)逆(ぎやく)罪(つみ)の人は一中劫(いちじゆく)の間(ま)無(な)間(ま)地(ぢ)獄(ごく)に墮(お)つて浮(う)ぶ事(こと)なしと見(み)たり。

然るに今宿善薰發して出家せる人の還俗の心付キて落ツるならば。彼の五逆罪の人よりも罪深くして大地獄に墮ツべしと申ス經文也。能レ此文を御覽ヒて思案あるべし。我身は天よりもふらず地よりも出デず父母の肉身を分ワたる身也。我身を損ずるは父母の身を損ずる也。此道理を辨ヘて親の命タマヒに隨フを孝行と云フ親の命タマヒに背クを不孝と申ス也。所詮心は兎も角も起レ身をば教の如ク一期出家にてあらば自ら冥加も有ルべし。此理ことわりに背キて還俗せば佛天の御罰を蒙り現世には淺マしくなりはて後生には三惡道に墮チぬべし。能レ思案あるべし。身は無智無行にもあれ形かたち出家にてあらば里にも喜ビ某われも祝しうちやく著たるべし。況や能キ僧にて候はんをや。委細の趣キ期ニ後音ヲ候。

弘安二年五月 日

蓮花押

○上野殿御返事

十字六十枚 清酒一筒 薯蕷五十本 柑子二十 串柿一連送リ給ヒ候畢。法華經、御寶前にかざり進ラせ候。春、始ニ三日種種の物法華經、御寶前ニ捧ケ候畢。花は開テて果このみとなり月は出テて必スすみち燈は油をさせば光を増し草木は雨ふれ

ばさかう人は善根をなせば必スさかう。其上元三の御志元一にも超ヘ。十字の餅もち満月の如し。事事又又可ク申ス候。

弘安三年庚辰正月十一日

日 蓮花押

上野殿

○秋元御書 啓二九四一 鈔一八三三 語三四六 記下 拾五三七 扶一一七
筒御器一具 付三十 竝ニ蓋ニ 送リ給ヒ候畢。御器と申スはうつはものと讀ヒ候。大地くばければ水たまる青天淨ければ月澄メり。月出テぬれば水淨し雨降レば草木昌へたり。器は大地のくぼきが如し水たまるは池に水の入ルが如し。月の影を浮ブるは法華經の我等が身に入ラせ給フが如し。器に四の失たがあり一には覆フと申シてうつふける也。又はくつがへす又は蓋ふたをたはふ也。二には漏ると申シて水もる也。三には汗あせと申シてけがれたる也水淨けれども糞の入リたる器の水をば用ユる事なし。四には雜ざ也飯に或は糞或は石或は沙或は土などを雜まじへぬれば人食ク事なし。器は我等が身心を表す。我等が心は器の如し口も器耳も器なり。法華經と申スは佛の智慧の法水を我等が心に入レぬれば。或は打チ返し或

は耳に聞カとと左右の手を二つの耳に覆ひ或は口に唱へじと吐キ出タしぬ譬ば器を覆するが如し。或は少し信する様なれども又惡縁に値つて信心うすくなり或は打チ捨テ。或は信する日はあれども捨ッる月もあり是は水の漏が如し。或は法華經を行する人の一口は南無妙法蓮華經一口は南無阿彌陀佛なんど申ハ。飯に糞を雜へ沙石を入れたるが如し。法華經の文に但樂ヲ受ニ持大乗經典ヲ乃至不レ受ニ餘經ノ一偈ニ等と説クは是也。世間の學匠は法華經に餘行を雜へても苦しからずと思へり。日蓮もさこころ思候へども經文は不爾。譬ば後の天王の種子を妊めるが又民とどつげば王種と民種と雜て。天の加護と氏神の守護とに被レ捨テ其國破るる縁となる。父二人出來れば王にもあらず民にもあらず人非人也。法華經の大事と申ハ是也。種熟脱の法門法華經の肝心也三世十方の佛は必妙法蓮華經の五字を種として佛に成リ給へり。南無阿彌陀佛は佛種にはあらず眞言五戒等も種ならず。能能此事を習ヒ給へし是は雜也。此覆漏汗雜の四の失を離して候器をば完器と申してまた器也。壺つゝみ(堤漏らざれば水失事なし。信心のこゝろ全ければ平等大慧の智水乾く事なし。今此筒の御器は固く厚く候上漆淨く候へば。法華經之御信力の堅固なる事を顯し給フ歟。毗沙門天は佛に四つの鉢を進ラせて四天下第一の福天と云はれ給ふ。淨徳夫人は雲雷音王佛に入萬四千の鉢を供養し進ラせて妙音菩薩と成リ給ふ。今法華經に筒御器三十蓋六十進ラせて爭か佛に成らせ給はざるなき。抑モ日本國と申ハ十の名あり扶桑野馬臺水穗秋津洲等也。別しては六十六箇國島二長三千餘里廣不定也或ハ百里或ハ五百里等。五畿七道郡五百八十六郷三千七百二十九田代。上田一萬一千一百二十町乃奎凡十九萬五千五百六十七町。人數八萬九千六百五十八人也。神社三千一百三十三社寺一萬一千三十七所。男十九億九萬四千八百二十八人女二十九億九萬四千八百三十三人也。其男の中に只日蓮第一の者也。何事の第一と云らば男女に被レ惡タル第一の者也。其故は日本國に國多く人多と云へども其心一同に南無阿彌陀佛を口ずさみとす阿彌陀佛を本尊とし九方を嫌て西方を願フ。設法華經を行する人も眞言を行ふ人も戒を持つ者も智者も愚人も餘行を傍として念佛を正とし罪を消さん謀は名號也。故に或は六萬八萬四十八萬返或は十返百返千返也。而ルを日蓮一人阿彌陀佛は無間の業。禪宗は天魔の所爲眞言は亡國の惡法。律宗持齋等は國賊也と申故に。自王一人至三下萬民

父母の敵^キ宿世の敵^キ謀叛夜討強盜よりも或は畏^レ或は瞞^リ或は言^リ或は打^ツ。是を警^ル者には所領を興へ是を讃^ムる者をば其内を出^タし或は過料^{を引カセ}。殺害したる者をば褒美^{なんどせ}らるる上^{うへ}兩度まで御勘氣を蒙^レり。當世第一の不思議の者たるのみならず。人王九十代佛法渡^リては七百餘年なれどもかゝる不思議の者なし。日蓮は文永の大彗星の如し日本國に昔より無き天變也。日蓮は正嘉の大地震の如し秋津洲に始^メての地天也。日本國に代始^メてより已に謀叛の者二十六人。第一は大山の王子 第二は大石の山丸 乃至第二十五人は頼朝第二十六人は義時也。二十四人は奉^リ被^レ責^レ朝^ニ獄門に被^レ懸^ク首^ヲ山野に曝^ス骸^ハ二人は奉^リ傾^ク王位^ヲ國中を拳^ニ手^ニ王法既に盡^キぬ。此等の人人も日蓮が不^レ過^キ被^レ惡^ニ萬人^ニ。尋^ニ其由^ヲ法華經には最第一の文あり然を弘法大師は法華最第一 慈覺大師は法華最第二 智證大師は如^シ慈覺^ヲ。今叡山東寺園城寺之諸僧法華經に向^テては法華最第一と讀^ムども其義をば第二第三と讀^ム也。公家と武家とは子細は知^シしめさねども御歸依の高僧等皆此義なれば師檀^ニ同の義也。其外禪宗は教外別傳^ニ云云法華經を蔑如する言也。念佛宗は千中無^ク未有一人得者と申す心は法華經を念佛に對して擧^ケて失ふ義也。律宗は小乘也 正法の時すら佛免^シ給^フ事なし況や末法に是を行^ヒて國主を誑惑し奉るをや。姐己妹喜 褒似之^ニ三女が三王を誑^ラかして代を失^ヒしが如し。かゝる惡法國に流布して法華經を失^フ故に。安徳 尊成等の大王 天照太神 正八幡に被^レ捨^テ給^フて。或は海に沈み或は島に被^レ放^ッ給^フ相傳の所從等に被^レ傾^ク給^フしは天に捨^テられさせ給^フ故^ヲかし。法華經の御敵を御歸依有^リしかども是を知^ル人なければ其失^トを知^ル事もなし。智人^ハ知^リ起^テ蛇^ハ自識^ル蛇^ヲ是也。日蓮は非^レ智人^ニ蛇は龍の心を知り鳥の世の吉凶を計るが如し此事計^リを勘^ヘ得て候也。此事を申^スならば須臾に可^シ當^ル失^ニ不^レ申^ツ又大阿鼻地獄に墮^ッべし。法華經を習^フには有三義^ニ一には誘人 勝意比丘 苦岸比丘 無垢論師 大慢婆羅門等が如し。彼等は三衣を纏^ヒ身^ニ一鉢を當^テ眼^ニ二百五十戒を堅^ク持^テて而大乘の讎敵と成^リて無間大城に墮^チにき。今日本國の弘法慈覺智證等は持戒は如^シ彼等^カ智慧は又彼比丘に不^レ異^{ナラ}。但大日經眞言第一法華經第二第三と申^ス事百千に^ハ日蓮が申^ス様ならば無間大城にやねはすらん。此事は申^スも恐^レあり増^シて書^キ付^キまは如何と思^ヒ候へども。法華經最第一と被^テ說候に是を二三等と讀^ムん人を聞^キて恐^レ人^ヲ恐^レ國^ヲ不^レ申^ツ即是彼怨と申^シて。一切衆生の大怨敵なるべき由經と

釋とにのせられて候へば申候也。不_レ恐_レ人_ヲ不_レ憚_レ代_ラ云_フ事我_不愛_身命_但惜_無上_道と申_スは是_也。不_レ輕_{菩薩}の惡_口杖_石も非_ニ佗_事ニ非_ニ不_レ恐_ニ世_間唯_法華_經の責_の苦_なれば也。例せば祐_成時_宗が_大將_殿の陳_の内_を簡_ざりしは敵_の戀_{しく}恥_の悲_しかりし故_不かし。此は謗_人也。謗_家と申_スは都_て一期_の間_法華_經を不_レ謗_書夜_十二_時に行_ずれども謗_家に生_ぬれば必_無間_地獄_に墮_つ。例せば勝_意比_丘若_岸比_丘之_家に生_て或_は弟_子と成_り或_は檀_那と成_り者共_が心_{なら}ず無_間地_獄に墮_つたる是_也。譬_は義_盛が_方の者_軍をせし者はさて置_キぬ腹_{の内}に有_し子_も産_を不_レ被_レ待_母の腹_を如_レ被_レ裂_カ。今日_蓮が申_ス弘_法慈_覺智_證の三_大師_の法_華經_を正_く無_明の邊_域虛_妄の法_と被_テ書_カ候_は。若_法華_經の文_實なれば叡_山東_寺園_城寺_七大_寺日_本一_萬一_千三_十七_所之_寺寺_の僧_は如_何が候_{はん}ずらん。先_例の如_くならば無_間大_城無_レ疑_也。是_は謗_家也。謗_國と申_スは謗_法の者_其國_{に住}すれば其_一國_皆無_間大_城なる也。大海_へは一切_の水_集り其_國は一切_の禍_集る譬_は山_に草_木の滋_が如_し。三_災月_月に重_{なり}り七_難日_日に來_る。飢_渴發_{れば}其_國餓_鬼道_と變_じ疫_病重_{なれば}其_國地_獄道_{となる}軍_起れば其_國脩_羅道_と變_ず。父_母兄_弟姉_妹を簡_ばず妻_{とし}夫_と憑_ば

其_國畜_生道_{となる}。死_{して}三_惡道_に墮_つにはあらず現_身に其_國四_惡道_と變_ずる也。此_を謗_國と申_ス。例せば大_莊嚴_佛の末_法師_子音_王佛_の濁_世の人人_の如_し。又_報恩_經に説_{かれて}候_が如_きんば過_去せる父_母兄_弟姉_妹一切_{の人}死_{せる}を食_し又_生たるを食_す。今日_{日本}亦_復如_し是_は眞_言師_禪宗_持齋_等人_を食_{する}者_國中_に充_滿せり。是_偏に眞_言の邪_法より事_起れり。龍_象房_が人_を食_しは萬_が一_顯たる也。彼_に習_て人_の肉_を或_は猪_鹿に交_へ或_は魚_鳥に切_雜へ或_はた_き加_へ或_はす_じと_{して}賣_る。食_{する}者_不知_ラ數_皆天_に捨_テられ_守護_の善_神に放_{され}たるが故_也。結_句は此_國佗_國より責_{られ}自_國とし打_テして此_國變_じて無_間地_獄と成_つ。日_蓮此_大なる失_を兼_て見_し故_に。與_同罪_の失_を脱_{れん}が爲_め佛_の呵_責を思_フ故_に知_恩報_恩の爲_め國_の恩_を報_{せん}と思_て國_主並_に一切_衆生_に令_テ告_知也。不_殺生_戒と申_スは一切_の諸_戒の中_の第一_也。五_戒の初_{にも}不_殺生_戒八_戒十_戒二百_{五十}戒五_百戒梵_網の十_重禁_戒華_嚴の十_無盡_戒瓔_珞經_の十_戒等_の初_{には}皆_不殺_生戒_也。儒_家の三_千禁_{の中}にも大_辟こ_る第一_{にて}候_へ。其_故は徧_滿三_千界_無有_直身_命と申_て三_千世_界に滿_る珍_寶なれども命_に替_る事_はなし。蟻_子を殺_ス者_尙地_獄に墮_つ況_魚鳥_等をや青_艸を

切者猶地獄に墮つ況死骸を切る者をや。如是ノ重戒なれども法華經の敵に成れば此を害するは第一の功德と説給つ也。況や供養を可展哉。故に仙豫國王は五百人之法師を殺し覺徳比丘は殺し無量之謗法者ヲ阿育大王は十萬八千の外道を殺し給ひき。此等の國王比丘等は閻浮第一之賢王持戒第一之智者也。仙豫國王は釋迦佛 覺徳比丘は迦葉佛 阿育大王は得道の仁也。今日本國も又如是ノ持戒破戒無戒王臣萬民を不_レ論_キ一同の法華經誹謗之國也。設身の皮_ハは_レぎ(剝)て法華經を奉_リ書_キ肉を積_シて供養し給_フとも必國も滅_ビ身も地獄に墮_リ給_ヘべき大なる科あり。唯眞言宗念佛宗禪宗持齋等の身と禁_シて法華經によせよ。天台六十卷を空に浮_テ國主等には智人と被_リ思_ハ人人の或は智の不及_ハ歟或は知れども世を恐るる歟の故に。或は眞言宗をほめ或は念佛禪律等に同すれば彼等が大科には百千超_テ候。例せば成良 義村等が如し。慈恩大師は玄贊十卷を造_リて法華經を讚_テ地獄に墮_ツ。此人は太宗皇帝の御師 玄奘三藏の上足 十一面觀音の後身と申_スが如し。音は法華經に似たれども心は爾前の經に同する故也。嘉祥大師は法華玄十卷を造_リて既に無間地獄に墮_ツべかりしが。法華經を讀_ミ事を打_チ捨_テて天台大師に仕_シしかば地獄の苦を脱れ給_ヒき。今

法華宗の人人も又如是_ノ。比叡山は法華經の御住所日本國は一乘の御所領也。而_レを慈覺大師は法華經の座主を奪_ヒ取_リて眞言の座主となし三千の大衆も又其所從と成_リぬ。弘法大師は法華宗の檀那にて御坐ます嵯峨の天皇を奪_ヒ取_リて内裏を眞言宗の寺と成せり。安徳天皇は明雲座主を師として頼朝の朝臣を調伏せさせ給_フ程に。右大將殿に被_リ罰_セのみならず安徳は西海に沈み明雲は義仲に殺され給_ヒき。尊成王は天台座主慈圓僧正。東寺御室竝に四十一人之高僧等を奉請_シ下_シ内裏に大壇を立て義時右京權_ノ太夫殿を調伏せし程に。七日と申せし六月十四日に洛陽破_リて王は隱岐國或は佐渡ノ島に被_リ遷_ラ座主御室は或は被_リ責_メ或は思_ヒ死_ニ給_ヒき。世間の人人此根源を知_ル事なし此_レ偏に法華經大日經之勝劣に迷_ル故也。今も又日本國 大蒙古國の責_メを得て彼不吉の法を以て御調伏を被_リ行_ハ承_ルる又日記分明也。此事を知らん人爭_ヒ可_キ不_レ歎_カ。悲_シ哉我等誹謗正法の國に生_テ大苦に値_ハん事よ。設_シ謗身は脱_ルると云_フとも謗家謗國の失如何せん。謗家の失を脱_レんと思はば父母兄弟等に此事を語_リ申せ。或は被_リ惡_メ歟或は信_セさせまいらする歟。謗國之失を脱_レんと思はば國主を諫曉し奉_リて死罪歟流罪歟に可_キ被_リ行_ハ也。我不愛身命但惜無

も來らぬ上雪深しして道塞がり問、人もなき處なれば現在に八寒地獄の業を身につくのへり。生きたがら佛には成せずして又寒苦鳥と申、鳥にも相似たり。頭は刺事なければうづら(鶴)の如し衣は氷にとぢられて鴛鴦の羽を氷の結べるが如し。かゝる處へは古へ昵びし人も不問、弟子等にも捨られて候つるに。此御器を給て雪を盛つて飯と觀じ水を飲てこんず(漿)と思ふ。志のゆく所思遣せ給へ。又又可申候。恐恐謹言。

弘安三年正月二十七日

日蓮花押

秋元太郎兵衛殿 御返事

○慈覺大師事 啓三〇五五 鈔一九一 語三五五 音下三〇 拾五四九 扶十一五〇
驚眼三貫絹袈裟一帖給候畢。法門ノ事、秋元太郎兵衛尉殿ノ御返事ニ少少注シて候御覽有ルべく候。なによりも難キ受ケ人身難キ値ヒ佛法に値ヒて候に。五尺の身に一尺の面あり其面の中三寸の眼二ツあり。自ニ一歳ニ及ニ六十二で多クの物を見る中に悦事ハ法華最第一の經文なり。あさましき事は慈覺大師の金剛頂經の頂の字を釋云、所ノ言フ頂者於テ諸ノ大乘ノ法ノ中ニ最勝無過上故ニ以テ頂名

之ニ乃至如シ人之身ノ頂最モ爲勝。乃至法華ニ云、是法住法位今正顯ニ說ス此祕密ノ理ヲ故ニ云フ金剛頂ト也云云。又云ク如ク金剛ハ寶ノ中之寶ニ此經モ亦爾、諸ノ經法ノ中ニ最爲第一ニ三世ノ如來ノ髻ノ中ノ寶故ニ等云云。此釋の心は法華最第一の經文を獲取して金剛頂經に付のみならず。如人之身頂最爲勝の釋の心は法華經の頭を切て眞言經の頂とせり。此即鶴の頸を切テ蝦の頸に付、歟眞言の蟻も死ぬ法華經の鶴の御頸も切れぬ見候。此こり人身うけたる眼の不思議にては候へ。三千年に一度花開なる優曇花ハ轉輪聖王此を見る。究竟圓滿の佛にならざらんより外は法華經の御敵は見しらさん(不知)なり。一乗のかたき夢のごとく勘へ出候。慈覺大師の御はか(墓)はいづれのところにも有と申事さこへず候。世間に云フ御頭は出羽ノ國立石寺に有云云いかにも此事は頭と身とは別の所に有ルカ。明雲座主は義仲に頭を切たり。天台座主を見候へば傳教大師はさてをさまいらせ候ぬ。第一義眞第二圓澄此兩人は法華經を正とし眞言を傍とせり。第三の座主慈覺大師は眞言を正とし法華經を傍とせり其已後代代の座主は相論にて思定まる事無し。第五十五並に五十七の二代は明雲大僧正座主なり。此座主は安元三年五月日院勘を蒙りて伊豆ノ國へ配

流。山僧大津にて奪^{リテ}取後治承三年十一月に座主となりて源ノ右將軍頼朝^{ヨリシロ}調伏せし程に。壽永二年十一月十九日義仲に打^{タレ}させ給^ル。此人生^{いけ}ると死^{しぬ}と二度大難に値^{あは}り。生の難は佛法の定例 聖賢の御繁盛の花なり死の後ノ恥辱は悪人愚人誹謗正法の人招^ヲわざはいなり。所謂大慢ばら門 須利等也。粗^ぼ此を勘^へたるに明雲より一向に真言ノ座主となりて後 今三十餘代一百餘年が間。一向真言ノ座主にて法華經の所領を奪^へるなり。しかれば此等ノ人人は釋迦多寶十方の諸佛の大怨敵。梵^んしやく(釋)日月四天天照太神正八幡大菩薩の御讎敵なりと見候^へず。我弟子等此旨を存^{シテ}法門を案^シ給^{ベシ}。恐恐。

正月二十七日

日 蓮花押

太田入道殿御返事

明治三十五年三月二十七日下總正中山ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉^ル但シ此章全紙十三丁百十行ナリ(稻田海峯記)

○日住禪門御返事 考二二四

委細ニ示^シ給^ヒ候條無^ク是非一候。仍^テ祖父妙嚴聖靈ノ御志ねんごろに回向いたすべく候。經文に是人於佛道決定無有疑^ト此文をひまなく御唱^へあるべく候。日月は地となり地は天となるも此經の行者ノ三惡道に落^ッる事あるべからず。恐恐謹言。

三月三日

日 蓮花押

日住禪門御返事

○上野殿御返事 徵上三〇 考三四三

故^こ上野殿御忌日の僧齋料米一たはらたしかに給^た候畢^ニ。御佛に供^しまいらせて自我偈一卷よみまいらせ候べし。孝養と申^スはまづ不孝を知^リて孝をしるべし。不孝と申^スは酉^{ゆう}夢^むと云^フ者父を打^チしかば天雷身をさ^く。班^{はん}婦^ぶと申^セし者母をのり(誓)しかば毒蛇來^リてのみ(吞)き。阿闍世王父をころせしかば白癩病の人となりき。波瑠璃王は親をころせしかば河上に火出^テて現身に無間^にをち^にき。佗人をころしたるにはいまだかくの如^くの例^なし。不孝をもて思^ふに

日住禪門御返事 (遺二八ノ一八)

千九百四十三 (外二ノ二十八)

孝養の功德のたほきなる事もしられたり。外典三千餘卷は佗事なしただ父母の孝養ばかりなり。しかれども現世をやしなひて後生をたすけず。父母の恩のたもき事は大海のごとし現世をやしなひ後生をたすけざれば一滯のごとし。内典五千餘卷又佗事なしただ孝養の功德をとけるなり。しかれども如來四十年の説教は孝養に似たれどもうの説いまだあらはれず孝が中の不孝なるべし。目連尊者の母の餓鬼道の苦をすくひしはわづかに人天の苦をすくひていまだ成佛のみち(道)にはいれず。釋迦如來は御年三十の時父淨飯王に法を説いて第四果をいせしめ給へり。母の摩耶夫人をば御年三十八の時阿羅漢果をいせしめ給へり。此等は孝養にたれども還て佛に不孝のとがあり。わづかに六道をばはなれしめたれども父母をば永不成佛の道に入給へり。譬へば太子を凡下の者となし王女を匹夫にあはせたるが如し。されば佛説云、我則墮^{セン}慳^ニ貧^ニ此事^ハ爲^サ不可^ト云云。佛は父母に甘露をれしみて麥飯を與へたる人清酒をたしみて濁酒をのませたる不孝第一の人也。波瑠璃王のごとし現身に無間大城にたち阿闍世王の如く即身に白癩病をもつさぬべかりしが。四十二年と申せしに法華經を説給て是、人雖^シ生^シ滅^ス度^ノ想^ヲ入^ル於^テ涅槃^ニ

而^モ於^テ彼^ニ求^テ佛^ノ智慧^ヲ得^ル聞^ク是^ノ經^ト。父母の御孝養のために法華經を説給しかば。寶淨世界の多寶佛も實の孝養の佛なりとほめ給。十方の諸佛もあつまりて一切諸佛の中には孝養第一の佛也と定め奉りき。これをもつて案するに日本國の人は皆不孝の仁^ヲか^シ。涅槃經の文に不孝の者は大地微塵よりも多しと説給へり。されば天の日月八萬四千の星各いかりをなし眼をいからかして日本國をにらめ給ふ。今の陰陽師の天變頻りなりと奏し申^ス是也。地^ノ天^ノ日日^ニ起^リて大海の上に小船をうかべたるが如し。今の日本國の小兒は魄^ヲをうしなひ女人は血をはく是也。貴邊は日本國第一の孝養の人なり梵天帝釋をり下^リて左右の羽となり。四方の地神は足をいただいて父母とあをぎ給^フらん。事多しといへどもとどめ候畢。恐恐謹言。

弘安三年三月八日

日蓮花押

進上 上野殿 御返事

○妙心尼御前御返事 考三〇

すず(種種)のもの給て候。たうじはのう(農)時にて人のいとまなき時。かやうにくさぐさのものどもをくり給て候事いかにも申まばかりなく候。これもひとへに故入道殿の御わかれ(別)のしのびがたきに後世の御ためにてころ候らんめ。ねんころにせ(後世)をとぶらはせ給候へばいくろばくうれしくはしますらん。とふ人もなき草むらに露しげきやうにて。さばせかい(婆娑世界)にとどめをさしをさなき(幼)ものなんどのゆくへ(行末)さかまほし。あの蘇武が胡國に十九年ふるさとの妻と子とのこひしさに雁の足につけしふみ。安部(あべ)中麻呂(なかまろ)が漢土(かんこ)にて日本へかへされざりし時。東よりいでし月をみてあのかすがの(春日野)の月よとながめしも身にあたりてころたはすらめ。しかるに法華經の題目をつねはとなへさせ給へば此の妙の文(字)御つかひ(使)に變せさせ給。或は文殊師利菩薩或は普賢菩薩或は上行菩薩或は不輕菩薩等とならせ給。ちんし(陳子)がかがみ(鏡)のとり(鳥)のつねにつげ(告)しがごとく。蘇武がめ(妻)のさぬた(礎)のこのきこへしがごとく。さばせかいの事を冥途(めいど)につげさせ給らん。又妙の文字は花のこのみとなるがごとく半月の満月となる

がごとく變じて佛とならせ給文字也。されば經に云、能持(つ)此經(つ)則持(つ)佛身(つ)。天台大師云、一一文文是真佛等云云。妙の文字は三十二相八十種好圓備せさせ給釋迦如來にてたはしますを。我等が眼つたなくして文字とはみまいらせ候也。譬へばはちす(蓮)の子(つ)の池の中に生て候がやうに候はちすの候を。としより(年老)て候人は眼くらくしてみず。よる(夜)はかげ(影)の候をやみにみざるがごとし。されども此妙ノ字は佛にてたはし候也。又此妙の文字は月也日也星也かがみ也衣也食也花也大地也大海也。一切の功德を合せて妙の文字とならせ給。又は如意寶珠のたま也。かくのごとくしらせ給べし。くはしくは又又申まべし。

五月四日

日 蓮花押

はわき殿申させ給へ

明治三十六年正月十六日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海素記)

○妙一尼御前御返事 考八三八

夫信心と申は別にはこれなく候。妻のをとこ(夫)をれしむが如くをどこの妻に命をすつるが如く。親の子をすてざるが如く子の母にはなれざるが如く。法華經釋迦多寶 十方の諸佛菩薩 諸天善神等に信を入奉りて南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申候也。しかのみならず正直捨方便 不受餘經一偈の經文を女のかがみ(鏡)をすてざるが如く男の刀をさすが如く。すこしもすつる心なく案じ給べく候。あなかしこあなかしこ。

五月十八日

日 蓮花押

妙一尼御前御返事

○諸經與ニ法華經ニ難易事 啓二七四 鈔一七五 註一七五 語三三〇 拾四一七 扶一〇三五 問テ云ク法華經の第四法師品に云ク難信難解ト云云いかなる事々や。答テ云ク此經は佛説キ給て後二千餘年にまかりなり候。月氏に一千二百餘年漢土に二百餘年ヲ經て後日本國に渡りてすでに七百餘年なり。佛滅後に此法華經の此句ヲ讀人但二人なり。所謂月氏には龍樹菩薩 大論ニ云ク譬如大藥師能以毒ヲ爲

藥ト等云云此は龍樹菩薩の難信難解の四字を讀給なり。漢土には天台智者大師と申せし人讀ニ云ク已今當説最モ爲難信難解ト云云。日本國傳教大師讀ニ云ク已説四時ノ經今説ノ無量義經當説ノ涅槃經ハ易信易解隨佗意故ニ此法華經ハ最モ爲難信難解隨自意故ニ等ト云云。問テ云ク其意如何答テ云ク易信易解は隨佗意故ニ難信難解は隨自意故ニ云云。弘法大師並日本國東寺門人をもわく法華經は顯教之内の難信難解相對密教ニハ易信易解云云。慈覺智證並門家思ツやう法華經と大日經は俱に難信難解但シ大日經ト與ニ法華經ニ相對せば法華經は難信難解大日經ハ最モ爲難信難解云云。此ニ義は日本一同也。日蓮讀ニ云ク外道ノ經ハ易信易解小乘經ハ難信難解小乘經ハ易信易解大日經等ハ難信難解大日經等ハ易信易解般若經ハ難信難解般若ト與ニ華嚴ニ華嚴ト與ニ涅槃ニ涅槃ト與ニ法華ニ迹門ト與ニ本門ト重重ノ難易あり。問テ云ク知テ此義ヲ有ル何ノ證カ。答テ云ク照ニ生死ノ長夜ヲ大燈切ニ元品ニ無明ヲ利劍ハ不レ過ニ此法門ニ歟。隨佗意者眞言宗華嚴宗等は隨佗意易信易解佛隨テ九界ノ衆生ノ意樂ニ所レ説ク經經ヲ隨佗意といふ。譬へば賢父が如ク隨ニ愚子ニ佛隨テ佛界ニ所レ説ク經ヲ隨自意といふ。譬へば聖父が愚子を如ク隨ニ日蓮付テ此義大日經華嚴經涅槃經等ヲ勘ヘ見候に皆隨佗意ノ經經也。問テ云ク其隨佗

意ノ證據如何。答テ云ク勝万(鬘)經ニ云ク無レ聞ニ非法ヲ衆生以テ人天ノ善根ヲ而成ニ熟ニ之ヲ求ル聲聞ヲ者授ケ聲聞乘ヲ求ル緣覺ヲ者授ケ緣覺乘ヲ求ル大乘ヲ者授以ニ大乘ヲ云云。易信易解之心是也。華嚴 大日 般若 涅槃等又如レ是ノ爾時ニ世尊因ニ藥王菩薩ニ告ニ八萬ノ大士ニ藥王汝見下是ノ大衆ノ中ノ無量ノ諸天 龍王 夜叉 乾闥婆 阿脩羅 迦樓羅 緊那羅 摩睺羅伽 人ト與ニ非人ト。及比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷、求ニ聲聞ヲ者求ニ辟支佛ヲ者求ニ佛道ヲ者ト。如是ノ等類咸ク於ニ佛前ニ聞ニ妙法華經、一偈一句乃至一念モ隨喜者我皆與ニ授ケ記ヲ當得ニ阿○菩提ヲ云云。如ニ諸經ノ者人ハ五戒 天ハ十善 梵ハ慈悲喜捨 魔王には一無遮 比丘、二百五十 比丘尼、五百戒 聲聞、四諦 緣覺、十二因緣 菩薩ノ六度。譬へば水ノ隨ニ器ノ方圓ニ象ノ隨レテ敵ニ出レカフこととし。法華經は不レ爾ヲ八部四衆皆一同ニ演ニ説ス法華經ヲ譬へば定木、削レ曲師子王ノ不レ嫌ニ剛弱ヲ出ニ大力ヲがごとし。以テ此明鏡ヲ見ニ聞ニ一切經ヲ大日、三部淨土、三部等無レ隱レ。而ルをいかにやしけん弘法慈覺智證の御義を本としける程に此義すでに隱没日本國四百餘年なり。珠をもつて石にかへ千日(稱禮)を凡木にうれり。佛法やうやく顛倒しければ世間モ又濁亂せり。佛法は體のごとし世間はかげのごとし體曲レば影なゝめなり。幸我一門隨テ佛意ニ自然ニ流ニ

入ス薩般若海ニ。苦世間ノ學者ノ信ニ隨任意ニ沈ニ苦海ニ。委細之旨又又可レ申ス。恐恐。

五月二十六日

日 蓮花押

富木殿御返事

明治三十五年三月二十六日下總正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ全章十丁百四行ナリ(稻田海素度記)

○窪尼御前御返事 考三四

佛の御弟子の中にあなりち(阿那律)と申せし人はこくぼん(斛飯)王の御子いね(家)にたからをみててねはしき。のちに佛の御でし(弟子)となりては天眼第一のあなりちとして三千大千世界を御覽ありし人。法華經の座にては普明如來とならせ給フ。うのささのよ(前世)の事をたづぬればひね(稗)のはん(飯)を辟支佛と申ス佛の弟子にくやう(供養)せしゆへなり。いまの比丘尼はあわ(粟)のわさごめ(早稻)山中にをくりて法華經にくやうしまいらせ給フ。いかでか佛にならせ給はざるべき。恐恐謹言。

六月二十七日

日 蓮 花 押

くぼの尼御前御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ拜照シ奉ル(稻田海素記)

○千日尼御返事

啓三三〇九 鈔二三三三 語四四〇 記下二八 拾七二〇 扶一三三六

絹染ノ袈裟一ツまいらせ候。豊後房に申候べし。既ニ法門は本國にひらまりて候。北陸道をば豊後房なびくべきに學生ならでは叶ッべからず。九月十五日巳前にいりぎいりぎまいるべし。こう入道殿の尼ぞせん(御前)の事なげき入ッて候。又こいしこいし(戀々)と申ッつたへさせ給へ。かすの聖教をば日記のごとくたんば(丹波)房にいりぎいりぎつかわすべし。山伏房をばこれより申ッにしたがいてこれへはわたすべし。山伏の現にあだされ候事悦入ッて候。

鷲目一貫五百文のり(海苔)わかめ(海藻)ほしい(干飯)しなとまの物給候畢。法華經の御寶前に申上ッて候。法華經ニ云ク若有ニ聞ク法者一無下(一)不中成佛ト云云。文字は十字にて候へども法華經を一句よみまいらせ候へば。釋迦如來の一代

聖教をのこりなく讀ムにて候なるが。故に妙樂大師ノ云ク若弘ニ法華一凡消ニ一義ヲ皆混ニ一代ヲ窺ニ其始末ヲ等云云。始ト申者華嚴經 末ト申は涅槃經。華嚴經ト申は佛 最初成道の時法慧 功德林等の大菩薩 解脱月菩薩ト申菩薩の請に趣ヒて佛前にてとかれて候。其經は天竺 龍宮城 兜率天等は知ラず日本國にわたりて候は六十卷八十卷四十卷候。末ト申は涅槃經此も月氏龍宮等は知ラず我が朝四十卷三十六卷二卷等也。此より外の阿含經方等經般若經等は五千七千餘卷なり。此等の經經は見ずきかす候へども但法華經の一字一句よみ候へば彼彼の經經を一字もをどさずよむにて候なるが。譬へば月氏日本ト申は二字ニ字に五天竺十六の大國五百、中國十千の小國。無量の粟散國の大地大山草木人畜等をさされるがごとし。譬へば鏡はわづかに一寸二寸三寸四寸五寸と候へども。一尺五尺の人をもうかべ一丈三丈十丈百丈の大山をもうつすがごとし。されば此の經文をよみて見候へば此の經をきく人は一人もかけず佛になると申文なり。九界六道の一切衆生各各心心かわれり。譬へば二人三人乃至百千人候へども一尺の面の内しち(實)ににたる人一人もなし。心のにざるゆへに面もにす。まして一人十人六道九界の衆生の心いかなが

わりて候らむ。されば花をあい(愛)し月をあいしすき(愛)をこのみにが(苦)きをこのみ。ちいさき(小)をあいし大なるをあいしいろなる。善をこのみ悪をこのみしなじななり。かくのごとくいろいろに候へども。法華經に入りぬれば唯一人の身一人の心なり。譬へば衆河の大海に入りて同一鹹味なるがごとく衆鳥の須彌山に近(ツキ)て一色なるがごとし。提婆が三逆も羅睺羅が二百五十戒も同(ツキ)く佛になりぬ。妙莊嚴王の邪見も舍利弗が正見も同授記をかをほれり。此即無一不成佛のゆへずかし。四十餘年の内の阿彌陀經等には舍利弗が七日の百萬反大善根をとかれしかども未顯眞實とさらわれしかば。七日の(湯)をわかして大海になげたるがごとし。ぬ(章)提希(觀)經をよみて無生忍を得しかども。正直捨方便とすてられしかば法華經を信せずば返て本の女人なり。大善を用(ユ)事なし法華經に値(ハ)ざればなにかせん。大悪をも歎く事無れ一乘を修行せば提婆が跡をもつぎなん。此等(皆)無一不成佛の經文のむなしからざるゆへずかし。されば故阿佛房の聖靈は今いづくにかをはずらんと人は疑(ツ)ども。法華經の明鏡をもつて。其の影をうかべて候へば靈鷲山の山の中に多寶佛の寶塔の内に東むき(向)にをばすと日蓮は見まいらせて候。若此事うらごとなて

候わば日蓮がひがめにては候はず。釋迦如來の世尊法久後要當說眞實の御舌も多寶佛の妙法華經皆是眞實の舌相も。四百萬億那由佗の國土にあさ(麻)のごとくいね(稻)のごとく星のごとく竹のごとく。かく(竹)とすきまもなく。烈(ツ)つてをばしましし諸佛如來の一佛もかけ給はず。廣長舌を大梵王宮に指し付(ツ)てをばせし御舌どものくぢら(鯨)の死(ツ)てくされ(腐)たるがごとく。いわし(鱈)のよりあつまりてくされたるがごとく皆一時にくち(朽)くされて。十方世界の諸佛如來大妄語の罪にをとされて。寂光の淨土の金るり(琉璃)大地はたとわれて提婆がごとく無間大城にかつばど入り。法蓮香比丘尼がごとく身より大妄語の猛火(猛火)ばどいでて。實報華王の花のろの。一時に灰燼(灰燼)の地となるべし。いかでかさる事は候べき。故阿佛房一人を寂光の淨土に入(レ)給はずば諸佛は大苦に墮(テ)給べし。ただをいて物を見よただをいて物を見よ。佛のまこと(實)らら(虛)事は此(レ)にて見奉(ル)べし。さてはをどこ(男)ははしら(柱)のごとし女はなかわ(柵)のごとし。をどこは足のごとし女人は身のごとし。をどこは羽のごとし女はみ(身)のごとし羽とみとべちべちになりなばなにをもつてかどぶべき。はしらたうれ(柱)なばなかは地に墮(テ)なん。いへ(家)にを

とこなければ人のたましるなきがごとし。くうじ(公事)をたれにかいぬあわせん。よき物をばたれにかやしなうべき。一日二日たがいしをだにもをばつかなくをもいしに。この三月の二十一日にわかれにしが。とがもまち(待くらせどまみゆる事なし今年もすでに七つき(月)になりぬ。たといわれこう來らずともいかにをどづれ(音信)はなかるらん。ちりし花も又さきぬたちも葉も又なりぬ。春の風もかわらず秋のけしきもこのごとし。いかにこの一事のみかわりゆきて本のごとくながるらむ。月は入って又いでぬ雲はきへて又來る。この人人の出でてかへらぬ事こう天もうらめしく地もなげかしく候へ。さころをばすらめいりぎいりぎ法華經をらうれら(糧料)とたのみまいらせ給て。りやうせん(嶺山)淨土へまいらせ給てみまいらせさせ給べし。抑子はかたきと申す經文もあり世人爲子造衆罪の文なり。鵬(鷹)と申すよりはをやは慈悲をもつて養へば子はかへりて食とす梟鳥と申すよりは生は必ず母をくらう。畜生かくのごとし。人の中にもはるり王は心もゆかぬ父の位を奪取る。阿闍世王は父を殺せり。安祿山は養母をころし安慶緒と申す人は父安祿山を殺す。安慶緒は又史師明に殺ぬ史師明は史朝義と申す子に又ころされぬ。此は敵と申すもことわりなり。善星比丘と申す教主釋尊の御子也。苦得外道をかたらいて度度父の佛を殺し奉らんとす。又子は財と申す經文もはんべり所以經文云其男女追修福有テ大光明照シ地獄令其父母顯信心等申す。設佛説ならずとも眼の前に見えて候。天竺に安足國王と申せし大王はあまりに馬をこのみてかい(飼)しはどに。後にはかいなれて鈍馬を龍馬となすのみならず牛を馬ともなす結句は人を馬となしてのり給さ。其國の人あまりになげきしかば知ぬ國の人を馬となす。佗國の商人のゆたりしかば藥をかいて馬となして御まやう(厩)につなぎつけぬ。なにとなげれども我が國はこいしき上妻子ことにこいしくしのび(忍)がたかりしかども。ゆるす事なかりしかばかへる事なし。又かへりたりともこのすがた(善)にては由なかるべし。ただ朝夕にはなげきのみにしてありし程に。一人ありし子父のまちどき(待時)すぎしかば。人にや殺られたるらむ又病にや沈むらむ子の身としていかでか父をたづねざるべきといでたちければ。母なげくらく男も佗國よりかへらず一人の子もすててゆきなば我がかんがせんとなげきしかども。子ちのあまりにこいりしかりしかば安足國へ尋ゆきぬ。ある小家にやどりて候しか

は家の主申あつじやう。あらふびんやわどのはをさなき物なり而もみめかたち人にすぐれたり。我は一人の子ありしが佗國にゆきてしに(死)やしけん又いかにてやあるらむ。我が子の事ををもへばわどのをみてめ(目)もあてられず。いかにと申せば此國は大なるなげき有リ。此國の大王あまり馬をこのませ給たまて不思議の艸を用もち給へり。一葉せばき草をくわすれば人馬ひととなる。葉ノ廣ひろ草をくわすれば馬人うまとなる。近ちかも佗國の商人あきびとの有ありをこの草をくわせて馬となして第一の御まやに祕藏してつながれたりと申まを。此男これをさいてさては我父は馬と成りてけりとをもひて。返かへつて問と其馬は毛はいかにとといければ。家ノ主答あつじ云、栗毛なる馬の肩白くぶちたりと申まを。此物此事をききてとからはからいて王宮に近づき葉ノ廣ひろき草をぬすみとりて。我父の馬になりたりしに食くせしかば本のごとく人となりぬ。其國の大王不思議なるれもひをなして孝養の者なりとて父を子にあづけ給へり。其よりついに人を馬となす事はとどめられぬ。子ならずはいかでか尋たずゆくべき。目連尊者は母の餓鬼の苦をすくひ淨藏淨眼は父の邪見をひるがいます。此こよき子の親の財うらとなるゆへかかし。而しかに故阿佛聖靈は日本國北海の島のいびすのみ(夷身)なりしかども後

生ををりて出家して後生を願ねがしが。此人日蓮に値あて法華經を持もて去年の春佛になりぬ尸陀山の野干やかんは佛法に値あて生をいとひ死を願ねがて帝釋と生なたり。阿佛上人は濁世の身を厭いとて佛になり給たまぬ。其子藤九郎守綱は此の跡をつぎて一向法華經の行者となりて。去年は七月二日父の舍利を頸くびに懸かけて一千里の山海を経て甲州波木井身延山はきりに登のぼりて法華經の道場に此こをたさめ。今年は又七月一日身延山みづきんじやまに登のぼりて慈父のはかを拜見す。子にすぎたる財うらなし子にすぎたる財うらなし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

七月二日

日 蓮 花 押

故阿佛房尼御前御返事

明治三十五年七月三十一日佐渡阿佛妙宣寺ニ於テ御直蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ全章二十一紙ナリ
(稻田海素庵記)

○上野殿御返事 考三四二

去六月十五日のけさん悦いひ入いつて候。さてはかうぬし(神主)等が事いままでかかへをかせ給たまて候事ありがたくをばへ候。ただしなひは法華經をあたませ給たまて候へども。うへにはた(他)の事によせて事かづけにくま(憎)るかのゆへに。あつわら(熱原)のものに事をよせてかしてこゝをもせかれ候ころ候ぬれ。さればとて上かみに事をよせてせかれ候はんに御もちる候はずは物をばへぬ人にならせ給たまべし。をかせ給たまてあしかりぬべきやうにて候わば。しばらくかうぬし等はこれへとをばへ候べし。めこ(妻子)なんどはうれに候どもよも御たづねは候はじ。事のしづまるまでうれにをかせ給たまて候わばよろしく候なんをばへ候。よ(世)のなかは上かみにつけ下しもによせてなげきころをく候なよ(世)にある人人をばよになき人人はきじ(態)のたか(鷹)をみがき(俄鬼)の毗沙門をたのみがごとく候へども。たかはわし(鷲)につかまれびしやもんはすら(脛羅)にせめらる。りのやうに當時日本國のたのしき人人は蒙古國の事をききてはひつじ(羊)の虎の聲を聞きがごとし。また筑紫つくしへれもむきていとをしきめ(妻)をはなれ子をみぬは皮をはぎ肉をやぶるがごとくにころ候らめ。いわうやかの國よりたしよせ(押寄)なば蛇の口のかゝる(蟻)はうちやうし(庵丁師)がまないた(蛆)にをけるこゝろふな(鯉鱒)のこゝろれもはれ候らめ。今生はさてをきぬ命きぬなば一百三十六の地獄に墮おて無量劫(經)べし。我等は法華經をたのみまいらせて候へば。あさきふち(淺淵)に魚のすむが。天くもりて雨のふらんとするを魚のよろこぶがごとし。しばらくの苦ころ候どもついはたのしかるべし。國王一人の太子のごとしいかでか位につかざらんとればしめし候へ。恐恐謹言。

弘安三年七月二日

日 蓮花押

上野殿御返事

人にしらせずして。ひろかにをばせ候べし。

明治三十六年正月十五日富士大石寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ卅三丁左「ひつじ」戸御正本ノ三紙丈ヲ拜照シ奉リ餘ハ本満寺本ニ依テ校正ス(稲田海素慶記)

○淨藏淨眼御消息 微下一 考四四八
きごめ(生米)の俵一 瓜籠一 根芋 品品の物給候畢。樂徳と名付ける長者に
身を入れて我身も妻も子も夜も晝も責遣れける者が。餘りに責られ堪へが
たさに隠れて佗國に行きて其國の大王に宦仕へける程にさりもの(權家)に成りて
關白と成りぬ。後に其國を力として我本主の國を打取りぬ。其時本主此關白
を見て大に怖れ前に悪く當りぬるを悔ひかへして宦仕へ様様の財を引きける。
前に負ぬる物の事は思ひもよらず今只命のいさん事をはげむ。法華經も又
斯の如く。法華經は東方の藥師佛の主 南方西方北方上下の一切の佛の主也。
釋迦佛等の佛の法華經の文字を敬ひ給ふことは民の王を恐れ星の月を敬ふが
如し。然るに我等衆生は第六天の魔王の相傳の者。地獄餓鬼畜生等に押籠
られて氣もつかず朝夕獄卒を付て責る程に。兎角して法華經に懸り付ぬ
れば釋迦佛等の十方の佛の御子とせさせ給へば。梵天帝釋だにも恐れて寄
付ず何に況や第六天の魔王をや。魔王は前には主なりしかども今は敬ひ畏
て。あしうせば法華經十方の諸佛の御見參にあしうや入らんずらんと恐れ 畏
て供養をなす也。何にしても六道の一切衆生をば法華經へつけじとはげむ

也。然るに何なる事にやをはすらん皆人の憎み候日蓮を不便とねばして。か
く遙遙と山中へ種種の物送りたび候事一度二度ならず。ただごとにあらず偏
へに釋迦佛の入替らせ給へるか。又をくれさせ給ひける御君達の御佛になら
せ給て父母を導かんために御心に入り替らせ給へるか。妙莊嚴王と申せし王
は惡王なりしかども御太子淨藏淨眼の導かせ給しかば父母二人共に法華經
を御信用有りて佛にならせ給し。是もさにてや候らんあやしく覺候。
甲斐公が語りしは常の人よりもみめ形も勝れて候し上。心も直くて智慧賢く。
何事に付てもゆゆしかりし人の疾はかなく成りし事。哀れさよと思ひ候しが。
又 情思へば此子なき故に母も道心者となり父も後世者に成りて候は只ども
覺候はぬに。又皆人の惡み候法華經に付かせ給へば。偏へに是なき人の二人
の御身に添て勧め進らせられ候にやと申せしがさもやと覺候。前前は只荒
増の事かと思て候へば是程御志の深く候ひける事は始めて知て候。又若やの
事候はばくらき闇に月の出るが如く妙法蓮華經の五字 月と露れさせ給へ
し。其月の中には釋迦佛十方の諸佛乃至前に立させ給ひし御子息の露れさせ
給べしと思召せ。委は又又申へし。恐恐謹言。

七月七日

日 蓮 花 押

○妙一女御返事

啓一九七四

妙一八二八

語三四八

拾五三三

扶一一三二

問云ク日本國ニ有リ六宗七宗八宗ニ何宗ニ立リ即身成佛ヲ耶。答テ云ク傳教大師ノ意ハ唯限リ法華經ニ弘法大師ノ意ハ唯限リ眞言ニ。問テ云ク其證據如何。答テ云ク傳教大師ノ秀句ニ云ク當ニ知ル陀宗所依ノ經ニ都テ無シ即身入ニ雖ニ一分即入ニ推テ八地已上ニ不レ許ニ凡夫身ヲ天台法華宗ニ具ニ有ニ即入ノ義ニ云云。又云ク能化所化俱ニ無シ歷劫ニ妙法經方即身成佛ニ等ニ云云。又云ク當ニ知ル此文ニ問下所ニ成佛一人上點ニ此經ノ威勢ヲ也ト等云云。此釋ノ心ハ即身成佛ハ唯限リ法華經ニ也。問テ云ク弘法大師ノ證據如何。答テ云ク出法大師ノ二教論ニ云ク菩提心論ニ云ク唯眞言法ノ中ニ即身成佛故ハ是說ニ三摩地法ヲ於テ諸教ノ中ニ闕テ而不レ書サ。論曰ク此論ハ者龍樹大聖ノ所造千部ノ論ノ中ニ祕藏肝心ノ論也。此中ニ謂テ諸教ト者佗受用身及ヒ變化身等ノ所說ノ法諸ノ顯教也。是說ニ三摩地法ト者自性法身ノ所說祕密眞言ノ三摩地ノ行是也謂テ金剛頂十萬頌ノ經等ト是也。問テ云ク此兩大師所立ノ義水火也信レ何乎。答テ云ク此二大師ハ俱ニ大聖也同年ニ入唐シテ兩人同ク傳テ受テ眞言ノ密教ヲ。傳教大師ノ兩界ノ師ハ順曉和尚弘法大師ノ

兩界ノ師ハ慧果和尚順曉慧果ノ一人俱ニ不空ノ御弟子也。不空ニ藏ハ大日如來六代ノ御弟子也。相傳ト申シ本身といひ世間の重ずる事日月のごとし左右の臣にことならず。不學の虜にうけて是非しがたし。定テ惡名天下に充滿シ大難ヲ其身に招ク歟雖然試ニ難じて糾ニ明兩義ノ是非ヲ。問テ云ク弘法大師ノ即身成佛ハ限ニ眞言ニ何ノ經文何ノ論文乎。答テ云ク弘法大師ハ依ル龍樹菩薩ノ菩提心論ニ也。問テ云ク其證據如何。答テ云ク弘法大師ノ二教論ニ引テ菩提心論ヲ云ク唯眞言法ノ中ニ乃至於ニ諸教ノ中ニ闕テ而不レ書サ云云。問テ云ク有ニ經文ニ乎。答テ云ク弘法大師ノ即身成佛義ニ云ク六大無礙常ニ瑜伽四種ノ曼荼各不レ離ニ三密加持速疾ニ顯ル重重帝網名ニ即身ニ法然具ニ足薩般若ノ心王心數過ニ刹塵ニ各具ニ五智無際智ヲ圓鏡力ヲ故ニ實ノ覺智ト等云云。疑テ云ク此釋ハ依ル何ノ經文ニ乎。答テ云ク依ル金剛頂經大日經等ニ。求テ云ク其經文如何。答テ云ク弘法大師出ニ其證文ヲ云ク修ニ此三昧ヲ者ハ現ニ證ニ佛菩提ヲ文。又云ク不レ捨テ於此身ヲ速ニ得シ神境通ヲ遊ニ歩シ大空位ニ而成ニ身祕密ヲ文。又云ク我覺本不生ニ文。又云ク諸法ハ本不生云云。難ニ云ク此等の經文は大日經金剛頂經の文也。雖然經文は或は大日如來の成正覺の文或は眞言ノ行者の現身ニ得ニ五通の文。或は十回向ノ菩薩ノ現身に歡喜地を證得する文にして猶非ニ

生身得忍^{カニ}何^{カニ}況^{カニ}即身成佛をや。但し菩提心論は一には經に非ず論を本とせば背上向下の料相^{料相}違^違ス。依法不依人之佛説^{佛説}。東寺、眞言師惡^惡ニ口^口日蓮^{日蓮}云、汝は凡夫也弘法大師は三地の菩薩也。汝未^未非^非生身得忍^{生身得忍}ニ弘法大師は帝、眼前に現^現ニ即身成佛^{即身成佛}。汝未^未承^承ニ救宣^{救宣}大師にあらず日本國ノ師にあらず等云云是^是。慈覺大師は傳教義眞^{傳教義眞}の御弟子智證大師は義眞慈覺の御弟子安然和尚は安慧和尚の御弟子也。此三人ノ云、法華天台宗は理祕密の即身成佛 眞言宗は事理俱密の即身成佛、云云。傳教弘法の兩大師何れもをろかならねども聖人は偏頗なきゆへに。慈覺智證安然の三師は傳教の山に栖^栖といへども其義は弘法東寺の心也。隨^隨ッて日本國四百餘年は異義なし汝不肖の身としていかんが此惡義を存ずるや是^是。答^答テ云、惡口をはき惡心をこそさは汝にをいては此義申^申まじ正義を聞くと申さば申^申べし。但し汝等がやうなる者は物をいはすばつまり(詰)めをもうべし。もうべし惡心をこそさんよりも惡口をなさんよりもきららとして候經文を出^出して。汝が信じまいらせたる弘法大師の義をたすけよ。惡口惡心をもてをもうに經文には即身成佛無^無か。但し慈覺智證安然等の事は此又覺證の兩大師 日本にして教大師を信ずといへども。漢土にわた

りて有^有し時元政 法全等の義を信じて心には教大師の義をすて。身は其山に住すれどもいつわりてありしなり。問^問テ云、汝が此義はいかにしてをもひいだしけるや。答^答テ云、傳教大師の釋^釋ニ云、當^當知^知此文^{此文}問^問下^下所^所ニ成佛^{成佛}一人^{一人}顯^顯ニ此經^{此經}、威勢^{威勢}也とかかれて候は。上の提婆品の我於海中の經文をかきのせてあるはして候。釋^釋の心はいかに人申^申ども即身成佛の人なくば用^用ユべからずとかかせ給へり。いかにも純圓一實の經にあらずば即身成佛はあるまじき道理あり。大日經金剛頂經等の眞言經には其人なし又經文を見るに兼^兼但^但對^對帶^帶の旨分明也。二乗成佛なし久遠實成あとをけづる。慈覺智證は善無畏金剛智不空三藏の釋にたばらかされてをはするか。此人人は賢人聖人とはをもへども遠^遠キを貴^貴ッて近^近キをあなづる人也。彼三部經に印と眞言とあるにばかされて大事の即身成佛の道をわすれたる人人也。然を當時叡山の人人法華經の即身成佛のやうを申^申やうなれども慈覺大師安然等の即身成佛の義也。彼人人の即身成佛は有名無實の即身成佛也其義專^專ラ傳教大師の義に相違せり。教大師は分段^{分段}の身を捨^捨テても捨^捨テずしても法華經の心にては即身成佛也。覺大師の義は分段^{分段}の身をすつれば即身成佛にあらずとをもはれたるがあへて即身成佛の義をしら

ざる人人也。求云^ク慈覺大師は傳教大師に値^ヒ奉^リて習^ヒ相傳せり汝は四百餘年の年紀をへだてたり如何。答云^ク師の口より傳^ルる人必^ズあやまりなく後にたづねあきらめたる人をろ^ウかならば。經文をすてて四依の菩薩につくべきか。父母の讓^リ狀をすてて口傳を用^ユべきか。傳教大師の御釋無用也慈覺大師の口傳眞實なるべきか。傳教大師の秀句と申^ス御文に一切經にな^キ事を十いださ^レれて候に。第八に即身成佛化導勝とかかれて次下に當^ニ知^ル此文問^下所^ニ成佛^一人^上顯^ニ此經^一威勢^也乃至當^ニ知^ル佗宗所依^ノ經^一都^テ無^シ即身入^一等云云。此釋を背^キて覺大師の事理俱密の大日經の即身成佛を用^ユべきか。求^テ云^ク教大師の釋の中に菩提心論の唯^の字^ヲ用^ヒざる釋有^リや不^ヤ。答^テ云^ク秀句ニ云^ク能化所化俱^ニ無^ク歷劫^一妙法經力即身成佛^等云云。此釋は菩提心論の唯^の字^ヲ用^ヒすと見^ヘて候。問^テ云^ク菩提心論を用^ヒざるは龍樹を用^ヒざるか。答^テ云^ク但恐^{譯者ノ}曲會私情の心也。疑^ラ云^ク不^レ用^ニ譯者^ヲ法華經の羅什をも不^レ可^レ用^ユ歟。答^テ云^ク羅什には現證あり不空には現證なし。問^テ云^ク其語如何。答^テ云^ク舌の燒^ケざる證なり具^サには聞^クべし。求^テ云^ク覺證等は此事を知らざる歟。答^テ云^ク此兩人は信^ニ無畏等^一三藏^ヲ故^ニ不^レ用^ニ傳教大師^ノ正義^ヲ歟此則人を信じて法をすてたる人人なり。問^テ

云^ク日本國にいまだ覺證然等を破^シたる人をさかす如何。答^テ云^ク弘法大師の門家は覺證を用^ヒべしや覺證の門家は弘法大師を用^ユべしや。問^テ云^ク兩方の義相違すとはいへども汝が義のごとく水火ならず誹謗正法とはいわす如何。答^テ云^ク誹謗正法者其相貌如何。外道が佛教をろしり小乗が大乗をろしり灌大乘が實大乘を下^シ實大乘が權大乘に力をあわせ。證するところは勝を劣^トという。法にろむくがゆへに謗法とは申^スか。弘法大師の大日經を法華經華嚴經に勝^レたりと申^ス證文ありや。法華經には華嚴經大日經等を下^シ文分明也所謂已今當等也。弘法雖^レ尊^{背^ニ釋迦多寶十方分身諸佛^ニ大科難^シ免^レ寄^セ事^ヲ於權門^ニ日蓮を}をどさんより但^テ正文を出^サせ。汝等は人をかたうとせり日蓮は日月帝釋梵王をかたうとせん。日月天眼を開^テて御覽あるべし。將^タ又日月の宮殿には法華經と大日經と華嚴經とをばすとけうしあわせて御覽候へ。弘法慈覺智證安然の義と日蓮が義とは何れがすぐれて候。日蓮が義もし百千に一^ツも道理に叶^テて候はばいかにたすけさせ給はぬぞ。彼人人の御義もし邪義ならばいかに日本國の一切衆生の無限の報^トをへ^得候はんをば不便^トはをばせ候はぬぞ。日蓮が二度の流罪結句は頸に及^シしは釋迦多寶十方の諸佛の御頸を切^ラんとす